

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第125集

# 矢崎遺跡Ⅱ

平成7年度一級河川大津谷川河川改修工事及び  
平成11年度一級河川大津谷川住宅宅地関連公共施設等整備  
促進（広域一般）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2001

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第125集

# 矢崎遺跡 II

平成7年度一級河川大津谷川河川改修工事及び  
平成11年度一級河川大津谷川住宅宅地関連公共施設等整備  
促進（広域一般）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2001

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

# 序

矢崎遺跡は静岡県島田市落合に所在する遺跡である。本遺跡は大津谷川と尾川が合流する地点に立地するが、この遺跡は1989年刊行の『静岡県遺跡地図Ⅱ』に掲載されていないことからも分かるように、近年新たに発見された遺跡である。

当研究所は平成5年度に矢崎遺跡の第1次調査を実施しており、今回は第2次調査となる。他にも近隣に所在する石成遺跡や上反方遺跡の調査も実施し、その成果を発掘調査報告書として刊行してきた。周辺では島田市教育委員会により落合遺跡や山王前遺跡をはじめとする多数の遺跡が調査されているが、これらによって落合地区の埋もれた歴史が徐々に明らかになりつつあるなかに、今回の調査成果が加わったことになる。

今回は平成7年度と平成11年度の2度にわたって発掘調査を実施し、中世前期および古墳時代中期の集落跡、そして弥生時代後期から古墳時代にかけての水田跡を検出した。平安時代後期から中世前期までの落合地区は伊勢神宮領大津御厨の一部であったと考えられているが、文献史料も少なく実像は不明瞭であった。しかし近年、矢崎遺跡の周辺に所在する石成遺跡、落合遺跡、居倉遺跡等といった大津御厨に関連する遺跡の発掘調査によって、その実体が解明されようとしている。今回は調査対象面積が狭いために集落全域を明らかにすることはできなかったが、大津谷川流域における御厨関連の集落研究に一石を投じることができたと考えている。古墳時代中期については島田市周辺域での調査例が極めて少ないため、集落跡である矢崎遺跡の存在は貴重である。中期の土師器が量的にまとまって出土したことと成果のひとつとして数えられよう。また水田跡についても畦畔の作り替えや水田の変遷を明らかにすることができた。これらの成果を得た本書が、落合地区のみならず島田市域の歴史解明の一端を担うことができれば幸いである。

最後になったが、調査の実施ならびに報告書の作成にあたっては静岡県島田土木事務所、静岡県教育委員会、島田市教育委員会の各位に多大な理解と協力をいただいた。ここに関係各位に深謝の意を表すとともに、調査に従事した当研究所所員および作業に参加された多くの人々の労苦に感謝するものである。

2001年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所  
所長 齋藤 忠

## 例　　言

- 1 本書は静岡県島田市落合地先に所在する矢崎遺跡の第2次発掘調査報告書である。
- 2 現地発掘調査は1区を平成7年度一級河川大津谷川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、また2区を平成11年度一級河川大津谷川住宅宅地関連公共施設等整備促進（広域一般）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として静岡県島田土木事務所からの委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
- 3 資料整理は平成12年度一級河川大津谷川住宅宅地関連公共施設等整備促進（広域一般）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として実施した。
- 4 確認調査及び1区の現地発掘調査は平成7年10月から平成8年3月まで実施した。また2区の現地発掘調査は平成11年9月から平成12年3月まで実施した。資料整理は平成12年8月から平成13年3月まで実施した。
- 5 調査の体制は次のとおりである。

平成7年度

所長 斎藤 忠 副所長 池谷和三 常務理事 三村田昌昭 調査研究部長 小崎章男  
調査研究部次長 栗野克巳 調査研究二課長 佐野五十三  
総務課長 山梨弘志 会計係長 八木利眞  
調査研究員 中鉢賢治、松倉金吾

平成11年度

所長 斎藤 忠 副所長 山下 晃 常務理事 伊藤友雄 調査研究部長 佐藤達雄  
調査研究部次長 佐野五十三 調査研究二課長 遠藤喜和  
総務課長 杉木敏雄 会計係長 大石真二  
調査研究員 中川律子、青木 修

平成12年度

所長 斎藤 忠 副所長 山下 晃 常務理事 伊藤友雄 調査研究部長 佐藤達雄  
調査研究部次長 及川 司 資料課長 大石 泉  
総務課長 杉木敏雄 会計係長 大橋 薫  
主任調査研究員 西尾太加二（保存処理） 調査研究員 青木 修

- 6 現地のグリッド設定及び空中写真測量、また2区の遺構実測を株式会社フジヤマに委託した。
- 7 木製品の樹種同定及び保存処理は主任調査研究員 西尾太加二がおこなった。また本書の遺物写真撮影は技術作業員 杉山すず代がおこなった。
- 8 本書の執筆は調査研究員 青木修がおこなった。
- 9 本書の編集は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所がおこなった。
- 10 発掘調査資料は、すべて静岡県教育委員会が保管している。

## 凡　例

本書の記述については、以下の基準に従い、統一をはかった。

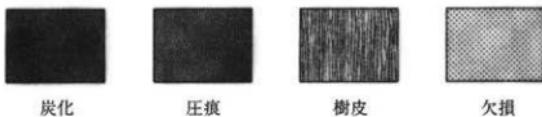
- 1 本書で使用した方位は、すべて国土座標（平面直角座標VII系）の方位である。
- 2 遺構・遺物の標記は次のとおりである。

遺　構		遺　物	
S A	杭列	S H 挖立柱建物跡	P 土器
S B	竪穴住居跡	S K 畦畔	Pt 土製品
S D	溝状遺構	S P 小穴 (Pit)	S 石製品
S E	井戸跡	S R 流路跡	W 木製品
S F	土坑	S X その他	M 金属製品

- 3 グリッド杭とグリッドのそれぞれの名称については、下記のように設定した。



- 4 木製品実測図中のスクリーントーンは次のとおりである。



- 5 土層及び土器の色調の記述には、新版『標準土色帖』(農林水産技術会議事務局監修 1994年版) を用いた。

- 6 遺物一覧表及び観察表中の法量における（）は、復原実測による推定値である。

# 目 次

序

例言

凡例

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡周辺の環境	
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の概要	
第1節 調査の方法	8
第2節 調査の経緯	10
第3節 遺跡の層序	12
第4章 中世	
第1節 概要	16
第2節 遺構及び出土遺物	19
1. 堀立柱建物跡・柱穴列	
2. 井戸跡	
3. 溝状遺構	
第3節 遺構外出土遺物	32
第4節 出土遺物の計数調査	39
第5章 古墳時代	
第1節 概要	48
第2節 遺構及び出土遺物	48
1. 積穴住居跡	
2. 土坑	
3. 溝状遺構	
4. 流路跡	
第3節 遺構外出土遺物	55
第6章 弥生時代から古墳時代	
第1節 概要	66
第2節 遺構	66
第3節 遺物	72
第7章 まとめ	
第1節 中世	79
第2節 古墳時代	80
第3節 弥生時代から古墳時代	82

## 挿図目次

第1図	遺跡位置図	3
第2図	周辺遺跡図	4
第3図	グリッド設定図	9
第4図	試掘坑配置図	14
第5図	調査区内土層柱状図	15
第6図	第1面全体図	17
第7図	S H 9 0 1	20
第8図	S H 9 0 2 · 9 0 3 · 9 0 4	21
第9図	柱穴出土遺物	22
第10図	S E 5 0 1 及び出土遺物	24
第11図	S E 5 0 1 出土遺物	25
第12図	S E 5 0 6 及び出土遺物	26
第13図	S E 5 0 6 出土遺物	27
第14図	溝状遺構	29
第15図	S D 2 0 4 · 2 0 5 · 5 0 9 及び出土遺物	31
第16図	遺構外出土遺物（中世1：土器）	34
第17図	遺構外出土遺物（中世2：土器）	35
第18図	遺構外出土遺物（中世3：土器）	36
第19図	遺構外出土遺物（中世4：土器）	37
第20図	遺構外出土遺物（中世5：土製品・金属製品・木製品）	38
第21図	第2面全体図	49
第22図	S B 5 9 4 · S F 5 9 2 · S D 4 9 9	51
第23図	S R 2 0 3	52
第24図	S R 2 0 3 出土遺物	53
第25図	遺構外出土遺物（古墳時代1：土器）	56
第26図	遺構外出土遺物（古墳時代2：土器）	57
第27図	遺構外出土遺物（古墳時代3：土器）	58
第28図	遺構外出土遺物（古墳時代4：土器）	59
第29図	第3面全体図・S K 8 5 2	67
第30図	S A 8 5 3 · 8 5 6 · 8 5 7 · S K 8 5 5 檢出状況	69
第31図	2区S K 8 5 5解体状況・出土遺物（弥生～古墳時代1：土器）	70
第32図	2区耕作痕	71
第33図	出土遺物（弥生～古墳時代2：木製品）	75
第34図	出土遺物（弥生～古墳時代3：木製品）	76
第35図	出土遺物（弥生～古墳時代4：木製品）	77

## 挿表目次

第1表	遺跡一覧表	4
第2表	1区調査工程表	10
第3表	2区調査工程表	11
第4表	山茶碗破片計数表	41
第5表	調査区内出土山茶碗破片分布表	41
第6表	中世器種組成表	42
第7表	中世土器一覧表	43
第8表	中世石製品・土製品・金属製品一覧表	47
第9表	中世木製品一覧表	47
第10表	古墳時代土器觀察表	60
第11表	古墳時代木製品一覧表	65
第12表	弥生～古墳時代土器觀察表	78
第13表	弥生～古墳時代木製品一覧表	78

## 図版目次

図版 1	1. 遺跡周辺環境	2. 遺跡遠景
図版 2	1. 1区調査前状況	2. 2区調査前状況
図版 3	1. 2区北壁土層堆積状況	2. 1区南端の近代河道跡
図版 4	1. 1区第1面北側全景	2. 1区第1面南側全景
	3. 2区第1面全景	
図版 5	1. 1区SH901	2. 1区SP119
	3. 1区SP111	4. 2区SP541
	5. 2区SP537	
図版 6	1. 2区SE501	2. 2区SE501掘り方土層堆積状況
図版 7	1. 2区SE506	2. 2区SE506井戸枠除去後状況
図版 8	1. 2区SD189	2. 1区SD189
図版 9	1. 2区SD133	2. 1区SD166
図版 10	1. 1区SD195	2. 1区SD204
	3. SD204遺物出土状況 (57)	4. SD204遺物出土状況 (58)
図版 11	中世土器1	
図版 12	中世土器2	
図版 13	中世土器3	
図版 14	中世土器4	
図版 15	中世土器5	
図版 16	中世土器6	

図版 17 中世土器 7・木製品 1・石製品・土製品・金属製品

図版 18 中世木製品 2

図版 19 1. 1区第2面全景

2. 2区第2面全景

図版 20 1. 1区第2面柱穴群検出状況

2. 2区遺物出土状況 (326)

3. 1区 S P 4 7 9

図版 21 1. 2区 S B 5 9 4

2. 2区 S B 5 9 4 部分拡大

図版 22 1. 2区 S F 5 9 2

2. 1区 S D 4 9 9

図版 23 1. 2区 S R 2 0 3

2. 1区 S R 2 0 3 土層堆積状況

3. 2区 S R 2 0 3 遺物出土状況 (278)

4. 2区 S R 2 0 3 遺物出土状況 (280)

図版 24 古墳時代土器 1

図版 25 古墳時代土器 2

図版 26 古墳時代土器 3

図版 27 古墳時代土器 4・木製品

図版 28 1. 1区第3面全景

2. 2区第3面全景

図版 29 1. 2区西壁土層堆積状況 (南側半分)

2. 2区西壁土層堆積状況 (北側半分)

3. 1区 S K 8 5 5 遺物出土状況 (横樋)

4. 2区 S K 8 5 5 遺物出土状況 (358)

図版 30 1. 2区 S K 8 5 2

2. 2区 S A 8 5 3 南側の耕作痕

3. 1区 S A 8 5 3 南側の耕作痕

図版 31 1. 1区 S A 853・S K 855・S A 856

2. 2区 S A 853・S K 855・S A 857

図版 32 1. 2区 S K 8 5 5 解体状況

2. 2区 S K 8 5 5 矢板列

3. 弥生～古墳時代土器

図版 33 弥生～古墳時代木製品 1

図版 34 弥生～古墳時代木製品 2

# 第1章 調査に至る経緯

矢崎遺跡は平成5年度に最初の調査が実施されるまでは未周知の遺跡であった。そのことは1989年発行の『静岡県文化財地図Ⅱ』に本遺跡が記載されていないことからも伺える。しかし平成5年度に財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が大津谷川と尾川の合流点北側で発掘調査を実施したところ、本地点において古代末から中世にかけての水田跡を検出し、遺跡が存在していることが判明した。丁度この頃、本地点から約0.5km下流の石成遺跡でも遺跡の確認調査が実施されており、こちらも遺構・遺物の出土をみていたが、この両者は連続しない別個の遺跡と判断されたため、所在地の地籍をもとに矢崎遺跡と呼称することとなった。この時の調査結果は研究所調査報告第54集『矢崎遺跡』として既に刊行されている。

平成5年度の発掘調査は、大津谷川と尾川の合流点付近の災害復旧工事に伴う事前調査として実施されたが、復旧工事は合流点の南側でも行われるため、大津谷川の右岸側においても遺跡の調査を行う必要があった。そのため遺構・遺物の広がりを確認する必要から、平成7年10月に確認調査を実施することとなった。調査は静岡県島田土木事務所からの委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。その結果、平成5年度調査時に包含層のひとつとして認識された黒色粘土層が検出され、それ以外にも中世や古墳時代等の遺物が出土したため、当該箇所は本調査が必要であるとの結論を得た。

本調査は当該箇所を2つの調査区に分け、そのうち1区を平成7年度事業として実施することとなった。調査対象地を2つの調査区に分けたのは、この合流地点が川幅狭く洪水の発生しやすい箇所であることから、1区の調査時には2区の位置に築かれている堤防により、また2区の調査時には1区の位置に新たに堤防を築くことによって、万一の事態に備えたためである。

1区の調査は平成7年度一級河川大津谷川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業として、平成7年11月から平成8年3月まで実施した。調査面積は延べ3035m<sup>2</sup>である。一方、2区の調査は当初計画では翌平成8年度に実施する予定であった。しかし章前橋付け替え工事等諸般の事情により1区の調査から数年遅れ、平成11年度に一級河川大津谷川住宅宅地関連公共施設等整備促進（広域一般）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として平成11年9月から平成12年3月まで実施した。調査面積は延べ1240m<sup>2</sup>である。調査の時期が冬季となったのは、洪水等の恐れのある河川の増水時期を避けるという意味もあった。

また2区の本調査中、大津谷川の左岸側においても遺跡の範囲確認調査を実施したが、確認されたのは洪水等で大きく攪乱された堆積状況であり、遺構・遺物の出土をみなかった。その結果、大津谷川の左岸側で今回の工事の対象となる地点（堤防部分）に関しては、本調査を実施しないこととなった。

資料整理・報告書作成作業は翌平成12年8月から平成13年1月にかけて、平成12年度一級河川大津谷川住宅宅地関連公共施設等整備促進（広域一般）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施し、平成13年3月をもって平成7年度からの矢崎遺跡に関わる事業をすべて終了した。

以上の経緯を調査段階として要約すると、平成5年度の調査は矢崎遺跡第1次調査であり、平成7年度（1区）及び平成11年度（2区）の調査は第2次調査となる。故に本書は平成7年度及び平成11年度調査の結果をまとめた矢崎遺跡第2次発掘調査報告書である。

## 第2章 遺跡周辺の環境

### 第1節 地理的環境

矢崎遺跡は島田市の中心部から北方約3kmのところ、標高496mの千葉山麓を水源とする大津谷川と、同じく千葉山の西南を発する尾川とが合流する地点に立地する。遺跡のある島田市の北部地域は、前述の大津谷川・尾川と伊太谷川・東光寺谷川・相賀谷川・伊久美川が島田市北部に広がる瀬戸川層群静居寺層と呼ばれる頁岩で形成された標高200~300m級の丘陵を開析した小規模の谷底平野が入り組む地形である。南の市街地部分には、日本有数の河川である大井川が赤石山脈から南に穿入・蛇行しながら流れ、金谷町横岡付近から東には、大井川扇状地のシルト・粘土の薄い互層に覆われた砂質・礫質が広がる地形が連なる。

矢崎遺跡の所在する島田市落合地区は、前述の島田市北部の丘陵が開析されてできた幾つかの谷のうち、大津谷川によって形成された標高60m前後の谷底平野であり、遺跡周辺は大津谷川・尾川に開析された丘陵部の先端が東西北方から張り出して、変化に富んだ景観をつくりだしている。両河川に運搬された泥炭堆積物が形成する平野部は北から南にかけて緩やかに傾斜している。現在、ほとんどの部分は水田として利用されており、集落は遺跡の裾部に群在している。

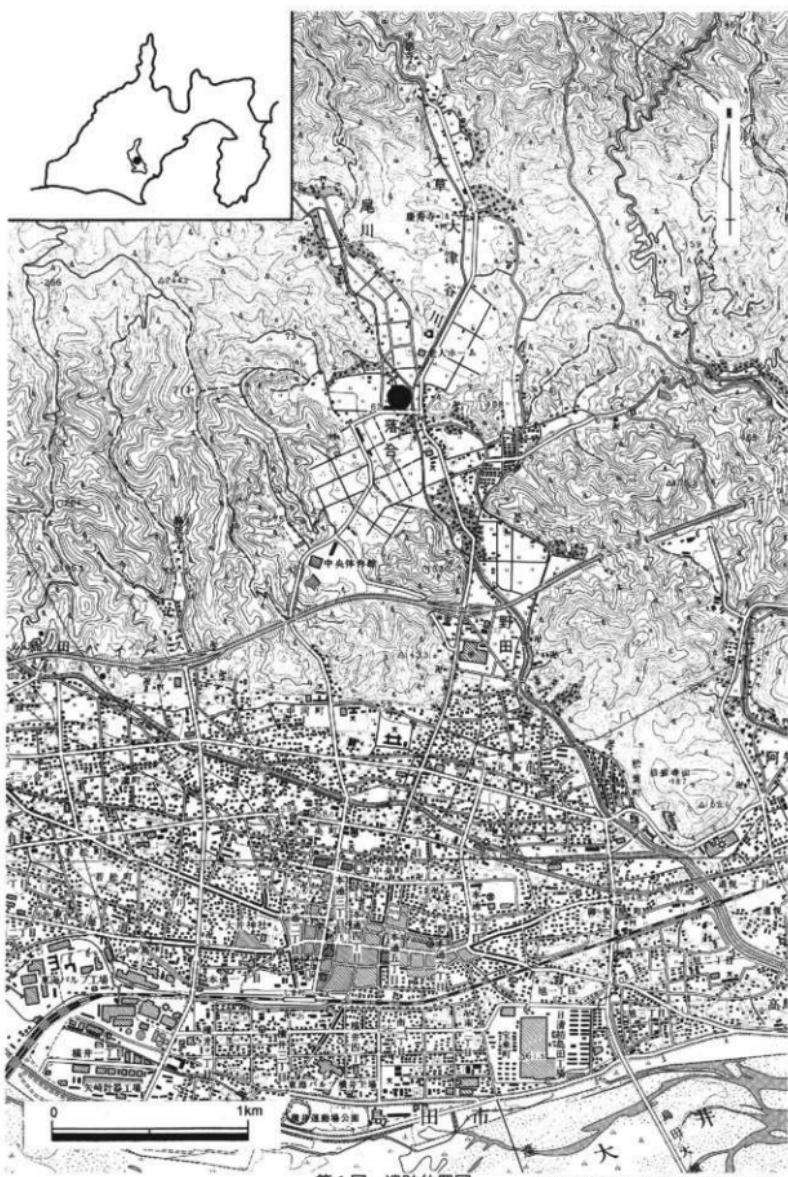
この地を流れる尾川は流路長4.0km、流域面積9.61km<sup>2</sup>で急流なため洪水が発生しやすい河川である。一方大津谷川は流路長10.2km、流域面積15.81km<sup>2</sup>で全体的に細長い流域の形をもった河川である。このため、この地では古くから度重なる河川の洪水災害に苦しめられてきた。『島田郷土史』によると安政五年（1858）に大津谷川が氾濫し、周辺の耕田を荒廃させたとある。『島田風土記 大津編』によると、護岸整備の進んだ昭和期に入っても大津地区は幾度かの水害に見舞われている。特に明治43年（1910）に発生した堤防決壊による氾濫は、耕地や家屋の流出のみならず死傷者まで出すほどの大災害であったと記録されている。

### 第2節 歴史的環境

矢崎遺跡の所在する落合地区は明治22年（1889）から昭和29年（1954）まで、野田・尾川・大草・千葉山とあわせて志太郡大津村を形成していた。この大津の地に人々が活動した歴史は、現段階では縄文時代早期まで遡ることができる。周辺では旗指遺跡（49）等で旧石器時代終末の遺物が、また旗指遺跡第1地点（58）等で縄文時代草創期の遺物が出土しているが、大津地区では山王前遺跡（3）で出土した縄文時代早期の押型文土器が最も古い段階の遺物であり、これ以前の旧石器時代や縄文時代草創期の遺跡はまだ確認されていない。

縄文時代の遺跡としては丘陵上や山頂部に立地する尾川平遺跡・広段遺跡（10）・波田D-I区遺跡・神谷東遺跡（11）等がある。これらは中期から後期の遺跡であり、この頃には既に多くの人々が大津の地に住みついていたのであろう。

弥生時代の遺跡としては丘陵上に立地する後期集落遺跡である山王前遺跡（3）をはじめ落合西遺跡（37）、鳥羽美遺跡（38）、出ノ谷遺跡（44）等がある。遺跡数は中期後半から増加するようである。なお生産域に関しては、矢崎遺跡第1次調査（1）や落合遺跡（2）で検出された最下層の珪片が弥生時代に比定される予察はあるものの、明確に特定できる遺跡は今のところ大津地区では確認されていない。



第1図 遺跡位置図

国土地理院「島田・向谷(1:25,000)」に加筆



第2図 周辺遺跡図 明治24年発行陸地測量部図を1:25,000に縮小

遺跡名	時代	種別	遺構・遺物	調査年
1 矢崎遺跡	古墳・中世	水田・集落	柱形・圓柱建物・土器類・山茶碗・陶器器・木製品	H5・7・11
2 落合遺跡	平安・中世・近世	集落	水田(杭列)・溝跡・山茶碗	H7・8
3 山王前遺跡	縄文・弥生・古墳・中世・近世	集落	住居跡・攤文土器・弥生土器	一部残、S56~59・H8
4 石成遺跡	古代・中世	集落	圓柱建物・杭列・陶質土器・陶器器	H5
5 団倉遺跡	古代	聚落	陶器器・陶質土器・貨幣・表鏡	S59・60
6 井邊遺跡	中世	水田	稻跡・杭列・中世陶器・木製品・鐵鏟	H7
7 スモウダン遺跡	弥生・古墳・中世	古墳	住居跡・穴式石室・須恵器・鐵鏟・刀子・山茶碗	H11
8 大津城	中世	聚落	物見跡・自然堆	

第1表 遺跡一覧表1

遺跡名	時代	種別	遺構・遺物	調査年
9 上反方遺跡	古代・中世	水田・集落	輪跡・河道跡・山茶樹・陶器・網代	H3・4・6
10 広院遺跡	縄文	魚塚	縄文土器・打製石斧	
11 神殿東遺跡	縄文	魚塚	整穴住居・泰山伊弉・圓文土器・石瓶	S61・H7
12 雪ヶ谷遺跡	縄文	散布地		
13 仲山遺跡	中世	祭祀	陶質土器	
14 霊力谷 A 地点遺跡	古代・中世	古窯	粗陶器	
15 雪ヶ谷古墳群	古墳	古墳		
16 雪ヶ谷呑池古窯	古代・中世	古窯	須恵器	
17 横穴古墳群	古墳	古墳	横穴式石室・耳罐・鐵劍・須恵器	
18 香福寺古墳群	古墳(後)	古墳	横穴式石室	
19 地蔵山古墳	縄文・弥生・古墳	古墳	土坑・ピット・土器・石器・打製石斧・石器・石器	H8
20 白岩寺古墳群	古墳(後)	古墳	円墳・横穴式石室・直刀・刀子	一部残、S48・H1・3
21 金谷沢山古窯	古墳	古墳		
22 霊力谷山古墳	古墳	古墳		
23 東晶寺古墳	古墳	古墳		
24 鶴沢北古墳群	古墳(後)	古墳	横穴式石室	基盤不明 S53
25 波田遺跡	縄文(中)	集落	住居跡・圓文土器	一部残、S52
26 二俣遺跡	縄文	散布地		
27 三石古墳	古墳	古墳	円墳・横穴式石室	
28 法供寺古墳群	古墳	古墳	横穴式石室・須恵器	
29 二段古墳群	古墳	古墳	円墳・横穴式石室・鐵劍・刀子・須恵器・金環	
30 鶴恩寺古墳群	古墳(後)	古墳	円墳・横穴式石室・刀子・耳罐	
31 重要守古墳群	古墳	古墳	横穴式石室	
32 猿月寺古墳	古墳	古墳	横穴式石室	
33 波田1号墳	古墳	古墳	横穴式石室・鐵劍・大刀・須恵器	S52
34 波田2号墳	古墳	古墳		
35 波田遺跡	縄文	散布地	圓文土器・石器・石器	
36 波田3号墳	古墳	古墳	横穴式石室	
37 麻合西遺跡	弥生・古墳・平安・近世	集落	整穴住居・獨立柱建物・弥生土器・土師器・陶器	S48・H10~11
38 鳥羽美遺跡	弥生		整穴住居・弥生土器	S50
39 鳥羽美古墳	古墳	古墳	土坑・鐵劍・鐵劍・圓鏡	S50
40 豊田城	中世	城壁	塔・曲輪跡	
41 城山1号墳	古墳	古墳	横穴式石室	
42 佚方1号墳	古墳	古墳	横穴式石室	
43 磐田古墳群	古墳	古墳	横穴式石室・鐵劍・刀子・鐵劍・須恵器	S47
44 田ノ谷遺跡	縄文・弥生・古墳	集落	圓文土器・弥生土器・須恵器	一部残、S50・57
45 霊ヶ谷古窯	古代	古窯		
46 香福寺西古窯	古代	古窯	陶質土器	
47 大觀堂遺跡	近世	散布地		
48 静謐寺前C地点古窯	古代・中世	古窯		
49 鹿浦遺跡	縄文・古墳・古代・中世	集落・古墳	整穴住居・圓文土器・弥生土器・須恵器	一部残、S48・49・50・61
50 鶴南B地点古窯	圓文・平安・鎌倉・古代	古窯	平安・鍾乳土坑・構造遺跡・圓文土器・石器・陶器	一部残、S48・H7~8
51 静謐寺前A地点古窯	古代・中世	古窯		
52 鶴南7地点古窯	古代	古窯		
53 静謐寺前D地点古窯	古代・中世	古窯		
54 鶴南9地点古窯	古代	古窯	工房跡・住居跡・陶器	調査、S55~57
55 鶴南9地点古窯	古墳	古墳	円墳・横穴式石室・勾玉・切子玉・須恵器	調査、S48・49・51
56 鶴南9地点古窯	縄文・古代	古窯	工房跡・圓文土器・陶器・石器	一部残、S48・50
57 鶴南2地点古窯	圓文・古代	古窯	圓文土器・陶質土器・須恵器	調査、S47~48
58 鶴南1地点古窯	圓文・古代・中世	古窯	圓文土器・石器・須恵器・石器	調査、S51~53

第1表 遺跡一覧表2

古墳時代に入ると、前期古墳として城山1号墳(41)や鳥羽美古墳(39)が築かれるが、これが大津地区では最古の古墳に位置付けられている。後期古墳としては鶴田古墳群(43)、波田1号墳(33)、駒形古墳群(30)、山王前古墳等が挙げられるが、近年ではスモウダン遺跡(7)の調査において後期の横穴式石室が確認されている。しかし、明確に中期と特定できる古墳は今のところ未発見である。古墳時代の集落は山王前遺跡(3)や田ノ谷遺跡(44)等が前代から引き続いで前期も営まれるが、中・後期の集落は不明瞭な状態である。

奈良時代になると、8世紀後半に千葉山に天台系山岳寺院智満守が開創されたと伝えられる。智満寺に関しては平成6年度に学術発掘調査が実施され、建物跡の出土をみている。しかしこの時期の遺跡は決して多いとはいえない、また在地史料も現存していないことから、古代の大津を知る手がかりは少ないと言わざるを得ない。しかし平城京跡からは「大津」と記された木簡が出土しており、これが承平年間(931~937)に成立した和名類聚抄に記載されている「大津」に該当すると考えられることから、この頃から既に「大津」という郷名が存在したものと思われる。

平安時代中期になると旗指古窯跡(49等)が操業を開始する。旗指古窯跡は灰釉陶器の一大生産地であり、周辺には他にも菅ヶ谷A・B地点古窯跡(14・16)や菰ヶ谷古窯跡(45)、静居寺裏古窯跡(46)等が営まれる。この頃大津地区には「大津御厨」が成立したとされており、この時期の遺跡が多数残されているが、それら遺跡群の中でも特に居倉遺跡(5)は代表的な遺跡として挙げられる。

伊勢神宮による大津御厨の支配は約250年に及んだとされるが、南北朝期には伊勢神宮から駿河国守護今川氏の支配へと変っていき、「大津庄」と呼ばれるようになる。後に駿河の国人三浦氏の所領となり、室町時代から戦国時代には「大津郷」といわれるようになる。なお、この時期の残存する島田市域の文献記述は大津地区に集中することから、古代・中世期においては大津地区が島田市域の先進地域であったといえるかもしれない。

#### 大津御厨について

御厨と称する伊勢神宮の莊園は遠江・駿河・伊豆に多数設定されていた。これは伊勢に近いという地理的条件もあるが、御厨の本米の立地条件のひとつに水産業に適するということがあるため、海上交通の便を備えている静岡の地形条件も理由として挙げられる。大津御厨も当初は大井川と大津谷川の漁労や水運を主要な機能として設定されたと考えられている。伊勢神宮の御厨は内宮と外宮の二宮あるいは内宮・外宮個々を本所とし、給主を領家とする莊園であるが、大津御厨は二宮を本所としていた。この大津御厨に関する文献史料は様々な書籍に引用されているので、ここではそれらを概観するに留めさせていただく。

- ・「兵範記」仁平四年(1154)記紙背文書(『平安遺文』4849)

駿河国のある守が、国内の「旧立」であった大津御厨と小杉御厨を除く伊勢神宮領7箇所を停止したとあり、大津御厨は他に比べて古くからあった御厨と認識されていたことが伺える。年月日が不明であるが、11世紀末から12世紀頃であろう。

- ・「神宮雜書」建久三年(1192)八月日伊勢大神宮神領注文(『鎌倉遺文』614)

大津御厨は二宮を本所とし、給主として故一条大納言家子息の名がみえる。また、嘉承三年(1108)七月二十九日神宮領注文に大津御厨が記載されていたとしている。

- ・「吾妻鏡」

文治五年(1189)五月二十二日条と建久元年(1190)八月十三日及び同年八月十九日条に、大皇太后宮御領の大津御厨地頭板垣三郎兼信(甲斐源氏武田太郎信義の三男)に連勃の事あって頼朝から罷免されたとある。

・『神鳳鈔』

14世紀に成立したとされる。鎌倉時代の伊勢神宮領を記しており、大津御厨は180町歩、大津新御厨は200町5反180歩と記されている。

・『神領給人引付』(『三河国古歌名鑑考』)

延元四年（1339）の記事として、『神鳳鈔』と同様の内容が記されている。

以上の記録により、古い段階から大津御厨が成立していたこと、寄進等により領有関係が移動した可能性があること、大津御厨の周辺部（大津御厨の東方か？）に大津新御厨が成立したこと等が読みとれる。成立の時期に関しては延久元年（1069）あるいは寛徳二年（1045）の莊園整理以前とされており（静岡県 1994）、11世紀中頃には成立したものと推定できる。また『神鳳鈔』には、大津御厨の本田数は180町歩、大津新御厨では200町5反180歩と記されているが、大津谷川流域の谷の水田は近代でも140町以下であるから、御厨の領域が大井川下流左岸にまで広がっていたことが推察される。

大津御厨の衰退については、至徳二年（1385）十一月十五日『今川家古文書写』に、足利義満が今川泰範に対して相伝にまかせて安堵とした所領の中に「駿河國大津庄」の名がみえることから、この時期には既に大津御厨は解体消滅していたと考えられる。

文献史料からみた大津御厨は以上のとおりであるが、この時期の遺跡としては旗指古窯跡（49等）や居倉遺跡（5）をはじめ、現在までに矢崎遺跡（1）、落合遺跡（2）、山王前遺跡（3）、石成遺跡（4）、芹遺跡（6）、上反方遺跡（9）で調査が実施されている。このうち居倉遺跡は10世紀第1四半期には成立したとされ、多量の墨書き土器や木簡等、質・量共に豊富な遺物が出土している。この調査所見から、調査者は居倉遺跡を物資の集積地としての津的な性格を有する遺跡と位置付けており、更に旗指古窯との関係についても言及している。それだけでなく居倉遺跡が水田の管理機能と関係しているとも考えられており、少なくとも当該期の大津地区において居倉の地が中心的な位置にあったといえる。一方石成遺跡からは3棟の掘立柱建物や区画溝等が検出され、遺物も墨書き土器や舶載陶磁器等が出土していることから、御厨の中でも居住域であったことがわかる。この石成遺跡の時期は11世紀末から13世紀という幅の中で捉えられている。他に落合遺跡では12世紀中葉から13世紀後半に位置付けられる区画溝の可能性が指摘される大形の溝が、上反方遺跡では平安末から鎌倉時代の大津谷川と推察される河道跡が、それぞれ確認されている。矢崎遺跡の第1次調査では遺物の出土量が極めて少なく、また調査面積も狭いために不明な点が多いが、おそらく鎌倉時代及びそれ以前の段階では水田が営まれていたのではないかと考えられている。これら発掘調査の成果を総合的に評価し、旗指古窯や智満寺との関係も視野に入れた上で中世前期の大津御厨の在り方を解明することが、ひとつの大きな課題であろう。

<第2章 参考・引用文献>

- ・ 静岡県 1994 『静岡県史』通史編1 原始・古代
- ・ 静岡県 1989 『静岡県史』資料編4 古代
- ・ (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995 『石成遺跡』
- ・ (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995 『上反方遺跡』
- ・ (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1994 『矢崎遺跡』
- ・ 島田市教育委員会 1998 『落合遺跡』
- ・ 島田市教育委員会 1987 『居倉遺跡』
- ・ 島田市教育委員会 1984 『島田風土記 大津編』
- ・ 島田市教育委員会 1983 『旗指古窯跡』
- ・ 島田市教育委員会 1978 『島田市史』上巻
- ・ 紅林時次郎 1979 『島田郷土史』（改題復刻版）

# 第3章 調査の概要

## 第1節 調査の方法

発掘調査にあたって、記録化の便宜のため調査対象区全域に  $10\text{m} \times 10\text{m}$  のグリッドを設定した。グリッドは南北方向に長くのびる調査区に沿うかたちで、西から東へ 1・2・3…、北から南へ A・B・C…と数字およびアルファベットを順に付けていった。各グリッドはこれらの組み合わせにより E 1、E 2、F 2 というように表記することとした。このグリッド基軸線は任意に設けたものであり、国土座標（平面直角座標系）と異なる。グリッド基軸線（南北）の方位は国土座標に対して  $N - 5^{\circ} - W$  となる（第3図）。

現地ではメッシュの交点に杭を打設し、各グリッドの南西隅の杭を以てそのグリッドを表すこととした。このグリッド杭の頂部には釘を打ち、釘頂部の標高を測定したうえで、これをもとに遺構および遺物の標高を測量した。なお、これらグリッド杭の国土座標値はそれぞれ算出されており、例えば G 2 グリッド杭の国土座標は  $X = -126987.933$ 、 $Y = -29017.983$  であり、J 2 グリッド杭は  $X = -127017.800$ 、 $Y = -29015.157$  である。

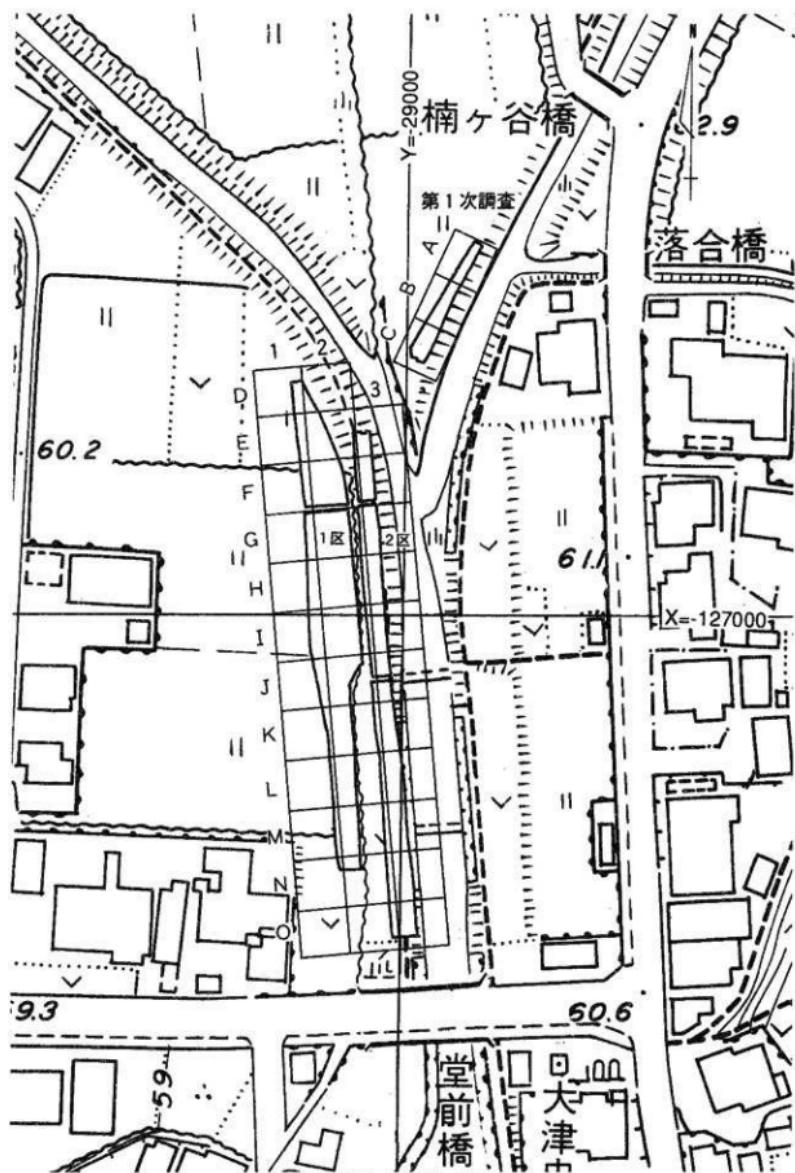
調査区は平野部の川沿いということもあり、特に雨天時には調査区内に水が溜まるため、1区・2区ともに調査区の周囲にトレーンチ状の排水溝を巡らせ、ポンプにより大津谷川に排出することとした。掘削にあたっては調査区境界の法面に勾配をつけ、ブルーシートで法面を養生して壁面の崩壊防止につとめた。また特に2区においては、掘削深度が堤防頂部から約4mと想定されたため、川に面した東側は川岸から約1m離れたところに鋼矢板（最長8.5m）を打設することにより、右岸の崩壊を防ぐこととした。

調査開始段階における表土除去作業は重機（バックホー）を用いた。この時生じた排土は、10tダンブカーやにより土捨て場へ搬出した。重機で遺構面の少し上面まで掘削し、その後遺構面までは人力により掘削した。

排土の処理について、今回の調査では1区・2区ともに調査区の南側が近代の流路であり、第2面および第3面が遺存していないことが第1面調査時に判明したため、調査中に生じた排土は調査区南端に仮置きした。また第2面の調査終了後、第3面まで掘削する際に重機を使用したが、この時生じた排土も調査区の南端に仮置きした。なお調査終了後は1区・2区ともに、重機を用いて埋め戻し作業をおこなった。この時、調査開始段階で土捨て場へ搬出した排土も調査区内に再搬入して埋め戻した。

出土した土器の取り上げ方法について、包含層から出土した土器片はグリッド単位で毎週末に一括して取り上げた。遺構から出土した土器片についても遺構単位で一括して取り上げたが、必要のあるものに関しては出土状態を記録したうえで、1点1点に遺物番号を付番して取り上げた。土器以外の遺物については、全て1点ずつ付番し、状況に応じて出土状態を記録したうえで取り上げた。

遺構・遺物の記録にあたっては、写真と図面を用いて記録した。写真は35mmカラーネガ・35mmカラーリバーサル・35mmモノクロ・6×7モノクロを用いて遺構および遺物の検出状況等を記録し、必要に応じて4×5カラーリバーサル・4×5モノクロを用いた。図化については、トータルステーションを用い、1/10あるいは1/20で測量した。以上の他にも空中写真測量を用いて、遺跡の空中写真撮影や図化作業をおこなった。なお、空中写真測量により図化したのは1区第2面・2区第1面・2区第2面である。



第3図 グリッド設定図 (1:1000)

## 第2節 調査の経緯

本書では中世の遺構面を第1面、古墳時代中期の遺構面を第2面、弥生時代から古墳時代の遺構面を第3面として報告しているが、現地では1区・2区ともに中世遺構面を2面に分けて調査を行っている。そのため現地調査段階では遺構面を全部で4面と認識し、第1遺構面および第2遺構面は中世(今回報告の第1面)、第3遺構面を古墳時代中期(同第2面)、第4遺構面を弥生時代から古墳時代(同第3面)として調査を実施したことを、調査の経緯を記すにあたり予め断つておく。

### <確認調査>

1区の調査に先立って試掘坑による範囲確認調査を実施した。調査方法は1区内におよそ20mピッチで約3m×3mの試掘坑を5箇所設定し、北から順に第1～第5試掘坑(以下、TP1～TP5と略す)として、重機を用いて調査を実施した。

確認調査は平成7年10月18日から同年10月24日まで実施した。その結果、TP1からTP5までの5箇所の試掘坑のうち、TP1～TP4に遺物が出土する包含層が確認されたので、調査対象地を1区と2区に分け、本調査を実施することとした。

また、大津谷川左岸の確認調査は2区の本調査中に実施した。平成11年12月2日に事前準備を行い、同月6日に重機を用いて6m×6mの試掘坑を掘削した。その結果、洪水等により土層が大幅に擾乱されていることが判明した。遺物も出土せず、大津谷川左岸堤防部分は本調査を実施しないこととなった。  
<1区>

11月 先月に実施した確認調査の結果をもとに、本調査を開始した。まず諸資材の搬入、作業員募集、安全フェンス設置等の事前準備を行い、29日から重機を用いて表土除去を開始した。

12月 引き続き表土除去を実施し、その後調査区法面の成形、排水溝の掘削、集水溝の設置、グリッド杭設置等、発掘区域の基本設定を行った。11日から第1遺構面の調査を開始したが、柱穴や溝等が順次検出されたので、遺構概念図の作成を遺構検出手作業と並行して行った。この第1遺構面調査の段階で、調査区内の一部では早くも古墳時代の包含層である黒色土層上面が露出したため、その箇所では古墳時代の遺物が多数出土してきた。これら遺物のうち局所的に集中して出土したものに関しては、この段階で写真撮影や実測等の記録作業を実施した。

1月 先月末に記録化した土器集中出土地点の遺物取り上げを行い、第1遺構面で検出した個別遺構と全景(17日)の写真撮影を実施した後、平面実測作業を実施した。その後、調査区全体を黒色土層上面まで下げ、この面を第2遺構面として遺構の調査を行った。

2月 引き続き第2遺構面の調査を行った。この段階でも遺構概念図の作成を遺構検出手作業と並行して行った。遺構を全て検出し終わった段階で再び個別遺構および全景(13日)の写真撮影を実施し、その後平面実測作業を行った。19日からは第3遺構面の調査を開始した。その中で調査区の南側で検出され

1 区 調 査		平成7年		平成8年		
		11月	12月	1月	2月	3月
表土除去工			+			
第1遺構面調査				—		
第2遺構面調査				—		
第3遺構面調査				—	—	
中間層除去工				—		—
第4遺構面調査						
埋戻し工						—

第2表 1区調査工程表

た流路跡（SR203）については出土遺物量が少なかったため、遺物の出土に注意しながら、一部重機を用いて掘削作業を行った。なお調査区の南端で検出された旧尾川と思われる河道跡の記録作業もこの段階で実施した。

3月 引き続いで調査を実施し、14日に空中写真測量および遺構写真撮影を実施して第3遺構面の調査を終了した。その後18日から20日まで、第4遺構面までの約1mの中間層を重機を用いて掘り下げ、新たに排水溝を掘削したうえで第4遺構面の遺構検出作業を開始した。3月末までに遺構の検出作業および写真撮影等の記録作業を実施し、現地の調査を終了した。

<2区>

9月 調査を開始するにあたり、大津谷川の川岸に沿って鋼矢板打設作業を行った。

10月 諸機材の搬入や作業員の募集、安全フェンス設置等の事前準備を行った。鋼矢板打設作業は8日に終了し、その後土堆堆積状況を確認しつつ、重機を用いた表土除去作業を実施した。

11月 排水溝掘削等といった発掘区域の基本設定を行い、9日から第1遺構面の調査を開始した。第1遺構面では柱穴を多数検出したが、1区で検出した溝状遺構の統一が確認できなかったため、第1遺構面を精査しつつ、部分的に黒色土層（埴層）上面まで下げていった。なお井戸跡SE501は調査開始当初から確認されていたが、29日には新たにSE506を検出した。

12月 第1遺構面の調査を終了し、調査区全体を埴層上面まで下げ、第2遺構面の調査を開始した。しかし1区で検出された溝状遺構群のうちの数条は、その統一を確認することができなかった。20日には空中写真測量を実施し、補測を行いながら、古墳時代の包含層である埴層の掘削を開始した。埴層からは多数の遺物が出土したため、写真撮影等の記録作業をしながら調査を進めていった。

1月 壁層の掘削を進めながら、7日には第3遺構面となる埴層上面で遺構の検出作業を開始した。第3遺構面の調査と並行して2基の井戸跡の解体作業も実施した。柱穴群や流路跡（SR203）等の調査を進めていった。

2月 引き続き第3遺構面の調査を行い、3日には空中写真測量を実施した。その後補足調査・測量を実施し、14日から22日まで、バックホーとクローラダンプを使用して第4遺構面までの中間層の除去を実施した。この間、第4遺構面と認識していた標高57.4mよりも上層で杭列が検出されたので、一旦中間層除去作業を中断し、杭列（SK852）の調査を実施した。法面養生といった発掘区域の基本設定を行った後、23日から第4遺構面の調査（畦畔の検出）を開始した。

3月 1日に周辺住民及び小学校児童を対象とした現地説明会を開催し、約60名の参加を得た。調査も引き続き行い、耕作痕の検出及び畦畔（SK855他）の解体作業、写真撮影、測量作業を行い、13日に調査を終了した。調査区の埋戻し作業は一部10日から開始し、15日には終了した。その後鋼矢板撤去作業を実施し、31日には全ての作業が完了した。

		平成11年				平成12年	
		9月	10月	11月	12月	1月	2月
	鋼矢板設置工	—	—	—	—	—	—
	表土除去工	—	—	—	—	—	—
2 区 調 査	第1遺構面調査	—	—	—	—	—	—
	第2遺構面調査	—	—	—	—	—	—
	第3遺構面調査	—	—	—	—	—	—
	中間層除去工	—	—	—	—	—	—
	第4遺構面調査	—	—	—	—	—	—
	埋戻し工	—	—	—	—	—	—
	鋼矢板撤去工	—	—	—	—	—	—

第3表 2区調査工程表

### 第3節 遺跡の層序

遺跡内の土層堆積状況の把握と包含層の確認を目的として掘削した試掘坑(TP1～TP5)によって、調査区南側が北側とは大きく異なる堆積状況を呈していることが判明した。これら試掘坑の中でもTP1・TP2及びTP3が、比較的に土層が乱れることなく堆積していたので、調査区の中央に近いTP2の堆積状況を基本として1区の調査を実施した。また2区に関しては調査区の北壁で観察された堆積状況が、TP2で観察された堆積状況と同様の様相を呈していたため、これを基準として調査を実施した。以後、本書では2区北壁の土層を基本層序とする。

2区北側壁面(第5図、図版3)の土層について、観察内容を以下に記す。

- I層 灰色シルト(5Y4/1) Ⅴ層よりややオリーブ色を呈する。しまりあり。粘性少しあり。黄褐色シルトのブロック(5mm以下)・黄白色粒(3mm以下)・白色粒子(0.5mm以下)・炭化物(5mm以下)・小礫(20mm以下)を含む。
- II層 灰色シルト質粘土(10Y5/1) I層やⅢ層よりも明るく、青灰色味を呈する。しまりあるが、I層よりももやるい。粘性ややあり。黄色粒子・白色粒子・青灰色粒子(以上0.5～2mm)を多く含む。炭化物(5mm以下)・小礫(10mm以下)を含む。
- III層 灰色シルト(7.5Y4/1) しまり少しもやるい。粘性ほとんど無し。炭化物(10mm以下)をI層よりも多く含む。小礫(10mm以下)を含むが、I層よりも少ない。黄色粒子(2mm以下)・白色粒子(0.5mm)を含む。
- IV層 暗緑灰色シルト(10G4/1) しまりあり。粘性ほとんど無し。礫の風化した黄褐色及び青白色のブロック(10mm以下主体)や、黄色粒子(3mm以下)・白色粒子(0.5mm)を多く含む。小礫(10mm主体)・炭化物(3～5mm)を含む。
- V層 暗オリーブ色砂礫(5Y4/3) 2cm以下を主体とした小礫及び砂からなる。しまりあり。
- VI層 暗青灰色シルト(10BG4/1) しまりあり。粘性ほとんど無し。白色粒子(0.5mm)・炭化物(1mm)を含む。本層下位には、炭化物と砂質シルト(7.5Y5/2)が縞状に水平堆積する。
- VII層 青灰色シルト質粘土(5BG5/1) しまりややゆるい。粘性あり。炭化物やシルト(5Y5/2)も含めて、縞状に水平堆積する。
- VIII層 青黒色シルト質粘土(5PB2/1) しまりややゆるい。粘性あり。本層上位にはシルト(5Y5/2)が斑状に多く入る。炭化物(5mm以下主体)・風化した小礫(5mm以下)を多く含む。自然礫(20～30mm)を含む。IX層との層界は不明瞭であり、本層下位にはIX層の土壤がブロック状(10mm以下)に入る。
- IX層 暗オリーブ灰色シルト質粘土(5GY4/1) しまりややゆるい。粘性あり。炭化物(1～2mm)を含むが少ない。VII層との層界は不明瞭。本層下位には風化した小礫(5mm以下)を含む。
- X層 緑灰色砂礫(10GY5/1) 30mm以下の小礫と砂からなる。しまっているが、V層よりわずかにゆるい。V層に比べて砂の比率が高く、ブロック状の暗灰色粘土(5mm程度)もわずかだが入る。灰色シルトもわずかだが含む。
- XI層 暗オリーブ灰色砂質シルト(5GY4/1) しまりあまりなし。粘性ややあり。炭化物(1～3mm主体)を多く含む。暗灰色粘土化した植物遺体を含む。本層上位には砂質シルトが多く入る。
- XII層 暗オリーブ灰色粘質シルト(2.5GY4/1) しまりゆるい。粘性あり。オリーブ灰色粘土(5GY5/1、しまりなし、粘性極めて高い)をブロック状(50mm以下)で多く含む。XI層との層界に、約

2 cmの層厚で、これと同じ土（オリーブ灰色粘土）が水平に堆積する。暗灰色粘土化した植物遺体を多く含む。風化した小礫である青灰色粒・白色粒（3mm以下）や炭化物（5mm以下）を含む。小礫（5～10mm主体）も含む。なお、土壤化していない植物遺体も入る。

XII層 青黒色砂礫（SB2/I） 5 cm以下を主体とした自然礫と粗い砂よりなる。ラミナがみられる。しまりゆるく、湧水により容易に崩壊する。

XIV層 青黒色砂（SB2/I） しまりゆるく、湧水により容易に崩壊する。ラミナがみられる。

XV層 線灰色シルト質粘土（10YR4/I） しまりあまりなし。粘性あり。XIV層との層界は明瞭であり、境には植物遺体が薄く水平に堆積する。白色粒子（0.5mm）・炭化物（2mm以下）・黄色粒子（1mm）・礫の風化した灰白色粒（3mm以下）及び植物遺体を含む。

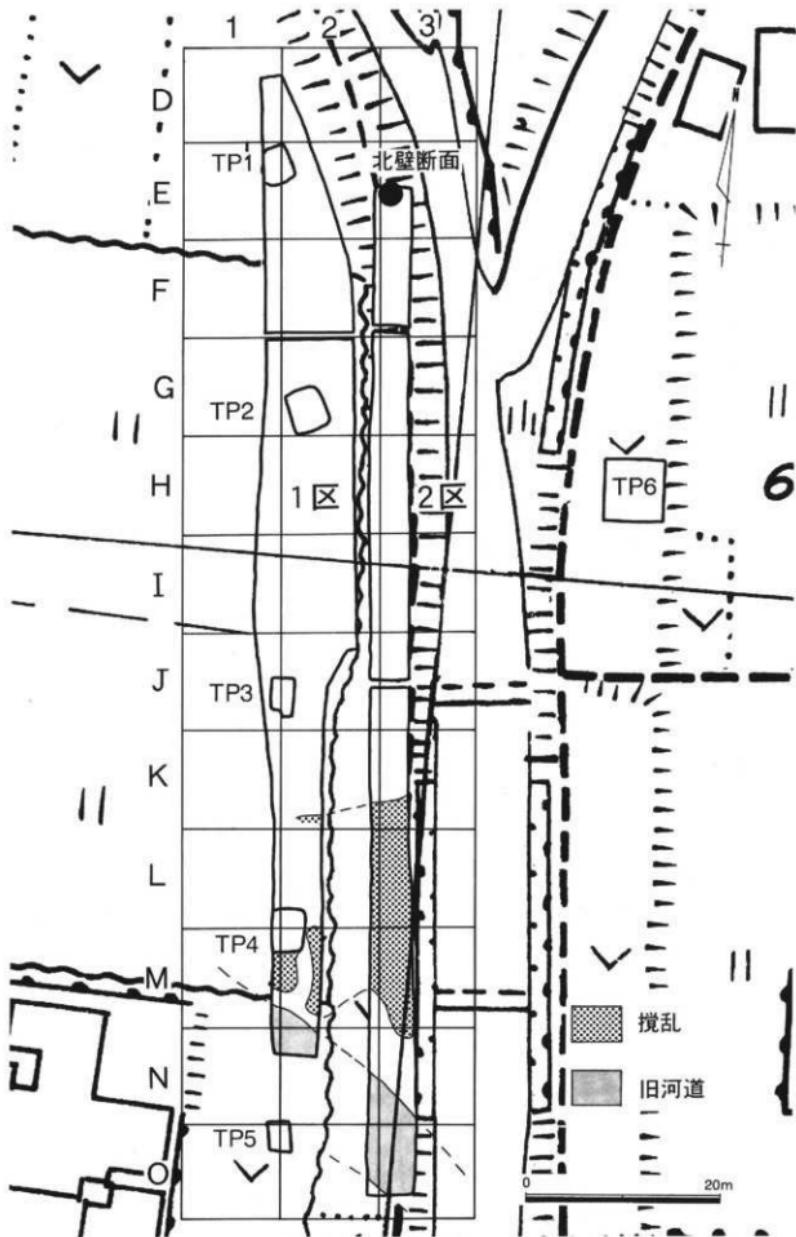
要約すると、標高58.6～58.7m付近に青灰色シルト層（VI層～VII層）、その上層に砂礫層（V層）、下層に鍵層となる黒色粘土層（Ⅳ層）、更にその下層に厚い砂礫層とシルト層の互層（IX層～XIV層）、そしてシルト質粘土層（XV層）となる。これら堆積状況を5箇所の試掘坑で確認すると、Ⅳ層より上層はTP1～TP3でも相当する層が存在する。しかしⅣ層よりも下層はTP1とTP2で相当する層が存在するが、TP3はSR203のため相当層が存在しない。

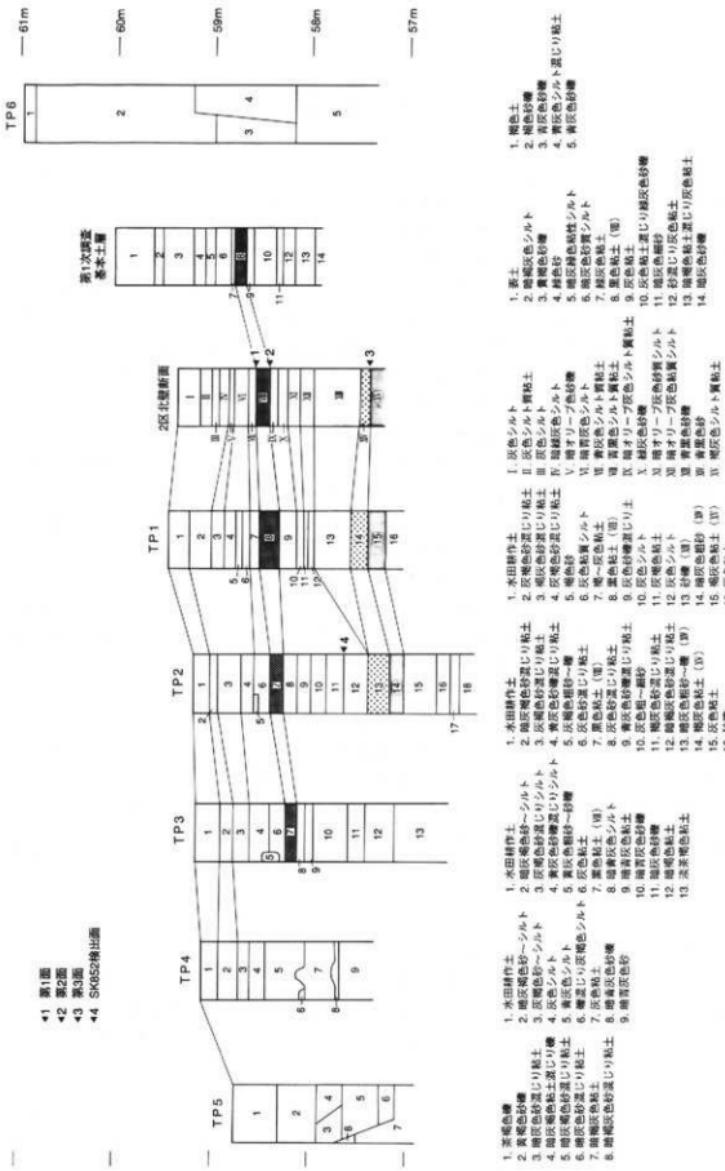
遺物包含層及び遺構検出面は、VI層～VII層が中世包含層、Ⅳ層上面が第1面、Ⅳ層が古墳時代包含層、IX層上面が第2面、XV層上面が第3面となる。それ以外には2区の廻層中（TP2の12層上面）で杭列SK852を検出した。しかし、この検出面ではSK852以外は何も出土しなかった。

一方、土層堆積状況が大きく異なっていたTP4及びTP5は、それぞれ近代の河道（TP5）と最近の洪水による擾乱（TP4）が原因であることが、平面調査の結果判明した。このうちTP5で確認された河道は尾川の旧流路であることが判明した。地元住民からの聞き取りによると、大津谷川と尾川の合流点は現在は本調査区の北東側であるが、明治時代までは調査区南東の堂前橋南側付近であったという。実際、明治24年発行大日本帝国陸地測量部地図からも、その状況を伺うことができる（第2図）。おそらく尾川は本調査区の南側をかすめるようにして、北西から南東へと流れていたのであろう。本調査区は大津谷川と尾川の合流点の南側に位置しているが、本来は合流点の北側であったと考えられる。この近代河道の法面からは杭列が検出された（図版3）。

本調査区の堆積状況を第1次調査の基本層序と比較検討したところ、今回鍵層と考えているⅣ層が第1次調査時の8層に相当することが判明した。特定はできないが、他にも今回のV層が第1次調査時の3層に、Ⅳ層が10層にそれぞれ相当する可能性がある。

なお、2区の土層については調査区北壁しか掲載していないが、調査区の南北方向での堆積の様相は概ね1区と同様であったことを記しておく。





第5図 調査区内土層柱状図

## 第4章 中世

### 第1節 概要

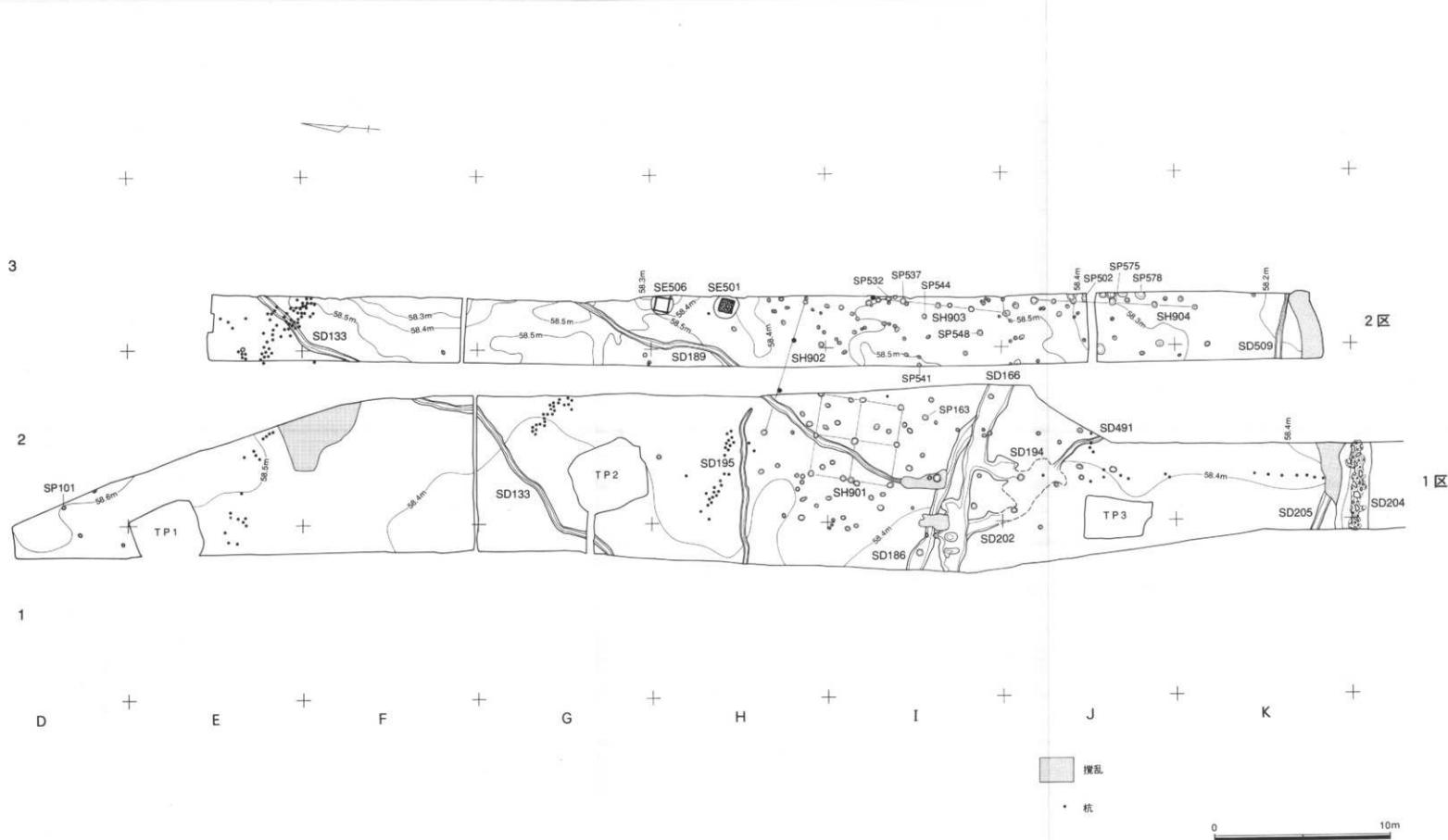
今回中世に属する遺構・遺物を検出したのは、VI層～VII層上面である。遺物包含層はVI層～VII層で、1区ではTP2の4層～6層に相当する。調査区の南側ではやや異なる土層が堆積していたが、VI層・VII層と同レベルで調査を行った。遺構検出は最初、VII層中(TP2の6層)で実施した。この検出面を現地調査では第1遺構面と称した。VII層の土壤は灰色シルトであり、遺構の覆土は多くがやや暗色気味を呈する灰色シルトであった。しかし検出の困難な遺構も多かったため、最終的には黒色粘土層であるVII層上面(TP2の7層上面)まで下げるまで遺構を検出した。この検出面を現地調査では第2遺構面と称した。この2つの遺構面の遺構・遺物を詳細に検討した結果、両者には明確な時期差がみられなかったため、第2遺構面(VII層上面)を第1面と認識し、第1遺構面・第2遺構面を併せて報告することとした。なお、第6図で示した標高の値は第2遺構面のものである。

検出した遺構は掘立柱建物跡1、柱穴列(註)3、井戸跡2、溝状遺構11、そして175基余の柱穴である。遺構は調査区内で偏在しており、SD189・SD195より南側に集中している。しかし、SD202とSD204の間は遺構の密度が低い。遺構が全く検出されなかつた1区SD204より南側のLグリッドでは多数の山茶碗が出土した。なお1区のMグリッドより南側と2区のSD509より南側については、第3章でも記述したとおり近代の河道や攪乱のため遺構面はほとんど遺存していなかった。

以上その他にも調査区内において多数の杭列を検出した。特にEグリッドで検出した杭列は1区と2区にまたがっており、杭の点数も非常に多い。他にもG2グリッドとH2グリッドで北西から南東方向への杭列を、そしてK2グリッドでほぼ南北方向の杭列を検出した。これら杭列は杭の加工方法や検出状況等から、いずれも第1面よりも新しい時期に属するものと判断した。

第1面から出土した遺物について簡単に記しておきたい。土器の出土総量はコンテナ数にしておよそ7箱であり、そのほとんどは山茶碗である。他に舶載陶磁器や国産陶器、土師質土器も出土している。舶載陶磁器は12世紀代の白磁が主体である。国産陶器は常滑や深美製品等が出土した。土師質土器は出土量が少なく、かわらけと鍋の破片が出上した程度である。この他にも表土付近から中世後期の舶載陶磁器や近世の志戸呂製品等の出土をみた。本製品は多数の柱根や井戸材の他には曲物、漆碗、箸状木製品、塔婆、横櫛が出土した。石製品は砾石1点、金属製品は釘と鉄砲玉の2点のみである。鉄砲玉は表土付近から出土した。なお第1面の遺構のうち、SE501、SE506、SD204から比較的多くの遺物が出土した。

(註)矢崎遺跡の発掘調査区は大津谷川に沿って設定されたため、南北方向に長く東西方向に短い。そのため南北方向に並ぶ柱穴の列が調査区外まで延びる(東の方向に遺構が広がる)ことも十分考えられる。これら柱穴の列は柵列や堀などの可能性があるが、上記理由により掘立柱建物跡の一部である可能性も否定できないため、今回は柱穴列として報告することとした。ただし略号は便宜上SHを用いた。



第6図 第1面全体図

## 第2節 遺構及び出土遺物

### 1. 挖立柱建物跡・柱穴列

#### S H 9 0 1 (第7図、図版5)

1区H2・I2グリッドで検出した。2間×2間の総柱建物である。柱間は2.25m～2.35mを測り、規模は4.6m四方となる。方位はN-4°-Eを示す。SP126とSP149を除く7基の柱穴からは柱根が出土した。柱根の直径はおよそ15cm程度である。また、SP111とSP126は根固めの石が掘えられていた。

#### S H 9 0 2 (第8図)

1区及び2区のH2・H3グリッドで検出した。方位はN-77°-Wである。この柱穴列は東西方向に並んでおり、南北方向に並ぶ可能性のある柱穴が存在しないことから、柵列とみなしてよいものと思われる。柱間は2.4m～3mとばらつき、特に中央の柱の間隔は広めである。SP517以外は柱根が出土しているものの、柱穴が検出できたのはSP167とSP517のみであり、との2箇所は柱穴の掘り方が確認できなかった。

#### S H 9 0 3 (第8図)

2区I3グリッドで検出した。方位はN-3°-Eであり、SH901と方位をほぼ同じくする。柵列状を呈しているが調査区東端で検出されたため、本遺構が調査区外にまで広がる掘立柱建物の西端である可能性を否定できない。柱間は1.8m～2.1mを測る。SP545およびSP549以外からは柱根が出土した。北端にも柱根が出土しているが、柱穴の掘り方は確認できなかった。

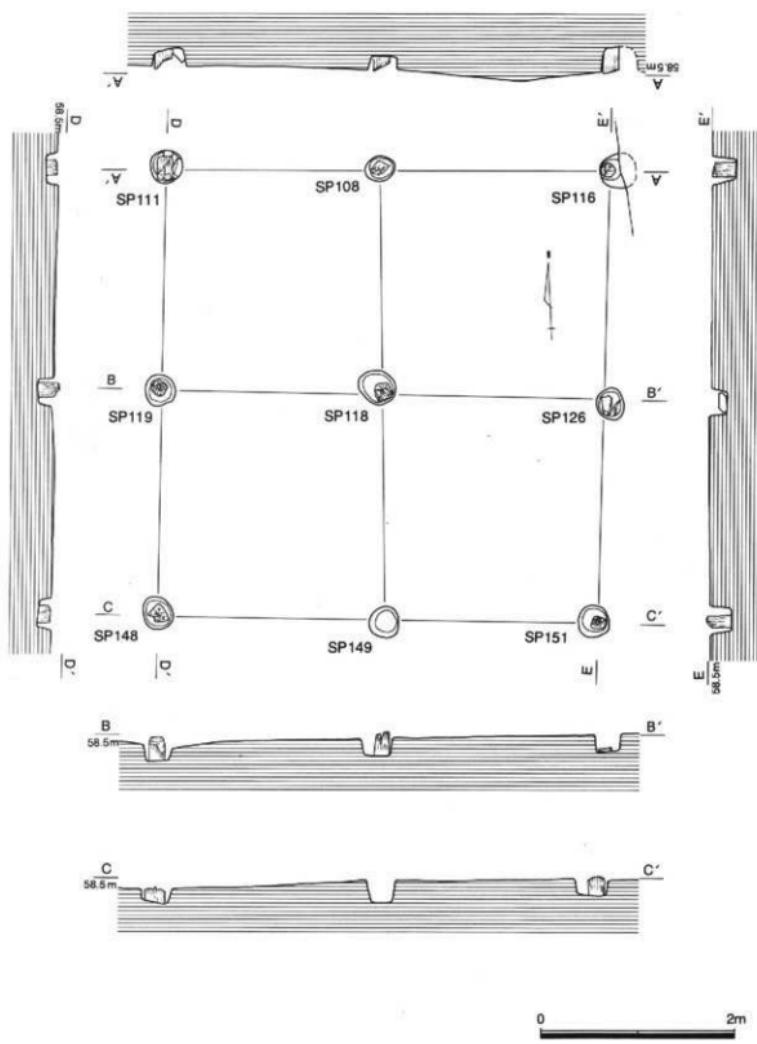
#### S H 9 0 4 (第8図)

2区K3・J3グリッドで検出した。方位はN-2°-Wであり、SH901と方位をほぼ同じくする。柵列状ではあるが調査区東端で検出されたため、本遺構が調査区外にまで広がる掘立柱建物の西端である可能性を否定できない。柱間は約2.3mでは一定である。SP566から柱根が出土しており、他にもSP560およびSP581から根固めの石が出土した。

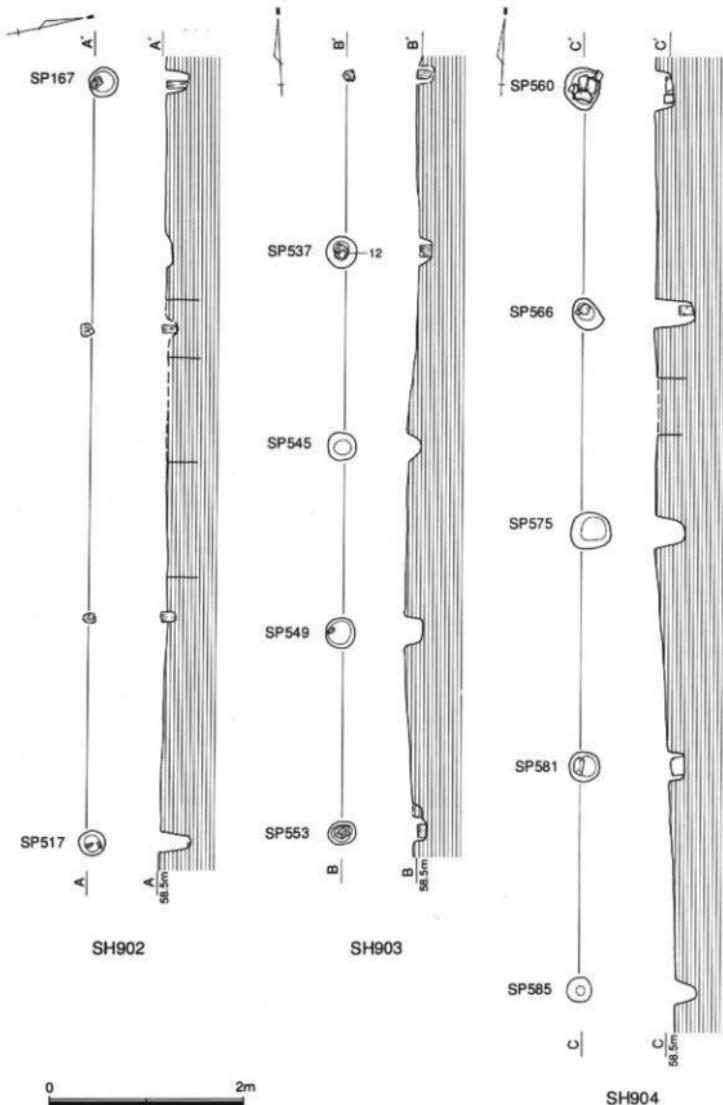
### 柱穴出土遺物 (第9図)

第1面で検出した柱穴175基のうち、土器が出土した柱穴は9基である。ここではそれらの中から図化が可能であった10点を掲載した。1～5は山茶碗である。1は体部がやや内湾気味に立ち上がる。高台は断面三角形を呈する。底部の糸切り痕はナデ消している。12世紀後半に位置付けられる。2は墨書き器で、底部に「○」が書かれている。高台は低い断面三日月形を呈する。見込みには黒色漆が部分的に付着しているが、もとは全面に付着していたと思われる。糸切り痕を残しており、墨書きする箇所のみ糸切りをナデ消している。11世紀末に位置付けられる。底部を下にして出土した(図版5-4)。3は体部下半にややふくらみを持ち、高台は低いがふんばるような形態を呈している。4は高台が断面三角形を呈する。5も高台が断面三角形であるが、1や4が直角三角形であるのに対して正三角形状を呈しており、取り付けも粗雑で底部には糸切り痕を残していることから、13世紀代に位置付けられる。6と7は小碗であり、同一遺構からの出土である。共に断面三角形の高台がつく。12世紀前半に位置付けられる。8と9はやや深めの小皿と思われる。10はかわらけである。体部は深めであり、山茶碗の小皿を模したものと思われる。12世紀後半の所産と考える。9と同じ柱穴から出土した。

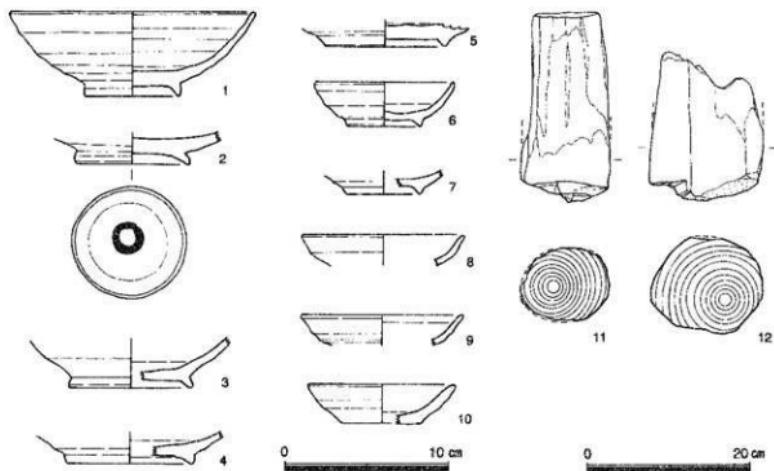
柱根に関しては、そのほとんどは腐食による劣化が著しく、図化が困難であった。その中でも比較的残存状況の良好な2点を掲載した。11と12はいずれもイヌマキの芯持ち材である。上部は劣化しているが、下端部は切断による刃物痕が明瞭に残っている。径は11～14cmほどで、さほど太い柱ではない。



第7図 SH 901



第8図 SH902・903・904



第9図 柱穴出土遺物

## 2. 井戸跡

### S E 501 (第10・11図、図版6)

2区H3グリッドの、SE506より4m南で検出した。木組井戸であり、板材を縦方向に組んで井戸の四周に巡らし、四隅に立てた柱に横棟を取り付けて縦板を保持する構造を持つ。井戸側は一辺0.8mの正方形を呈し、軸はN-8°-Eを示す。横棟は上下2段になるものと思われるが、上段の横棟に関しては腐食が顕著で遺存状態が極めて悪く、隅柱も上部が腐食しているために仕口等不明な点が多い。一方、下段は直径4cmの丸太材が横桟木として使用されている。樹種はユズリハ及びシオジである。隅柱のホゾ穴は斜交いに開けられており、横棟の仕口は包込ホゾで組まれている。検出面から底までの深さは0.9mであり、底には全面に礫が敷かれる。これら礫は大津谷川で採集できる川原石であり、平坦な部分を上側に向けた状態で敷かれている。井戸内覆土は2層に分層でき、井戸底から約10cm上までは暗緑灰色シルト質粘土が堆積していた。この層は粘性が極めて強いがしまりゆるく、5mm以下の炭化物や3mm以下の小礫、植物の小片を多く含んでいた。それより上層は暗青灰色シルト質粘土が堆積していた。この層は下層の暗緑灰色シルト質粘土よりも粒子がやや粗めである。粘性が高く、微小な混入物（炭化物・植物片・白色粒子等）を多く含み、ラミナが確認できた。この2層の層界にはタケ・ヨシ・アシの植物片が薄く堆積していた。掘り方は上面では直径1.35mの円形を呈するが、底部付近では隅丸方形気味となる。井戸側の裏込めには主に粘土と砂が使われており、これが互層をなしている。掘り方からは、井戸側の北面外側と南面外側に直径20cmの自然礫が標高58.4mのレベルで据えられた状態で出土した。

本遺構からは覆土から81点、掘り方から7点、全部で88点の土器片が出土した。これらのうち今回図化したのは13~21である。土器以外に出土した遺物は23~27の5点である。13~27までの遺物のうち、井戸底から出土したのは14・16・17・22・25であり、掘り方から出土したのは15・21である。他は井戸内覆土からの出土である。

13は山茶碗の破片で、口縁部が外反する。14は山茶碗の底部で高台は断面三角形を呈し、見込みに

高まりを有する。底部には糸切り痕を残す。底部を下にして出土した。15も山茶碗の底部で高台は断面三角形を呈するが、底部に糸切り痕が残り、高台は粗雑に取り付けられる。16～19は山茶碗の小皿である。17は16に比べて器高が低くなる。17は口縁部がやや尖り、一部に煤が付着することから灯明皿に転用された可能性があるが、長期使用されたものではない。16及び17は口縁部を下にして出土した。19は底部に墨書きがみられるが状態悪く判読できない。20は小碗である。21は龍泉窯系青磁碗である。内面に割花文が施される。22（図版16）は壺頸部破片である。おそらく灰釉陶器とほぼ同時代のものと思われるが、産地や年代等の特定が困難である。破片であることから単に井戸に廃棄されたものと考えたが、井戸底で外面を上に向けて出土した状況からすると、あるいは井戸を構築する際に石と同じように意図的に底に敷いたのかもしれない。以上の他に、図示はしなかったが掘り方から口縁部に釉を濁け掛けした山茶碗破片が出土し、井戸内覆土から伊勢型鍋の口縁部破片と白磁四耳壺肩部破片、白磁碗破片が出土した（図版16）。伊勢型鍋は後述する254と同型である。

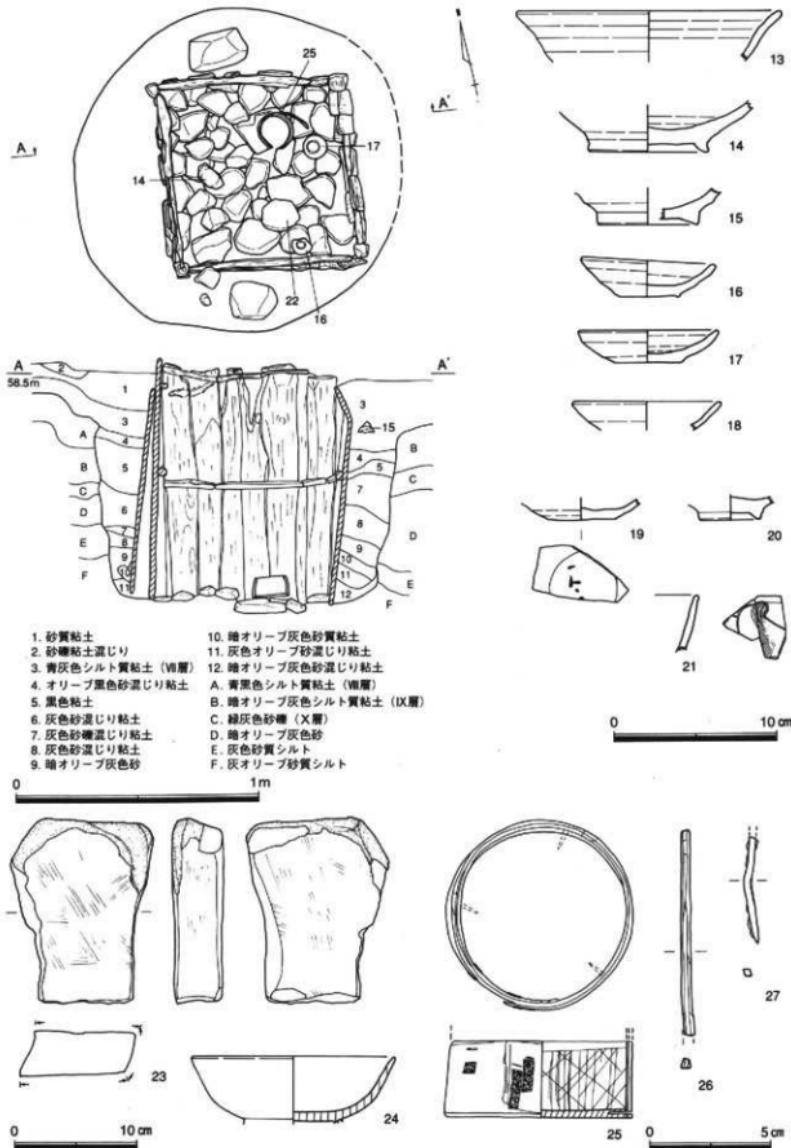
23～27は土器以外の出土遺物である。23は砂岩の砾石である。3面が使用されており、特に正面中央には縱方向に溝状の浅い窪みが残る。24は漆椀である。漆椀の破片は数点出土したが、いずれも同一個体で接合できた。樹種はケヤキ材。高台は遺存していないが、復原すると口径16.7cm、底径およそ8.0cmの椀となる。内外面は黒漆が塗られている。外面には轆轤整形時の痕跡が顯著に残っている。25は曲物である。直径約15cmほどの円形で、底板が付き、側板と底板は木釘で固定されている。いわゆるクレ底タイプの曲物である。木釘はほぼ均等に3箇所打ち込まれていたが、遺存していなかった。側板は2～3重に回り、端は幅0.8cmほどのカバ紐で下内縫じされている。側板内面には縫または斜格子状にケビキが入っている。26は著状木製品である。下端部は欠損している。表面は丁寧に削った刃物痕が残っている。27は釘である。頂部は欠損しており、中央付近でやや曲がっている。全面赤褐色の錆で覆われている。

28～40は井戸材である。28～31は井戸の四隅に立つ隅柱である。ツブラジイ・スダジイの芯持ち材を削り出して角柱状にし、角部分を面取りしてある。下端部は四方向から切断された痕跡がある。いずれもほぼ同じ高さの位置に方形の包込ホゾ穴がある。31は穴を空ける位置を誤ったのか、他箇所に包込ホゾ穴が入っている。上部は腐食が著しく進んでいる。32～40は井戸枠板である。いずれも幅13～18cm前後、厚さは2cm内外の薄板である。樹種はすべてモミ材であり、同一材から削り出された板の可能性が高い。表面に目立った加工痕は見られない。薄板の上部は長い間地表面に露出していたためか、風化が著しく進んでいる。下端部はどれも單軸方向に切断されている。井戸材に使われていた木製品は、特に古い加工痕は見られないことからも、他の用途に使われていたものを転用したというものではないであろう。

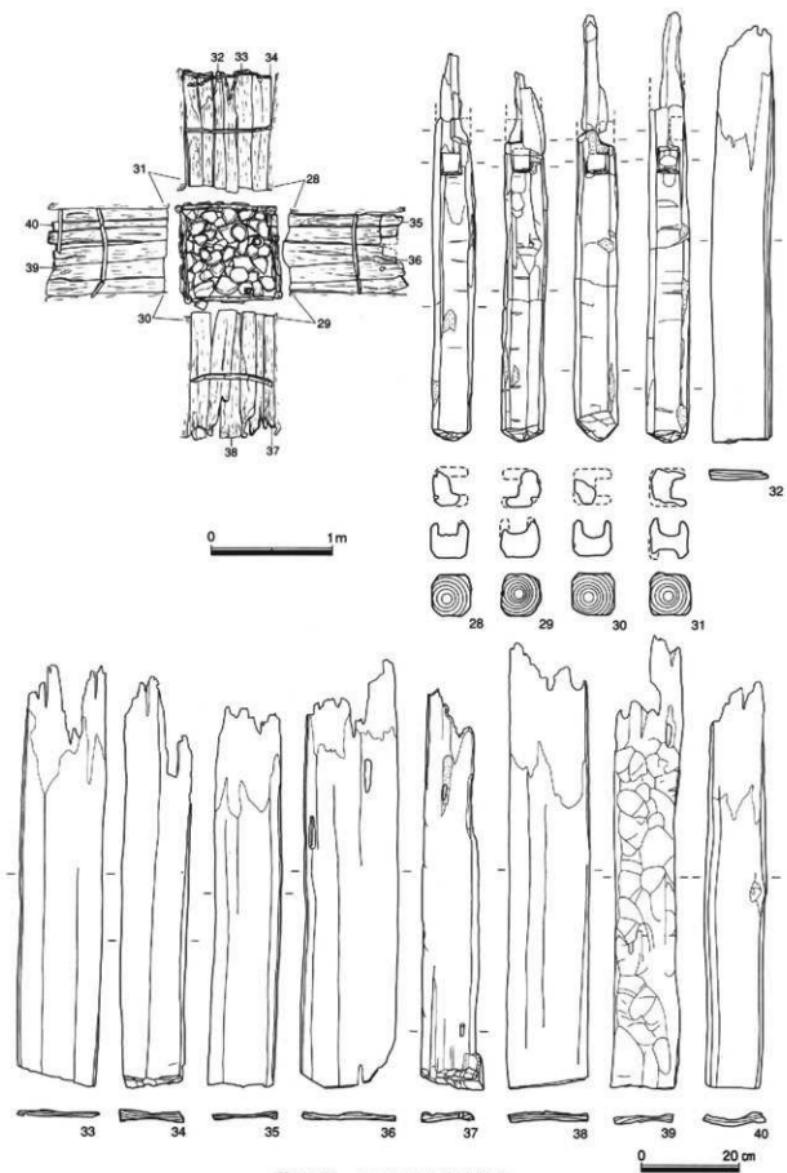
本遺構は、宇野謙夫氏の分類ではB IV類縦板組隅柱横桟どめ井戸に当たるるものと思われる（宇野1982）。年代については、底面から出土した小皿（16・17）や掘り方から出土した山茶碗（15）が12世紀後半、青磁碗（21）が12世紀後半、伊勢型鍋が12世紀代、白磁碗が12世紀から13世紀初頭に位置付けられることから、井戸が構築されたのは12世紀後半と考えられる。

#### SE 506（第12・13図、図版7）

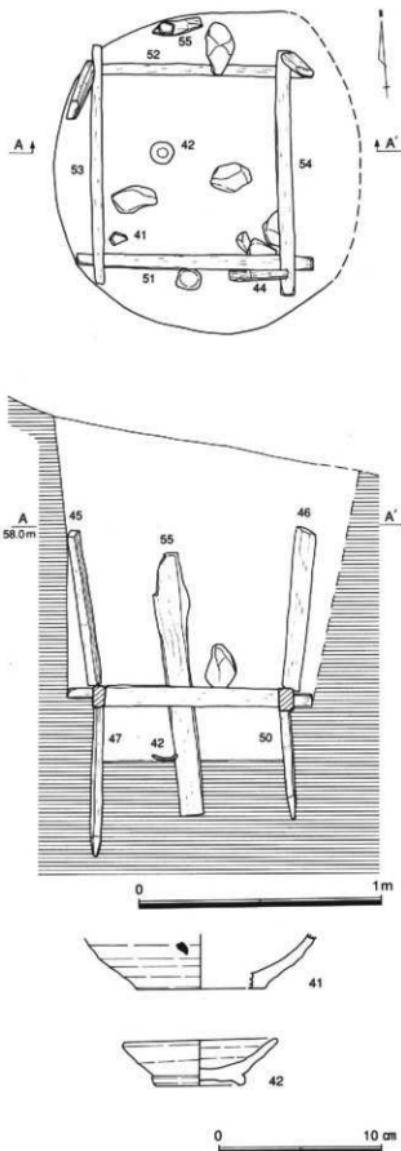
2区H3グリッドの、SE501より4m北で検出した。本遺構の検出面はやや窪地状になっていたことから、SE501よりも遅れて本遺構を確認した。木組井戸であり、両端にホゾを作り出した長さ約1mの角材と両端にホゾ穴を切った同じく長さ約1mの角材を井形に組み合わせた方形の枠（横桟）を井戸の底に据え、その四隅に支柱を立てる構造を持つ。枠は一方0.8mの方形を呈し、方位はN-5°-Eを測る。検出面から枠までの深さは約1m、枠から底までの深さは0.3mである。枠の上側には四隅のうち三隅に柱状の角材が立った状態で出土した。これらは長さが約65cmと一定であることから、井戸の



第10図 SE 501 及び出土遺物



第11図 S E 501出土遺物

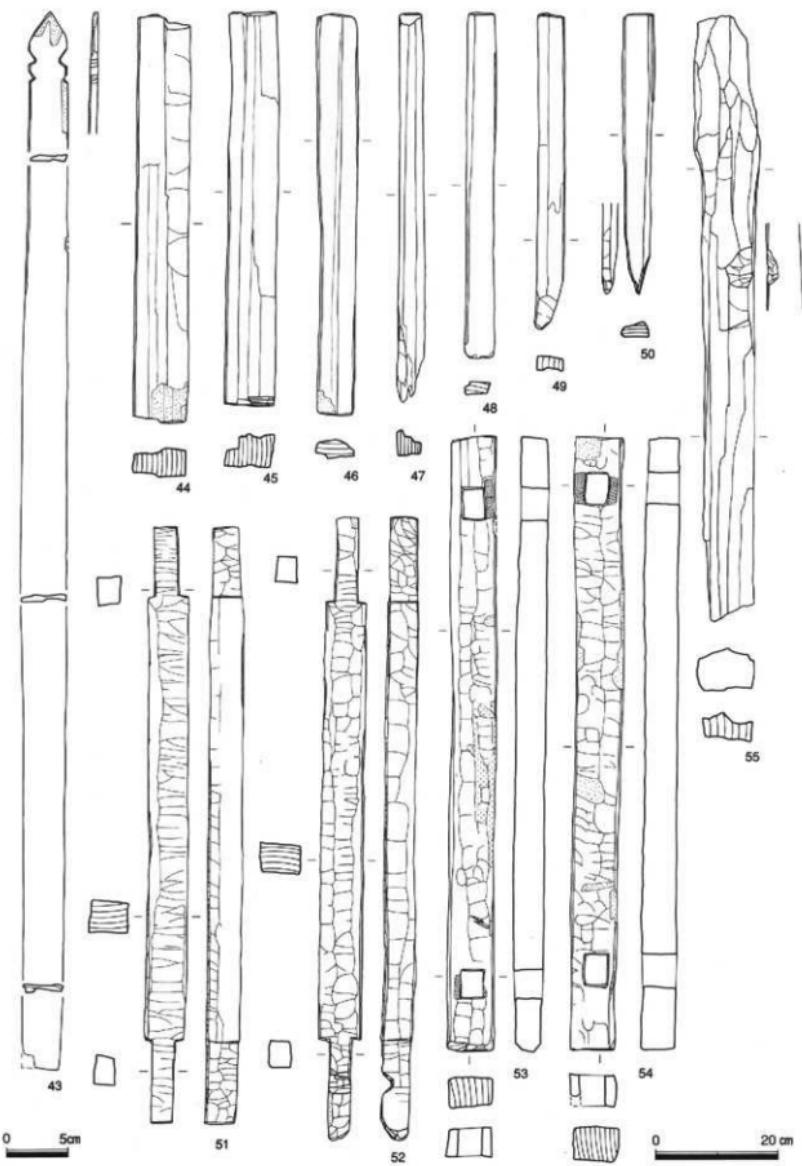


第12図 SE 506 及び出土遺物

支柱であったと考えられるが、本来の位置から若干移動した状態で検出された。また、南西隅からは柱状の角材が出土しなかった。一方、枠の下側には四隅に杭が打ち込まれていた。これらは枠を保持するための基礎杭であり、いずれもが断面長方形を呈し、長方形の断面長辺を方形の対角線上にのるようにして打ち込まれていた(図版7-2)。本来なら枠の外には四周を巡らすようにして縦板が据えられていたのではないかと推測されるが、本遺構から縦板は出土しなかった。おそらく縦板をはじめ井戸側上部構造材は本遺構を廃絶する際に抜き取られたのではないかと思われる。

井戸内覆土は暗オリーブ灰色シルトで粘性はあるがしまりはあまりなく、3~5cmの青灰色シルト質粘土のブロックを多く含んでいた。他に1cm以下の小礫や5mm大の炭化物、植物遺体の小片も含んでいた。掘り方の平面形態は隅丸方形気味の円形を呈し、直径約1.3mを測る。

出土した遺物は少なく、土器片は全部で11点である。井戸材以外で今回掲載したのは、井戸底から出土した土器2点(41・42)と覆土から出土した塔婆(43)1点で、他に片口鉢の脛部破片が出土した。41は底部平底の碗で体部に墨書がみられるが、破片資料であるため全容は不明、おそらく灰釉陶器の最終末期に位置付けられると思われる。42は小碗である。口縁部および内面全体に施釉されている。低い高台の端部全体を少し打ち欠いている。底部には円弧状の沈線が確認できる。43は塔婆で、井戸内覆土中位から出土した。中央やや西寄りの位置で、頭部は南側に、下端部は北側に向く、頭部を底の方にして斜めに落ちたような状態で出土した。厚さ1cmに満たないモミ材の薄板で、長さは残っているだけで86.7cmほどある。頭部の形状は、先端を尖らせ左右両側に2カ所ずつ切り欠きを入れることによって作り出している。表面は割り剥がした面がそのまま残り、面調整された痕



第13図 SE 506 出土遺物

跡はない。あまり丁寧な造りではなく、かなり大雑把に作られた感がある。表面を赤外線で調査したが、墨書き等は確認されなかった。

44～54は井戸材である。44～46は井戸枠より上位で出土した井戸材である。いずれもスギ材で、上端部と下端部に明瞭な切断痕を残すが、他の四面は一部面調整されているものの、ほとんど割り剥がしたままの状態である。47～50は井戸枠より下位で出土した杭である。48は南西隅、49は南東隅から出土した。4点とも頂部に敲打痕が残っている。この4点の頂部には井戸枠の四隅が載っていた。49・50は地面に刺さりやすいように下端部を銳角に尖らせている。51～54が井戸枠として井戸底で井形に組まれていた部材である。51・52にはスギを、53・54にはヒノキを使用している。51・52は両端に突起部を作り出している。四面とも丁寧に面調整されている。52は下端の突起部に切り込み部分がある。53・54は両端にホゾ穴を切っている部材である。ホゾ穴に51・52の突起部を差し込んで井形に組まれていた。いずれも廃材からの転用品ではなく、井戸枠にするために作られた製品であろう。55は井戸枠北面外側から、直立した状態で出土した。正面上面に調整痕、正面中央付近に凹状の加工が施されているが、下半分は割り剥がしたような状態である。この材が井戸の構造材となるかは不明である。他の井戸材と全く異なる様相を呈していることから、井戸材としての加工を中断して廃棄したものと考えることもできる。

この型式の井戸は鎌倉では「方形横棟支柱型」と呼ばれ、多数の検出例がある。この型式は一般に鎌倉時代に多く検出されることがある（斎木1989）。宇野氏の分類ではBⅢ類縦板組横棟どめ井戸に支柱を入れるタイプに当たるるものと思われる（宇野1982）。井戸の覆土が人為的な埋土の様相を呈していたことに加え、井戸枠よりも上側の構造材が抜き取られた可能性があることから、井戸を破却して埋め立てたことが分かる。井戸の年代については、井戸底から出土した土器（41・42）から、11世紀末から12世紀にかけての時期と考えられる。

### 3. 溝状遺構

#### S D 1 3 3 (第14図、図版9)

1区及び2区のG 1・G 2・F 2・F 3・E 3グリッドで検出した。全長は約25.4mで、遺構の東端と西端は調査区外に続いている。最大幅40cm、検出面からの深さは最深10cmと、浅く幅の狭い溝である。溝の方位はN-32°-Eを示し、SD189と方向性は同じである。覆土は黄褐色砂主体だが、底には粘土が堆積していた。遺物は山茶碗の破片が1点出土しただけである。

#### S D 1 6 6 (第14図、図版9)

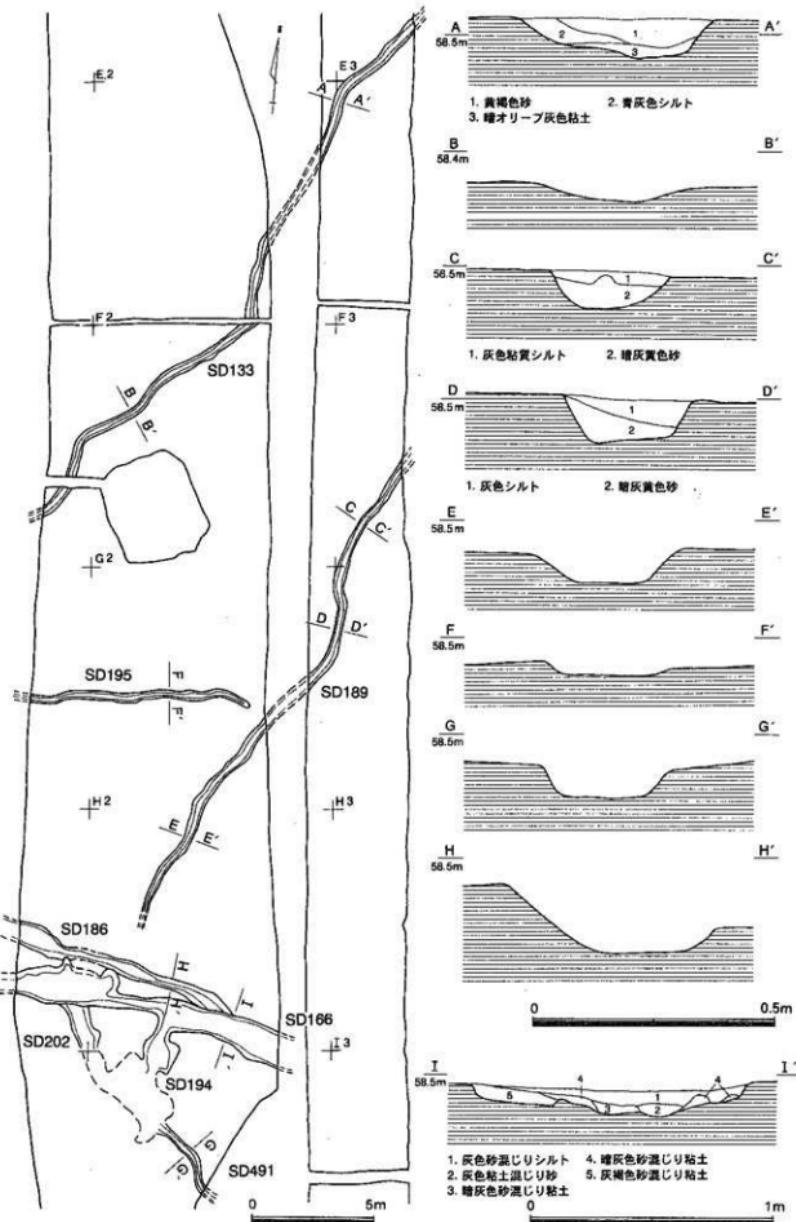
1区I 1・I 2・J 2グリッドで検出した。全長は約11.2mで、西端は調査区外へと続いているが、2区では確認できなかった。最大幅は約1.1m、検出面からの深さは最深15cmで、溝の方位はおよそN-81°-Wである。本溝は溝幅がSD204を除く他の溝状遺構と比べて広い割には浅く、また底は凹凸が顕著で溝幅も一定しないことや、2区では遺構として検出されなかったことから、本遺構は人為的に構築された溝というよりも、局所的な微地形の可能性がある。遺物は小皿底部やかわらけ等、全部で84点の土器片が出土したが、図化できるものはなかった。

#### S D 1 8 6 (第14図)

1区I 1・I 2グリッドで検出した。全長は約9.6mで、遺構の西端は調査区外へと続いているが東端はSD166で切られている。溝の幅は約40cm、検出面からの深さは約5cmで、浅く幅の狭い溝である。溝の方位はおよそN-73°-Wである。遺物は出土しなかった。

#### S D 1 8 9 (第14図、図版8)

1区及び2区のI 2・H 2・H 3・G 3グリッドで検出した。全長は約21mで、溝の東端は調査区



第14図 溝状造構

外へと続いているが溝の南端は攪乱によって破壊されており、本溝がどこで終っているかは不明である。最大幅は25cm前後、検出面からの深さは約10cmであり、浅く幅の狭い溝である。溝の方位はおよそN-25°-Eであり、SD133と方向性は同じである。覆土は上位にシルトが堆積するが、下位には暗灰黄色砂が堆積していた。遺物は出土しなかった。

#### SD194 (第14図、図版9)

1区I2・J2グリッドで検出した。全長は約2.2mで、平面形は非常に乱れている。溝の北端はSD166につながっており、南端には凹地が広がっている。本溝がSD491と続いているかどうかは不明である。溝の幅は約0.55m~1.4mと一定しない。検出面からの深さはおよそ5cmで、溝の方位はおよそN-10°-Eである。遺物は出土しなかった。

#### SD195 (第14図、図版10)

1区H1・H2グリッドで検出した。全長は約9mで、西端は調査区外へと続いている。遺構の幅は25cm前後、検出面からの深さは数cm程度と、浅く幅の狭い溝である。溝の方位はおよそN-84°-Eであり、グリッドの方位とはほぼ一致する。遺物は出土しなかった。

#### SD202 (第14図、図版9)

1区I1・I2・J2グリッドで検出した。全長は約1.9mで、溝の北端はSD166に切られているが、それよりも先がどのようになっているかは不明である。溝の南端には凹地が広がっているが、本溝がSD491に続くかどうかは不明である。最大幅0.7m、検出面からの深さ約5cmを測り、溝の方位はN-23°-Wを示す。遺物は出土しなかった。

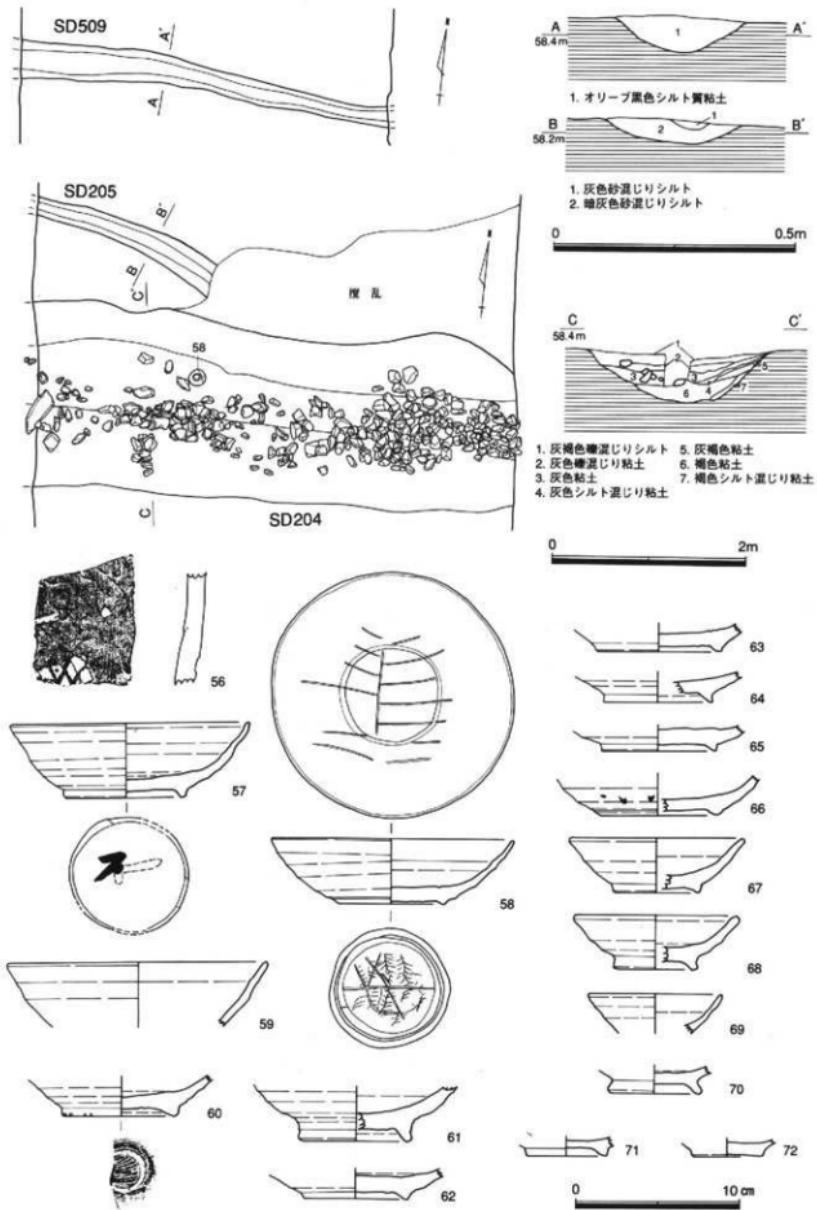
#### SD491 (第14図、図版9)

1区J2グリッドで検出した。全長は約3.1mで、溝の南端は調査区外へと続いているが、北端には凹地が広がっている。本溝がSD202（あるいはSD194）に続くかは不明である。最大幅は約25cm、検出面からの深さは約5cmで、溝の方位はN-40°-Wを示す。遺物は出土しなかった。

#### SD204 (第15図、図版10)

1区K1・K2・L1・L2グリッドで検出した。全長は約5mで、溝の西端は調査区外へと続いているが、東端（2区側）は近代の攪乱によって破壊されており、遺存していなかった。最大幅は約2m、検出面からの深さはおよそ0.5mである。溝の方位はおよそN-88°-Eであり、グリッドの方位とはほぼ一致する。覆土は7層に分層できたが、主に灰色～褐色粘土が堆積する。溝内には多数の自然縛（角縛）が投棄されており、溝底から完形の山茶碗（57・58）が出土している。

本遺構から出土した遺物は、土器片が全92点である。このうち56~72を掲載した。他に輪花小碗やかわらけの破片が出土したが図化できなかった。56は涅美の壺頭部破片である。外面に叩き目がみられる。57~66は山茶碗である。57は体部下半がややふくらみをもって立ち上がり、口縁部は内湾する。高台は断面三角形を呈し、底部には糸切り痕が残る。高台内には墨書きがみられるが、判読是不可能である。58は浅い碗で、体部がやや内湾しながら直線的に立ち上がる。高台は断面三角形を呈するが、低く粗雑に貼り付けられている。底部には糸切り痕が残る。見込みには線刻がみられるが、おそらく葉脈を模しているものと思われる。底部にもヘラ書きによる線刻がみられ、こちらも葉脈をあらわしているものと思われるが、見込みに施された線刻とは描画技法が異なる。葉脈を模していると考えられる山茶碗は旗指古窯跡の6-III-14・17号窯灰原からも出土しており、58の見込みの線刻に一見類似するが、技法的に異なる（渡谷1994）。また、石成遺跡でも草木を表現した線刻土器が出土しているが、58の底部の線刻がこれに技法的に類似するものと思われる。59は体部が直線的に口縁へと続き、内面に降灰釉がみられる。60は河西系の碗で、高台は丁寧に取り付けられ、高台端部に粉穀痕が残る。高台内は円弧状に沈線が施され、その内部には糸切り痕が残る。61は比較的高い高台であり、底部には糸



第15図 SD204・205・509及び出土遺物

切り痕が残る。66は体部に墨書きがみられるが、破片資料であるため、詳細は不明である。67～71は小碗、72は小皿である。このうち68は胎土に長石が混入していることから常滑の小碗と思われる。以上、溝底から出土した57・58以外は全て覆土からの出土であり、56・59・60・65・67・70～72は1層、64・68は2層、69は3層、61は6層から、それぞれ出土した。遺物の年代については、56は12世紀代、57は12世紀末、58は13世紀中頃、60は13世紀前後、68が12世紀前半である。以上のことから、本遺構の年代は12世紀末から13世紀中頃と考えられる。

#### S D 2 0 5 (第15図)

1区K1・K2グリッドで検出した。全長は約1.9mで、溝の西端は調査区外へと続いている。溝の東端は擾乱によって破壊されており、詳細は不明である。幅はおよそ30cm、検出面からの深さは5cm前後で、浅く幅の狭い溝である。覆土は砂混じりシルトが主体で、Ⅶ層よりもやや暗色である。溝の方位はおよそN-72°-Wである。遺物は出土しなかった。

#### S D 5 0 9 (第15図)

2区K2・K3グリッドで検出した。全長は約3.8mで、溝の東端は調査区外へと続いているが、西端は1区では検出されなかった。幅はおよそ30cm、検出面からの深さ5cm前後で、浅く幅の狭い溝である。覆土はシルト質粘土、溝の方位はおよそN-86°-Wである。遺物は山茶碗の破片が1点出土しただけである。

### 第3節 遺構外出土遺物

#### 土器

本節で取り上げる遺物は包含層であるⅥ層～Ⅷ層から出土したもの以外にも、表探や擾乱出土や、あるいは排水溝掘削時に出土したため層位が不明なもの等がある。本稿ならこのような出土状況をなす遺物は包含層出土遺物とは別項で報告すべきであるが、今回は包含層以外から出土した遺物が量的に多かったため、ここでは便宜的にまとめて掲載した。出土地点等のデータは一覧表(第7表)を参照していただきたい。

灰釉陶器(79・80) 明らかに灰釉陶器と認められるのは、79と80である。それぞれ高台のみの出土である。79は断面形が舌状を呈する。80はしっかりと作りの高い高台である。

山茶碗(碗、73～78・81～191) 遺構外から出土した山茶碗のうち、全体の形状を伺うことができるのは96と155と156の3点のみである。73～78は口縁部から体部にかけて遺存しているものである。73は器壁がうすく丁寧な作りをしており、口唇部が玉縁状を呈していること等からも、古い段階のものであると考える。一方で78は浅い碗であることや、体部の作りがやや粗雑であることなどから、新しい段階に位置付けられる。

81～191は高台の形状によって1～6まで6分類できるものと考えた。それらは更に高台の高さをもとに細分した。分類の基準は次のとおりである。

1類(81～87) 高台が高く、作りが非常にしっかりしている一群。

2類(88～94) いわゆる三日月高台で、ふんばるような形状を呈している一群。

3類(95～110) 2類に類似しているが、高台がハの字状に開く一群。

4類(111～149) いわゆる三角高台で、高台の断面形が直角三角形のふんばるような形状を呈する一群。これは更に高い高台の4a類(111～133)と低い高台の4b類(134～149)とに細分した。

5類(150～178) いわゆる三角高台だが、4類と異なり高台の断面形が正三角形～二等辺三角形を呈する一群。これも4類と同じく、更に高い高台の5a類(150～165)と低い高台の5b類(166～178)

とに細分した。

6類（179～191）低くつぶれたような高台であり、高台の付け方も非常に粗雑な一群。

これら遺物の中で全体の器形が伺える96は深いタイプの碗であり、体部下半がやや膨らんで立ち上がる。輪花碗であり花弁は4弁が残存しているが、元は5弁であったと思われる。花弁は指ナデでつくりだしている。底部には糸切り痕が残る。高台は高く、直線的に立ち上がっており、高台端部にスノコ痕が残る。155と156は高台が低い三角形状を呈しており碗も浅いつくりとなっている。155と156とを比較すると、156の方が器高も高台も低くなっているが、口径は両者ともほぼ同じである。156は底部に糸切り痕が残る。

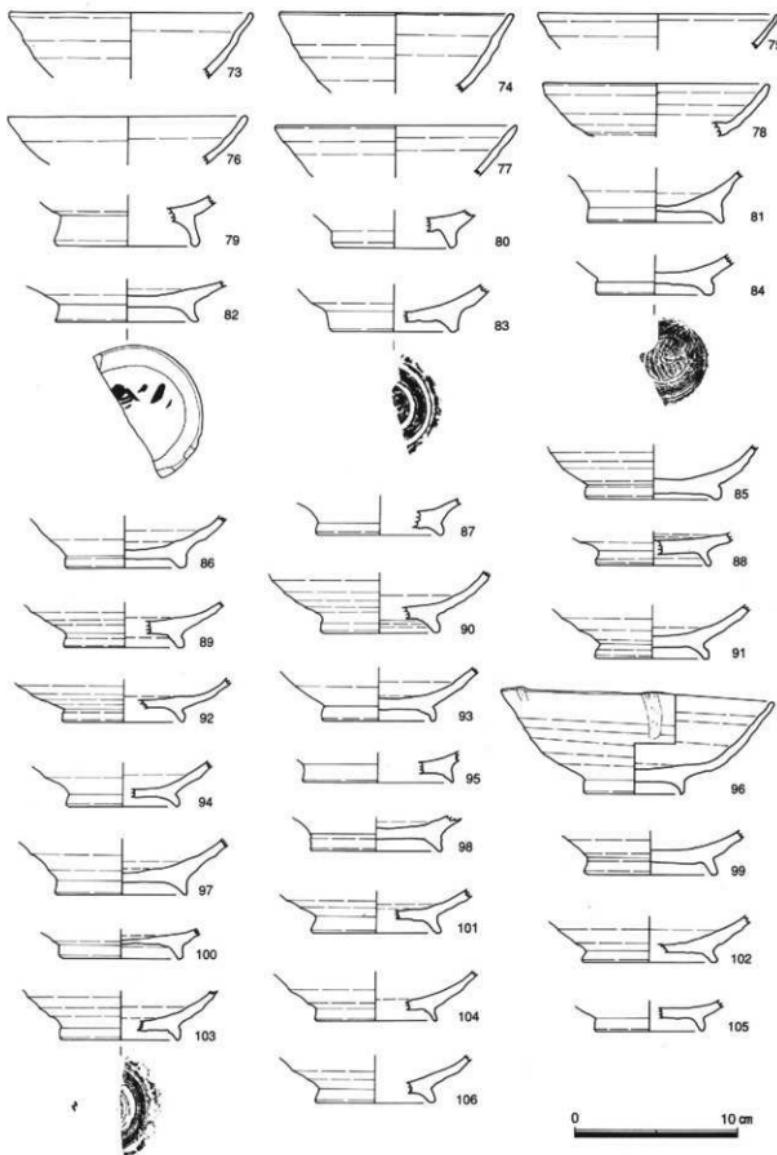
上記以外に特徴的なものとして、高台内に円弧状の沈線を有するものが確認できる。83・84・103・171がそれである。このうち103は糸切りの際につけた沈線である可能性が考えられるが、83はヘラ状工具により強く刻まれている。他の84・171も浅い沈線であるものの、ヘラ状工具により施されたものである。また176に関しては、体部に「×」の線刻が確認できるが、破片資料であるため全容は不明である。82・168は墨書き土器で、底部に書かれている。168は「·」か。82は判読不可能である。なお、150は湖西系の山茶碗であるが、その他大半は東遠系山茶碗であり、基本的には金谷古窯跡群の製品と考えられる。

山茶碗の高台の形態変化に関しては、概して高く丁寧な作りの高台から低くつぶれたような粗雑な作りの高台へといふ移行で捉えられる。最近では松井一明氏が東遠系山茶碗についてまとめており、Ⅰ期～Ⅲ期に区分した編年案が公表されている（松井1994）。氏はそれぞれ山茶碗Ⅰ期を12世紀前半～中頃に、山茶碗Ⅱ期を12世紀後半に、山茶碗Ⅲ期を13世紀に比定しているが、金谷古窯跡群に関しては更にⅡ期を古・新の2段階に、またⅢ期を1～3の小期に細分している。今回の分類では、1類～3類は丸山古窯跡やあざみ沢窯跡出土資料に、4類はすやん沢窯跡に、5類はすやん沢窯跡やきつね沢窯跡に、6類はほろん沢B地点窯跡に、とそれぞれ形態的な類似がみられる。以上のことから1類～3類は山茶碗Ⅰ期、4類はⅡ期、5類はⅡ期～Ⅲ期前半、6類はⅢ期にとそれぞれ位置付けられるだろうが、今回出土した山茶碗の大半が高台のみの資料であるため、これ以上の詳細な時期の特定は難しい。しかし全体的には4類と5類に属する碗の出土量が多く、その一方でⅢ～Ⅳ期に属する6類が量的に少ないという様相を伺うことができる。

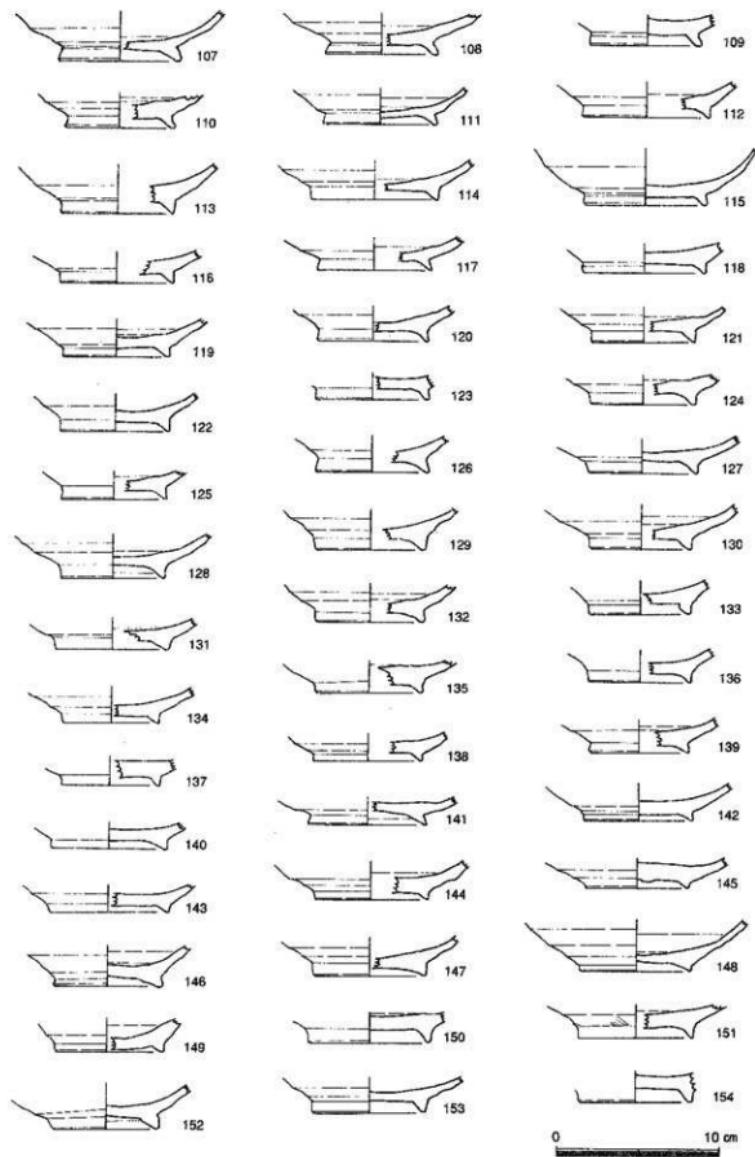
山茶碗（小碗、192～218）今回掲載した全27点のうち、192～205は口径9cm、器高3cmを越え、今回出土した小碗の中では比較的大きめの部類になる。192は輪花小碗で、残存1弁である。193は体部下半に稜を持ち、口縁部を玉縁状につくりだす。194も口縁部を玉縁状につくりだしている。以上の192～194は古い段階の様相を残しているといえる。203～205は器壁を薄く作り出しておらず、掲載した小碗の中では大きめの部類であるが、いずれも底部に糸切り痕を残しており、特に203は高台の取り付け方が粗雑である。なお、199は内面のほぼ全体に煤が付着しており、灯明皿に転用されて長く使用されたことが伺える。また201は内面に窯壁の崩落した壁体が融着しているが、これが集落遺跡である矢崎遺跡から出土したこと、このような粗悪品も流通していたことが伺える。

一方、206～217は口径9cm前後で器高は2.5～3cm程度とやや小さくなるが、器形的には195～205とさほど変わらない。口縁部も206が外反気味であるのに対して、他は直線的あるいは内湾気味に開く。しかし217だけは口径7.8cm（推定値）、器高2.2cmと段違いに小さく、高台も形態化して小皿231と器形的に近い形態である。おそらく217以外は山茶碗Ⅰ～Ⅱ期（12世紀中頃）に比定されるものと思われるが、217に関してはこれよりも新しくなるものと思われる。なお、218は墨書き土器であり、高台内に「○」が書かれている。

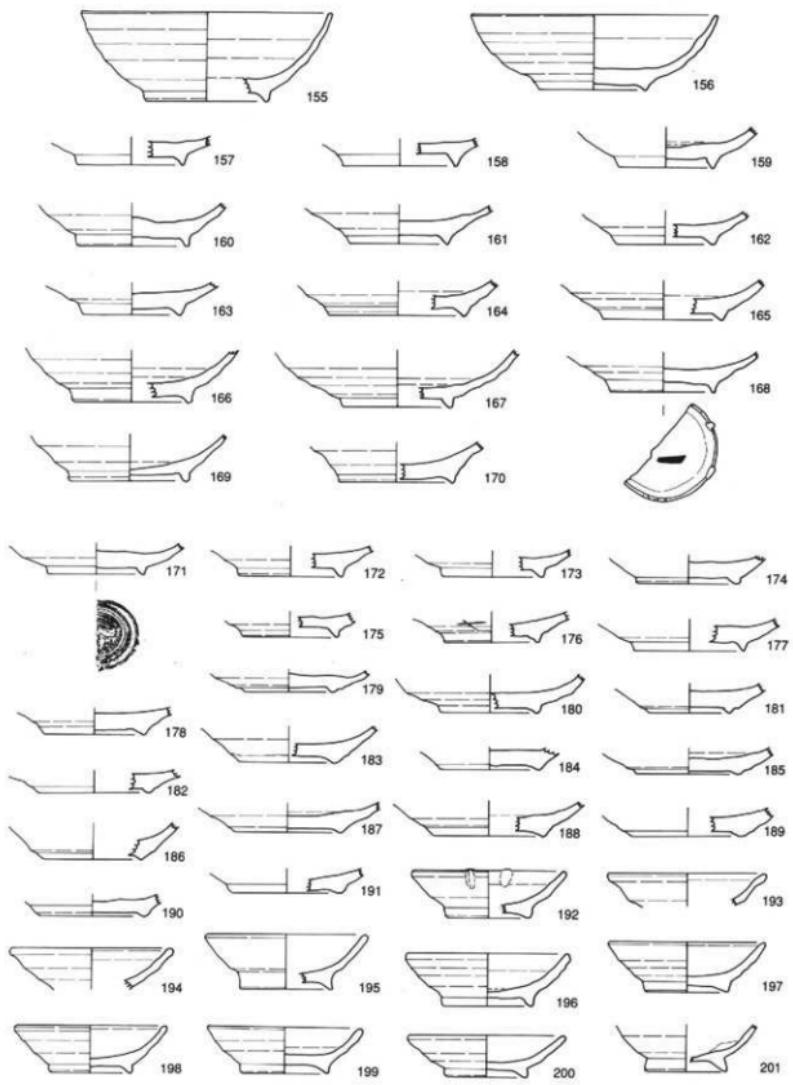
山茶碗（小皿、219～243）掲載した全25点について、法量を目安に3分類を試みた。



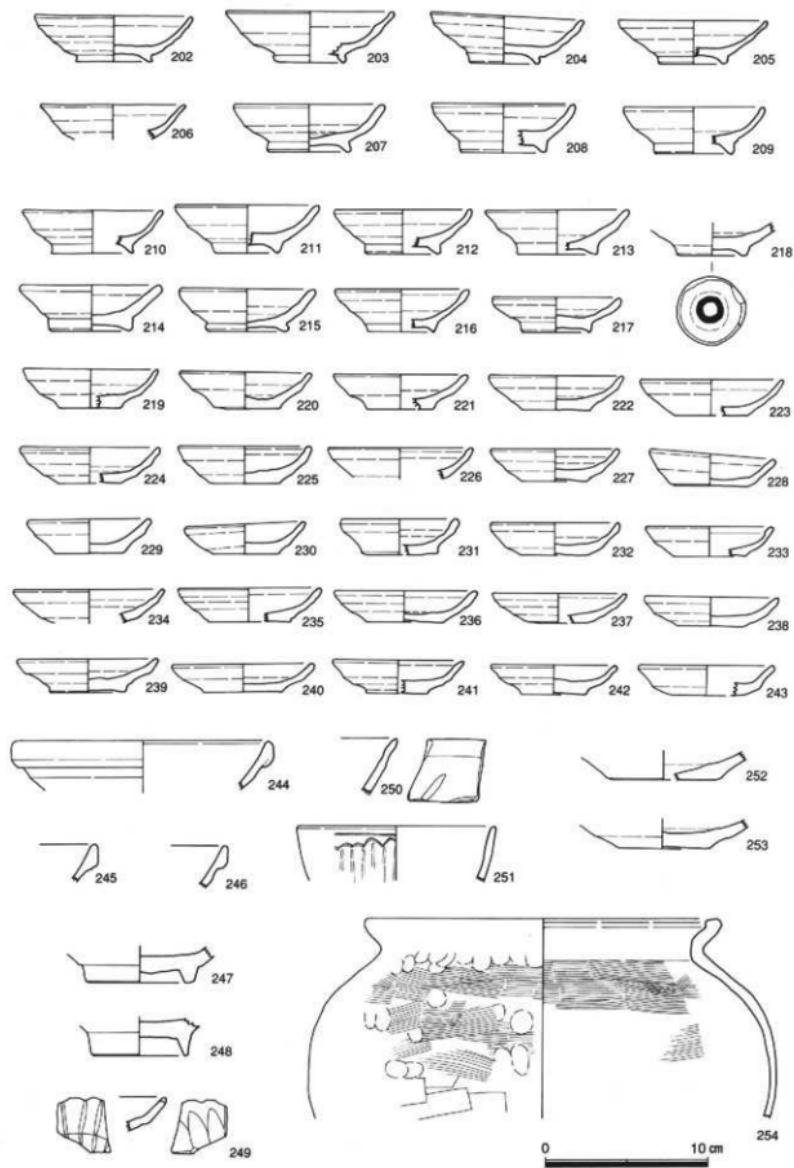
第16図 遺構外出土遺物（中世1：土器）



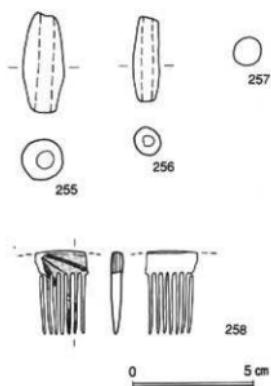
第17図 遺構外出土遺物（中世2：土器）



第18図 遺構外出土遺物（中世3：土器）



第19図 遺構外出土遺物（中世4：土器）



第20図 遺構出土遺物  
(中世5: 土製品・金属製品・木製品)

類とも山茶碗II期の古い段階に比定できる。また、3類に関しては極端な器高の低下や小型化はみられないことから、山茶碗II期の新しい段階に位置付けられよう。ただし240のみ器高の低下が顕著であることから山茶碗III-1期に比定したい。小皿も碗と同様に、山茶碗III期の後半にまで下る資料はみられなかった。

**陶磁器 (244~251)** 244~246は白磁碗の口縁部である。口縁は玉縁状を呈している。247~248は白磁碗の高台である。247は見込みに蛇の目釉剥がれ残る。白磁に関しては横田賢次郎・森田勉兩氏が太宰府から出土した輸入陶磁器の分類を行っているが、これによると244~246はIV類に、247はV類に、248は細く高く直立した高台を呈することからV類に位置付けられる(横田・森田1978)。いずれも12世紀代の所産である。249は青白磁の菊皿である。内面に型押しの花文が施されており、外面には縱方向にヘラ状工具による沈線が施される。16世紀中葉に位置付けられる。250~251は龍泉窯青磁碗である。250は内面に草花文が施されている。横田・森田氏の分類ではI類に相当すると思われる。12世紀後半に位置付けられる。251は外間に線描蓮弁文が施される。上田秀夫氏の分類ではB~IV類に相当し(上田1982)、15世紀代に位置付けられるものである。

**土師質土器 (252~254)** 252は在地系のかわらけである。摩耗がひどく詳細は不明である。253は白かわらけである。底部は糸切り痕が残る。かわらけは以上の2点を掲載したがいずれも底部のみの残存状況であり、年代等不明な部分が多い。254はいわゆる伊勢型鍋である。口縁部は「くの字」状に外反し、さらに端部を内部に短く折り返す。胴部はやや扁平な球形状を呈する。外面は頸部に指頭痕、体部にハケ状の調整痕がみられる。内面にもハケ状の調整痕がみられる。胴部器壁の厚さは約4mm程度で胎土に砂粒を多く含んでいる。新田洋氏の分類(新田1985)では4類に相当すると思われ、12世紀代(VI期)という年代観が与えられている。

#### 土製品・金属製品・木製品

255~256は陶錘である。255の上端がわずかに欠損している以外は完形である。両方ともナデが残っており、端部を面取りする。重量はそれぞれ8.45gと4.60gである。257は鉄砲玉である。直径は1.1cm、

重量は9.14 gである。鎌の色調から鉛玉であると思われる。第1面よりも上層からの出土であり、戦国期以降のものである。258は漆塗りの横櫛である。包含層より出土した。樹種は散孔材。残存状態は極めて悪く、全体の1/4程度しかない。表面には赤漆が塗られ、その上に黄土色を呈した漆と金で模様が施されている。棟は丸くカーブを描く。

## 第4節 出土遺物の計数調査

### 1. はじめに

今回、矢崎遺跡で出土した中世遺物を報告するにあたって、土器の総量を数値化することとした。遺物の多寡をあらわすのに「多い」「少ない」「微量」という表現では具体性に乏しく、遺物量を他と比較検討することが難しい。そこでコンテナ数で表現することも行われるが、これはあくまで大雑把な掴みに過ぎず、統計的処理は不可能である。そのため近年では、遺跡から出土した土器の破片を全点計数するという試みが各地でなされている。静岡県においても横地城跡総合調査において県内32の中世遺跡で出土遺物の計数調査を実施している。当研究所でも元島遺跡で行っているが、矢崎遺跡の今次調査においても同様に計数調査を行ったので、その結果を本節に記載する。なお計数調査を実施するにあたり、菊川町教育委員会坂本和弘氏、当研究所河合修氏に御教示いただいた。記して感謝申し上げる。

### 2. 方法

出土遺物の計数に際しては、以下の方法に従った。

- 1 中世の土器を対象とする。具体的には上限を山茶碗成立期から下限を大窯第4段階までとする。
- 2 接合前の破片を計数する。この際、発掘調査時の過失等により破損したことが明瞭なものはカウントしない。
- 3 包含層から出土した山茶碗はグリッド毎に計数する。遺構から出土した山茶碗はこれを調査区毎に一括して計数する。表探・攪乱出土山茶碗は客土に伴う混入の可能性（もっとも、今回の調査区内には大規模な客土は存在しないと思われる）を考慮し、表探資料として調査区毎に一括して計数する。排水溝・調査区壁面・試掘坑出土山茶碗は表探資料に比べて、調査区内からの出土という点で比較的出土状況の信頼性が高いと思われる所以、排水溝資料として調査区毎に一括して計数する。
- 4 山茶碗は口縁部、体部、底部に分けて計数する。この場合、口縁部あるいは底部が全く遺存していない破片を体部としてカウントする。また口縁部から底部まで遺存している場合は、底部としてカウントする。
- 5 山茶碗の個体数を算出するにあたっては、底部破片を基準とする。底部が1/2以上遺存している破片を1個体とし、1/2遺存破片が2点で1個体、以下同様に1/3遺存破片が3点で1個体、1/4遺存破片が4点で1個体、1/5遺存破片が5点で1個体とする。底部の遺存が1/5以下の破片は、個体数のカウント対象外とする。
- 6 山茶碗以外の土器の個体数を算出するにあたっては、山茶碗と同じ方法をとらず、破片の状況（接合関係等）をもとにして算出する。
- 7 遺物のうち極微小であるものや、微小かつ摩滅が顕著であること等から分類が不可能な破片は、計数の対象外とする。

今回の計数においては口縁部破片を基準とした個体数算出は行わなかった。その理由として、口縁部は焼きひずみ等による口径誤認の危険性が考えられることや、矢崎遺跡では1/5以上遺存している口

縁部破片が少なく、小破片では口径値の算出が困難な状況が想定されたこと等があげられる。

### 3. 結果

山茶碗の計数結果を第4表にまとめた。実際に作業をおこなったところ体部小片や小碗・小皿の口縁部小片等判別の困難な破片があり、これらの分類に苦慮した。極微小あるいは摩滅が顕著な破片は先述したとおり計数対象外としたが、全破片数のカウントという調査方法のため、なるべく多くの破片を計数することを心がけた。その結果、計数対象外の破片点数は30点以下に抑えられたものの、分類の不確実な破片の計数により、データの信頼性低下の可能性を考える必要が生じた。一方で底部破片に関しては判別が容易であったことから、底部計数値の信頼性は高いと考えられる。そこで器種毎の全破片数をもとにした比率と底部破片数をもとにした比率を比較したところ、最大で約9%の違いがみられた。小碗と小皿の比率が逆転てしまっているものの出土量の比率は概ね、碗6強：小碗2前後：小皿1.5～2前後：片口鉢0.3以下という傾向を読みとることはできる。しかし個体数をもとに算出すると、大きく比率が異なってしまうことが判明した。

計数した包含層出土山茶碗片のグリッド毎の出土量を第5表にまとめたが、この結果では各器種ともにJ2～L2グリッドを中心とした地点とF3グリッドで多く出土していることが分かる。前者はSD202の南側であり、後者はSD133とSD189とに挟まれた窪地状の部分と、ともに遺構の分布が疎な場所である。逆に柱穴が密に検出されたI2～I3グリッドを中心とした地点は遺物の出土量が必ずしも多くないことが判明した。

山茶碗以外の土器を含めた計数結果(第6表)をみると、全破片数のうち山茶碗の占める割合は約94%であり、出土土器のほとんどを占めている。その一方で土師質土器は約4%と低く、舶載陶磁器は1%にすぎない。舶載陶磁器の中では白磁が過半数以上を占めているが、これはおそらく遺跡の存立時期をあらわしているものと考えられる。これら結果を石成遺跡のデータと比較すると、舶載陶磁器の割合はほぼ同じだが、土師質土器と国産陶器(特に常滑産と瀬戸・美濃産)の割合が全く異なることが分かる。また矢崎遺跡では単位面積あたりの破片出土点数は3.6点、舶載陶磁器点数は0.04点となり、それぞれ11.2点、0.13点という数値の石成遺跡に比べて密度は極めて低いといえる。これは遺跡の存続期間や埋蔵環境の違い等に原因を求める事もできるが、おそらく両遺跡は当時の集落内における位置が異なっていたからではないかと考えられる。

#### <第4章 参考・引用文献>

- ・菊川町教育委員会 2000 「横地城跡 総合調査報告書資料編」
- ・(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995 「石成遺跡」
- ・上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
- ・宇野隆夫 1982 「井戸考」「史林」65巻5号
- ・森木秀雄 1989 「井戸の発掘」「よみがえる中世3 武士の都鎌倉」 平凡社
- ・滝谷昌彦 1994 「旗指占窯跡群と居倉遺跡の関係についてー「尺」などの文字資料を中心としてー」『向坂鋼二先生還暦記念論集 地域と考古学』
- ・新田 洋 1985 「平安時代～中世における烹炊用具ー『伊勢型』鍋ーに関する若干の観察」『三重考古学研究』1 三重考古学談話会
- ・松井一明 1994 「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究』25 静岡県考古学会
- ・横田賛次郎・森田勉 1978 「太宰府出土の輸入中国陶磁器についてー型式分類と編年を中心としてー」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館

第4表 山茶碗破片計数表

第5表 調査区内出土山茶碗破片分布表

既			小 碗			小 盆			片口鉢		
GRID	1	2	3	GRID	1	2	3	GRID	1	2	3
D	0	0		D	0	0		D	0	0	
E	0	4	16	E	0	3	1	E	0	0	2
F	0	2	61	F	0	1		F	0	0	
G	0	13	33	G	0	5	5	G	0	6	2
H	2		6	H	1	12	3	H	0	5	1
I	16		31	I	3	7	5	I	0	13	4
J		505	50	J	7	86		J	3		13
K	128	3.0		K	50	126	9	K	15	79	7
L	61	174		L	27	141		L	8	63	
M				M		4		M		2	
遺構出土		203	遺構出土		74	遺構出土		24	遺構出土		4
排水溝出土		287	排水溝出土		122	排水溝出土		50	排水溝出土		0
表 採		83	表 採		22	表 採		15	表 採		1
合 計		2138	合 計		751	合 計		379	合 計		10

第6表 中世器種組成表

項目	矢崎遺跡(第2次)	石成遺跡
山茶碗類	3278 (94.0%)	5841 (62.6%)
山茶碗	2138 (96)	4072 (228)
小皿	379 (49)	1071 (144)
小鉢	751 (60)	653 (123)
片口鉢	10 (2)	45 (11)
土師質土器類	147 (4.2%)	2739 (29.3%)
かわらけ	130 (4)	2473 (123)
鍋類	17 (2)	265 (11)
その他	0	1 (1)
常滑窯	9 (0.3%)	475 (5.1%)
益	0	23 (2)
斐	9	398 (8)
片口鉢	0	54 (5)
その他	0	0
瀬美・瀬西窯	4 (0.1%)	21 (0.2%)
益	2	4 (1)
斐	2	17 (2)
鉢	0	0
その他	0	0
鹿戸・美濃窯	3 (0.1%)	122 (1.3%)
天目茶碗	1	17
碗類	0	12
皿類	0	6
鉢類	0	15
盤類	1	14
擂鉢	1	7
盃・瓶類	0	44
仏具類	0	2
その他	0	5
船載陶磁器	38 (1.1%)	111 (1.2%)
青磁	15 (39.5%)	54 (48.6%)
碗類	12 (10)	50
皿類	2	4
盤類	0	0
盃類	0	0
その他	1	0
白磁	23 (60.5%)	47 (42.3%)
碗類	21	32
皿類	1	9
盃類	0	0
盃類	1	1
その他	0	5
青白磁	0 (0.0%)	4 (3.6%)
碗類	0	1
皿類	0	2
盤類	0	0
他の他	0	1 合子
その他	0 (0.0%)	6 (5.4%)
馬鹿	0	3 天目
泉州系	0	3 灰
志戸呂窯	2 (0.1%)	18 (0.2%)
天目茶碗	0	1 (1)
碗類	0	0
皿類	1	0
盤類	0	2
擂鉢	0	10 (1)
鉢類	0	3
盃・瓶類	1	2
その他	0	0
初山窯	2 (0.1%)	0 (0.0%)
皿類	2	0
その他	3 (0.1%)	6 (0.1%)
	瓦器 1 所在地 2 益・瓶類	瓦器 6 (1)
合計	3486	9333
測定面積	956m <sup>2</sup>	835m <sup>2</sup>

舶載陶磁器分類表

商類	分類	年代	合計
青磁	同安窯系 A類	12C後半～13C前半	1
	B類 (森田 I～II)	12C後半～13C前半	
	龍泉窯系 A類 I～1	12C	
	I～2	12C後半～13C前半	1
	I～3	12C後半～13C前半	3
	I～4	12C後半～13C前半	
	I～2～4	12C後半～13C前半	2
	B類 (運弁文鏡)		
	B類 I～3	13C後半～14C前半	1
	C類 (雪文帶鏡)		
白磁	D類 (端反鏡)		
	E類 (直口鏡)		
	D類 or E類		2
	青磁碗不明		1
	同安窯系		1
磁	龍泉窯系 蜀皿		1
	不明 (腹割か?)		1
	I類 (玉縁)	12C	
	II類 (玉縁)	12C	
白磁	IV類 (玉縁)	12C	5
	V類 (側反)	12C	2
	VI類 (側反)	12C～13C初頭	2
	VII類 (側反)	12C～13C初頭	
	追盤 (側反)	12C～13C初頭	2
	IX類 (口元)		1
	V類 or 蜀類		9
	皿類 D群 (蜀皿)	16C中唐	1
	四耳壺		1
	合計		38

櫛戸・美濃他器種一覧表

器種名	古櫛戸後期				大廈製品	合計	備考
	I	II	III	IV古			
櫛戸美濃				1		1	
盤類	1					1	
丸皿				1		1	大廈第4段階前半
内空皿					1	1	大廈第3段階後半
切山					1	1	大廈第3段階後半
盤類					1	1	尾張型 (5 or 6)
片口鉢					2	1	
合計	1		1	1	1	8	

注) 本表の作成にあたって、舶載陶磁器の分類は菊川町教育委員会「横城跡総合調査報告書資料編(2000)」で示されている分類案に従った。

本表に掲載した石成遺跡のデータに關しても、上記文献から転載させていただいた。

なお、破片点数の右側( )の数値は、個体数を示している。

第7表 中世土器一覧表1

掲載番号	図版番号	種別	器種	出土地点				法量(cm)	色調	特徴等	残存率	
				区	GRID	遺構	口径	底径	総高			
1	11	山茶碗	碗	1	I2	SP163	(14.9)	(5.7)	5.2	7.5YR5/1 桶灰	重ね焼痕 底部系切妻ナデ 内面に焼灰	1/4
2	14	山茶碗	碗	2	I2	SP541		6.8		2.5Y5/2 塗灰黄	重ね焼痕 内面に擦付帯 高台内墨書き	底部元存
3		山茶碗	碗	2	I3	SP532		(7.5)		N8/ 灰白	焼成やや不良	底部1/4
4		山茶碗	碗	2	I3	SP544		(7.4)		SY8/1 灰白	焼成やや不良	底部1/5
5		山茶碗	碗	1	D2	SP101	(7.3)			N7/ 灰白	底部余切	底部2/3
6	12	山茶碗	小碗	2	J3	SP502	(8.4)	(4.0)	2.7	10Y7/1 灰白		1/3
7		山茶碗	小碗	2	J3	SP502		(4.5)		N6/ 灰	重ね焼痕 内面に焼灰	底部1/3
8		山茶碗	小碗	2	J3	SP573	(9.8)			N6/ 灰		口縁部1/8
9		山茶碗	小碗	2	J3	SP575	(9.8)			N7/ 灰白	内面に焼灰	口縫部1/4
10		土師質土器	皿	2	J3	SP575	(8.9)	(4.7)	2.4	2.5Y7/2 斑灰	底部余切 かわらけ	1/5
13		山茶碗	碗	2	H3	SE501	(16.2)			2.5GY8/1 19~7 灰	内面に焼灰	口縫部1/9
14		山茶碗	碗	2	H3	SE501		7.1		2.5Y7/2 斑灰	重ね焼痕 底部余切	底部完存
15		山茶碗	碗	2	H3	SE501		(6.0)		N7/ 灰白	底部余切妻ナデ	底部1/3
16	13	山茶碗	小皿	2	H3	SE501	8.0	3.8	2.4	2.5Y6/2 斑灰	底部余切 ロクロ右側斜	4/5
17	13	山茶碗	小皿	2	H3	SE501	8.5	4.2	2.0	2.5Y6/1 斑灰	底部余切 ロクロ右側斜、口縁の一部に僅	完存
18		山茶碗	小皿	2	H3	SE501	(9.0)			N7/ 灰白		口縫部1/3
19	14	山茶碗	小皿	2	H3	SE501		(4.0)		7.5YR5/1 桶灰	底部余切 内面に焼灰 底部墨書き	底部2/3
20		山茶碗	小碗	2	H3	SE501		3.7		10YR6/2 斑黄褐		底部完存
21	16	青磁	碗	2	H3	SE501				5Y7/1 灰白		口縫部破片
22	16	陶器	甕	2	H3	SE501				2.5Y3/2 黑褐	外表面自然釉	脚部破片
41	15	山茶碗	碗	2	H3	SE506		(7.8)		7.5Y7/1 灰白	平底 底部余切 体部墨書き	底部1/4
42	12	山茶碗	小碗	2	H3	SE506	9.2	5.0	2.9	5Y7/1 灰白	口縫及内面に施釉 斜台底部を削る	光存
56	16	陶器	甕	1	K2	SD204				N5/ 灰	保形 外表面叩き目	脚部破片
57	11	山茶碗	碗	1	K1	SD204	14.8	7.3	4.7	5HG6/1 青灰	底部余切 ソノコ底 共台内墨書き	ほぼ完存
58	11	山茶碗	碗	1	K2	SD204	14.7	6.5	4.0	5Y5/1 灰	底部余切 ソノコ底 内側と臺面内墨書き	完存
59		山茶碗	碗	1	K2	SD204	(15.8)			N5/ 灰	内面に焼灰	口縫部1/7
60	15	山茶碗	碗	1	K2	SD204		(6.7)		N8/ 灰白	重ね焼痕 高台内沈線 内面に焼灰	底部2/3
61		山茶碗	碗	1	K2	SD204		(6.8)		SB6/1 青灰	重ね焼痕 底部余切	底部1/2
62		山茶碗	碗	1	K2	SD204		6.2		7.5Y6/1 灰	重ね焼痕 内面に焼	底部完存
63		山茶碗	碗	1	K2	SD204		(7.5)		5Y7/1 灰白	底部余切 ソノコ底 共台内墨書き	底部1/2
64		山茶碗	碗	1	K2	SD204		(6.7)		N8/ 灰白		底部1/4
65		山茶碗	碗	1	K2	SD204		(7.0)		N7/ 灰白	重ね焼痕 底部余切後輕いナデ ソノコ底	底部1/4
66	15	山茶碗	碗	1	K2	SD204		(7.0)		2.5Y6/1 斑灰	底部余切 ソノコ底 体部墨書き 内面焼灰	底部1/4
67		山茶碗	小碗	1	K2	SD204	(10.5)	(5.2)	3.3	N7/ 灰白	内面に焼灰?	底部1/6
68		山茶碗	小碗	1	K2	SD204	(9.8)	(5.2)	3.3	N7/ 灰白	底部余切 ソノコ底 融合关系?	1/4
69		山茶碗	小碗	1	K2	SD204	(3.1)			N5/ 灰	内面及口縁部に焼灰	口縫部1/6
70		山茶碗	小碗	1	K2	SD204		(5.3)		N7/ 灰白	底部余切 ソノコ底	底部3/5
71		山茶碗	小碗	1	K2	SD204		(4.8)		N8/ 灰白		底部1/2
72		山茶碗	小皿	1	K2	SD204		(4.2)		N7/ 灰白	底部余切	底部完存
73		山茶碗	碗	1	K1	包含層	(4.8)			5YR6/3 にぶい橙		口縫部1/5
74		山茶碗	碗	1	L2	包含層	(4.2)			N7/ 灰白	内面に焼灰	口縫部1/6
75		山茶碗	碗	1	K2	包含層	(4.7)			2.5GY5/1 斑灰		口縫部1/9
76		山茶碗	碗	2	J3	包含層	(11.6)			7.5Y7/1 灰白		口縫部1/9
77		山茶碗	碗	1	J1	包含層	(14.6)			N6/ 灰	内面に焼灰	口縫部1/8
78		山茶碗	碗	2		表様	(3.8)			2.5Y6/1 黄灰		口縫部1/7
79		灰釉陶器	碗	2	F3	包含層	(8.4)			7.5Y8/1 灰白	高い高台	底部1/4
80		灰釉陶器	碗	1		表様	(7.4)			N7/ 灰白	内面に焼灰 高い高台	底部1/4
81		山茶碗	碗	1	L2	包含層	(8.0)			10YR8/6 黄橙	重ね焼痕 西部余切後ナデ	底部1/2
82	14	山茶碗	碗	1		表様	(8.7)			N8/ 灰白	重ね焼痕 ソノコ底 高台内墨書き 内面灰	底部1/2
83	15	山茶碗	碗	1		四壁	(7.4)			5Y7/1 灰白	高台内2条の沈線	底部1/3
84	15	山茶碗	碗	1		東壁	(6.7)			2.5SY8/1 灰白	ソノコ底 高台内2条の沈線	底部1/2
85		山茶碗	碗	1	I1	包含層	(8.2)			N7/ 灰白	重ね焼痕 底部余切後ナデ ソノコ底	底部1/2
86		山茶碗	碗	1	M2	残瓦	6.8			5Y7/1 灰白	底部余切後ナデ ロクロ右側斜	底部完存
87		山茶碗	碗	2		排水溝	(7.6)			N7/ 灰白	重ね焼痕 底部余切後ナデ	底部1/4
88		山茶碗	碗	1	L2	包含層	(6.7)			N6/ 灰	重ね焼痕 底部余切後ナデ 内面に焼灰	底部1/2
89		山茶碗	碗	1		西壁	(7.2)			N7/ 灰白	重ね焼痕 底部余切後ナデ	底部1/3
90		山茶碗	碗	1		残瓦	(6.8)			N7/ 灰白	重ね焼痕 底部余切 ソノコ底 内面焼灰	底部1/4

第7表 中世土器一覧表2

掲載番号	図版番号	種別	器種	出土地点					色調	特徴等	残存率	
				区	GRID	通横	口径	底径				
91		山茶碗	碗	1	K2	束縫	(6.8)		N7/ 灰白	重ね地痕	底部1/6	
92		山茶碗	碗	1	K2	包含層	(7.4)		N5/ 灰	重ね地痕 色部糸切後 内面に隙灰	底部1/2	
93		山茶碗	碗	2	H2	包含層	6.7		2.5Y7/1 灰白	底部糸切後ナデ 底部中心に難な水切	底部完全	
94		山茶碗	碗	1	H2	包含層	(6.5)		N7/ 灰白	スノコ底	底部1/4	
95		山茶碗	碗	2	I2	包含層	(9.0)		N6/ 灰	底部糸切後ナデ	底部1/4	
96	11	山茶碗	碗	1	J2	包含層	16.5	5.8	6.5	5YR7/4 にぶい赤褐	底部糸切 スノコ底 緩正残存4(推定5)	ほぼ完全
97		山茶碗	碗	1		複瓦	7.8		N6/ 灰	重ね地痕	底部糸切後ナデ ノタメ明瞭	
98		山茶碗	碗	2	J3	包含層	(7.8)		N6/ 灰	重ね地痕 色部糸切後ナデ	底部1/2	
99		山茶碗	碗	1	L2		8.1		5B6/1 青灰	重ね地痕 色部糸切 ソノコ底	底部完全	
100		山茶碗	碗	2	K2	包含層	(7.0)		N6/ 灰	重ね地痕 色部糸切後ナデ	底部1/7	
101		山茶碗	碗	1		包含層	(7.7)		5B6/1 青灰	重ね地痕 色部糸切	底部1/6	
102		山茶碗	碗	1	L2	包含層	(8.1)		N7/ 灰白	重ね地痕 色部糸切 ソノコ底	底部1/2	
103	15	山茶碗	碗	1	K1	包含層	(7.1)		5B6/1 青灰	重ね地痕	底部1/2	
104		山茶碗	碗	1	L2	包含層	(7.2)		2.5GY7/1 明け-7 灰	底部糸切	底部1/4	
105		山茶碗	碗	2	J3	包含層	(6.6)		7.5Y7/1 灰白	底部糸切後ナデ	底部1/3	
106		山茶碗	碗	1	J2	包含層	(7.1)		N5/ 灰	重ね地痕 高台内1条の沈窓 ノタメ明瞭	底部1/5	
107		山茶碗	碗	1	L1	包含層	(7.2)		5Y7/1 灰白	底部糸切後ナデ	底部1/4	
108		山茶碗	碗	1	L2	包含層	(6.7)		N7/ 灰白	重ね地痕 底部糸切	底部1/4	
109		山茶碗	碗	2		包含層	6.6		N7/ 灰白	底部糸切 ロクロ右回転	底部完全	
110		山茶碗	碗	1	L2	包含層	(6.5)		7.5YR6/3 にぶい褐	底部糸切後ナデ	底部1/4	
111		山茶碗	碗	2		包含層	(6.7)		N7/ 灰白	重ね地痕 底部糸切後ナデ	底部1/4	
112		山茶碗	碗	1		表採	(8.0)		N6/ 灰	重ね地痕 底部糸切後ナデ	底部1/4	
113		山茶碗	碗	1	L2	包含層	(6.8)		10YR8/2 灰白	重ね地痕 地成や不良	底部1/3	
114		山茶碗	碗	1		西壁	(7.8)		N6/ 灰	重ね地痕 底部糸切	底部1/4	
115		山茶碗	碗	1	L2	包含層	(7.4)		N6/ 灰	底部糸切 ソノコ底明瞭 内面に隙灰	底部1/2	
116		山茶碗	碗	1	J1	包含層	(6.9)		5PB6/1 青灰	重ね地痕 底部糸切後ナデ 内面に隙灰	底部1/4	
117		山茶碗	碗	2		排水溝	(7.0)		N5/ 灰	底部糸切 調査	底部1/5	
118		山茶碗	碗	1	L2	包含層	(7.3)		7.5Y8/1 灰白	地成不良(厚底堅窓)	底部1/4	
119		山茶碗	碗	1	L2	包含層	(6.4)		5B5/1 青灰	重ね地痕 底部糸切	底部1/3	
120		山茶碗	碗	1	L1	包含層	(6.7)		5GY7/1 明け-7 灰	重ね地痕	底部1/4	
121		山茶碗	碗	2		排水溝	(6.3)		N6/ 灰	重ね地痕 底部糸切後ナデ	底部1/4	
122		山茶碗	碗	2		排水溝	(6.5)		10B6G/1 青灰	重ね地痕	底部1/4	
123		山茶碗	碗	1	J2	包含層	(7.0)		N7/ 灰白	底部糸切 (底の調整)	底部1/2	
124		山茶碗	碗	2	K2	包含層	(6.1)		N6/ 灰	重ね地痕 底部糸切	底部1/6	
125		山茶碗	碗	2		排水溝	(6.4)		5Y8/1 灰	重ね地痕	底部1/4	
126		山茶碗	碗	1	L2	包含層	(6.8)		N5/ 灰	重ね地痕 底部糸切 ソノコ底	底部1/3	
127		山茶碗	碗	1	L1	包含層	(6.5)		N5/ 灰	重ね地痕 底部糸切 ソノコ底	底部1/2	
128		山茶碗	碗	1	L2	包含層	(6.3)		5B6/1 青灰	底部糸切 ソノコ底	底部1/2	
129		山茶碗	碗	1	L2	包含層	(6.3)		2.5Y7/2 灰黄	底部糸切 ノタメ明瞭 地成不良	底部1/2	
130		山茶碗	碗	1		排水溝	(6.0)		N7/ 灰白	重ね地痕 底部糸切後ナデ ソノコ底堅窓	底部1/3	
131		山茶碗	碗	2	F3	包含層	(6.8)		5Y7/1 灰白	底部糸切後ナデ	底部1/4	
132		山茶碗	碗	1	L2	包含層	(6.4)		2.5GY7/1 明け-7 灰	底部糸切後ナデ 硬質底	底部1/6	
133		山茶碗	碗	2	J3	包含層	(6.2)		N6/ 灰	重ね地痕	底部1/2	
134		山茶碗	碗	1	L1	包含層	(5.9)		N6/ 灰	重ね地痕 程度底	底部1/2	
135		山茶碗	碗	1	L2	包含層	6.3		5Y8/1 灰白	重ね地痕 底部糸切後ナデ 内面に隙灰	底部2/3	
136		山茶碗	碗	1		表採	(6.1)		10Y7/1 灰白	重ね地痕 底部糸切後ナデ ロクロ右回転	底部1/3	
137		山茶碗	碗	1	J1	包含層	(5.8)		2.5GY7/1 明け-7 灰	底部糸切	底部1/3	
138		山茶碗	碗	2	K2	包含層	(6.6)		2.5GY8/1 灰白	弱版底	底部1/6	
139		山茶碗	碗	1		表採	(5.9)		2.5GY7/1 明け-7 灰	重ね地痕	底部1/3	
140		山茶碗	碗	1		排水溝	(6.8)		10YR6/3 にぶい黄	重ね地痕 底部糸切後ナデ	底部1/2	
141		山茶碗	碗	1	K2	包含層	(7.2)		N6/ 灰	重ね地痕 底部糸切 角き歪み	底部1/3	
142		山茶碗	碗	1		排水溝	6.7		10YR7/4 にぶい黄	重ね地痕 底部糸切	底部完全	
143		山茶碗	碗	1		表採	(7.2)		7.5Y7/1 灰白	重ね地痕 底部糸切後ナデ	底部1/2	
144		山茶碗	碗	1	K2	包含層	(6.8)		N6/ 灰	ノタメ明瞭	底部1/3	
145		山茶碗	碗	1	J2	包含層	(6.1)		N8/ 灰白	重ね地痕 底部糸切 高台内に粘土小塊	底部1/2	
146		山茶碗	碗	1	L2	包含層	6.5		5B6/1 青灰	重ね地痕	底部1/5	
147		山茶碗	碗	1	L2	包含層	(6.0)		N7/ 灰白	重ね地痕 底部糸切後ナデ 内面に隙灰	底部1/3	

第7表 中世土器一覧表3

掲載番号	図版番号	種別	器種	出土地点			法量(cm) 区 GRID	色調	特徴等	残存率
				底柄	口径	底径				
148		山茶碗	碗	1 L2	包含層	(6.6)	7.5Y7/1 白灰	重ね焼成 底部尖切 内面に鋸灰	底部1/4	
149		山茶碗	碗	1 L2	包含層	(6.4)	5B7/1 明青灰	重ね焼成 底部尖切 見込みに強い黒斑底	底部1/3	
150		山茶碗	碗	2 K3	包含層	(7.1)	N8/ 白灰	底部尖切 湿潤系	底部1/2	
151		山茶碗	碗	1	東壁	(7.0)	N5/ 灰	底部尖切 内面に鋸灰 一部に糞切歴有	底部1/3	
152		山茶碗	碗	1 L2	包含層	6.2	5B5/1 青灰	重ね焼成 底部尖切後ナデ	底部完存	
153		山茶碗	碗	1 M2	包含層	6.6	N7/ 白灰	重ね焼成 底部尖切 スノコ底 内面溝状	底部完存	
154		山茶碗	碗	1	表様	6.8	10YR7/1 白灰	底部尖切 ロクロ右凹部	底部完存	
155 11		山茶碗	碗	1	折水溝 (15.1)	(7.4)	5.5 10YR8/4 浅黄褐	底部尖切 ロクロ右凹部 烧成痕	1/5	
156 11		山茶碗	碗	1 L2	包含層	(14.9) (6.5)	4.6 5YR6/2 浅灰	底部尖切 スノコ底 ロクロ右凹部	1/3	
157		山茶碗	碗	2 G3	包含層	(6.4)	N7/ 白灰	底部尖切 スノコ底	底部1/4	
158		山茶碗	碗	1 J2	包含層	(7.0)	7.5Y7/1 白灰	スノコ底	底部1/4	
159		山茶碗	碗	1	表様	(5.8)	N5/ 灰	重ね焼成 底部尖切後ナデ (縦な側面)	底部1/2	
160		山茶碗	碗	2	表様	6.7	N6/ 灰	重ね焼成 底部尖切	底部2/3	
161		山茶碗	碗	2	表様	5.9	N7/ 白灰	底部尖切 内面に鋸灰	底部1/2	
162		山茶碗	碗	1 J2	包含層	(5.8)	2.5GY8/1 白灰		底部1/3	
163		山茶碗	碗	1	表様	(6.0)	N6/ 灰	重ね焼成	底部1/3	
164		山茶碗	碗	1 H2	包含層	(8.2)	5B6/1 青灰	重ね焼成 底部尖切後ナデ	底部1/4	
165		山茶碗	碗	1 G2	包含層	(7.1)	N7/ 白灰	底部尖切後ナデ	底部1/4	
166		山茶碗	碗	1 L2	包含層	(6.9)	7.5YR8/6 浅黄褐	重ね焼成 駆成不良	底部2/5	
167		山茶碗	碗	1 L1	包含層	(6.5)	5YR8/2 浅灰	弱焼成 タメ明瞭	底部2/5	
168 14		山茶碗	碗	2 I2	包含層	6.4	2.5GY8/2 白灰	重ね焼成 稼働度 タメ明瞭 高台内墨青	底部3/5	
169		山茶碗	碗	1	西壁	(7.1)	N7/ 白灰	底部尖切 スノコ底	底部1/4	
170		山茶碗	碗	1	排水溝	(7.0)	N7/ 白灰	重ね焼成 底部尖切後ナデ	底部1/2	
171 15		山茶碗	碗	1 J2	包含層	(5.7)	2.5GY7/1 明灰-7 灰	重ね焼成 高台内 条の沈継	底部1/2	
172		山茶碗	碗	2 J3	包含層	(6.1)	N7/ 白灰	重ね焼成 底部尖切後ナデ タメ明瞭	底部1/3	
173		山茶碗	碗	1 J1	包含層	(6.2)	N6/ 灰	底部尖切	底部1/3	
174		山茶碗	碗	1	表様	(6.0)	N6/ 灰	底部尖切 新規底 見込み指揮底	底部1/2	
175		山茶碗	碗	2 E3	包含層	(5.6)	5B5/1 青灰	底部尖切 スノコ底 内面に鋸灰	底部1/5	
176 15		山茶碗	碗	1	表様	(5.8)	N7/ 白灰	重ね焼成 弱焼成 体則斜利	底部1/8	
177		山茶碗	碗	2	包含層	(6.8)	7.5YR6/4 にぶい程	底柄尖切	底部1/4	
178		山茶碗	碗	1	西壁	(6.1)	N7/ 白灰	重ね焼成 底部尖切	底部1/3	
179		山茶碗	碗	1 J1	包含層	(5.4)	N7/ 白灰	重ね焼成 底部尖切後ナデ	底部1/3	
180		山茶碗	碗	1	排水溝	(6.0)	N8/ 白灰	体部に變形持つ	底部1/4	
181		山茶碗	碗	2	排水溝	(4.9)	10Y7/1 白灰	底部尖切後ナデ	底部1/4	
182		山茶碗	碗	2 I2	包含層	(6.8)	7.5Y6/1 白灰	内面に鋸灰	底部1/4	
183		山茶碗	碗	1	排水溝	(5.7)	N6/ 灰	底部尖切後ナデ スノコ底 内面に鋸灰	底部1/3	
184		山茶碗	碗	2 J3	包含層	(5.8)	7.5YR7/4 にぶい程	燒成不良 (摩滅跡)	底部1/3	
185		山茶碗	碗	1	西壁	(6.2)	5YR6/3 にぶい程	底部尖切	底部1/4	
186		山茶碗	碗	1	表様	(5.8)	N6/ 灰	スノコ底	底部1/4	
187		山茶碗	碗	1 K2	包含層	(6.6)	5Y6/1 白灰		底部1/4	
188		山茶碗	碗	2 F2	包含層	(6.8)	N6/ 灰	底部尖切	底部1/5	
189		山茶碗	碗	2 J3	包含層	(7.0)	7.5Y8/1 白灰	燒成不良 (摩滅跡)	底部1/3	
190		山茶碗	碗	2 E3	包含層	(6.4)	2.5GY7/1 明灰-7 灰	底部尖切	底部1/4	
191		山茶碗	碗	1 H1	包含層	(6.8)	5Y6/1 白灰		底部1/4	
192		山茶碗	小碗	1	西壁 (9.3)	(5.0)	3.0 N6/ 白灰	輪輪残存!	1/4	
193		山茶碗	小碗	1 H2	包含層	(9.6)	N7/ 白灰	外外腹に鋸灰		
194		山茶碗	小碗	2	排水溝 (9.8)		5YR5/1 白灰	重ね焼成 口縁茎玉縁柱	口縁部1/6	
195		山茶碗	小碗	1 M2	包含層	(9.6) (5.5)	3.4 5Y8/1 白灰	重ね焼成 底部尖切後ナデ	1/6	
196		山茶碗	小碗	1 J2	包含層	(10.0) (5.5)	3.2 5Y6/1 白灰	重ね焼成	1/3	
197 12		山茶碗	小碗	1 L2	包含層	(9.5) (4.8)	3.1 5Y7/1 白灰	重ね焼成 スノコ底 内面降灰	1/3	
198		山茶碗	小碗	1 L2	包含層	(9.0) (4.8)	2.9 5B6/1 青灰	底部尖切後ナデ	1/5	
199 12		山茶碗	小碗	1	西壁	(9.4) 6.1	2.9 2.5Y6/1 黄灰	灯明底に転用	ほぼ完存	
200 12		山茶碗	小碗	2 H2	包含層	(9.5) (5.0)	2.5 N7/ 白灰	重ね焼成 内外腹に鋸灰	1/3	
201		山茶碗	小碗	1 K2	包含層	(4.8)	5PB7/1 明青灰	底部尖切後ナデ 内面に宝室崩土融着	底部1/3	
202		山茶碗	小碗	1 L1	包含層	(9.5) (4.3)	2.8 N7/ 白灰	重ね焼成 スノコ底 内面降灰	1/2	
203		山茶碗	小碗	1 L2	包含層	(10.1) (3.9)	3.1 5B5/1 青灰	底部尖切後ナデ 高台の接合が難	1/4	
204 12		山茶碗	小碗	1 L2	包含層	9.3 4.2	3.1 5B6/1 青灰	底部尖切	3/5	

第7表 中世土器一覧表4

揭露番号	同版番号	種別	器種	出土地点			法規(cm)		色調	特徴等	残存率	
				区	GRID	遺構	口径	底径				
205		山茶碗	小碗	1	L1	包含層	(9.0)	(3.8)	2.7	N8/灰白	底部糸切 体部内外面に自然擦 腹壁薄い	1/3
206		山茶碗	小碗	2	J3	排水溝	(8.7)			N6/灰	底部糸切	1/3(新部)1/6
207		山茶碗	小碗	1	L2	包含層	(8.9)	(4.8)	2.9	5B7/1 明青灰	スノコ痕 見込みに強いナデ	1/3
208		山茶碗	小碗	1	J1	包含層	(8.7)	(5.2)	3.0	N7/灰白	底部糸切	1/5
209	12	山茶碗	小碗	1		東壁	(8.5)	(4.7)	2.9	10Y7/1 灰白		1/4
210	12	山茶碗	小碗	2		排水溝	(8.4)	(5.0)	2.6	N8/灰白	スノコ痕	1/4
211		山茶碗	小碗	1	K1	包含層	(8.7)	(3.8)	2.9	2.5Y7/1 灰白	内面に薄灰 ロクロ右凹板	1/5
212		山茶碗	小碗	1		表様	(8.2)	(4.3)	2.7	7.5Y7/2 灰白+ア	内面に薄灰	1/5
213		山茶碗	小碗	1		排水溝	(8.6)	(4.8)	2.7	N6/灰	底部糸切 内面に薄灰	1/3
214		山茶碗	小碗	1	K1	包含層	(8.4)	(4.7)	2.8	5B6/1 青灰	底部糸切	1/3
215	12	山茶碗	小碗	1	K1	包含層	(8.2)	(4.6)	2.8	5B7/1 明青灰	底部糸切後縁ナデ 見込みに指痕	2/5
216	12	山茶碗	小碗	1		排水溝	(8.2)	(4.0)	2.6	7.5YR6/1 灰		1/3
217		山茶碗	小碗	1	L2	包含層	(7.8)	(4.2)	2.8	5B6/1 青灰		1/2
218	14	山茶碗	小碗	1	K1	包含層			3.7	N7/灰白	高台内側壁	底部完存
219		山茶碗	小皿	2	J2	包含層	(8.1)	(3.8)	2.4	N8/灰白	底部糸切 内面に薄灰	1/3
220	13	山茶碗	小皿	1		表様	7.9	4.0	2.8	5B6/1 青灰	底部糸切 内面に薄灰 右側板	ほぼ完存
221		山茶碗	小皿	1		表様	(8.2)	(4.0)	2.2	7.5Y6/2 灰白+ア	底部糸切	1/6
222	13	山茶碗	小皿	1		排水溝	8.2	4.3	2.1	N6/灰	底部糸切 ロクロ右凹板	1/2
223		山茶碗	小皿	2	F3	包含層	(8.7)	(4.5)	2.2	5B6/1 青灰	底部糸切 内面に薄灰	1/5
224	13	山茶碗	小皿	1	L2	包含層	(8.3)	(3.7)	2.2	5B5/1 青灰	底部糸切	1/5
225		山茶碗	小皿	1		排水溝	(7.9)	(4.0)	2.3	2.5Y6/1 黄灰	底部糸切	底部1/2
226		山茶碗	小皿	2		包含層	(8.7)			7.5Y7/1 灰白		口縫部1/6
227	13	山茶碗	小皿	1		排水溝	7.7	4.0	2.0	10BG5/1 青灰	底部糸切後縁ナデ ロクロ右凹板	3/5
228	13	山茶碗	小皿	1		東壁	7.6	4.8	2.3	5Y6/2 灰白+ア	底部糸切 ロクロ右凹板	ほぼ完存
229		山茶碗	小皿	1	L2	包含層	(7.3)	(4.2)	2.1	N7/灰	底部糸切 内面に薄灰	1/4
230		山茶碗	小皿	1		表様	7.1	4.0	2.0	N6/灰	底部糸切 ロクロ右凹板	ほぼ完存
231		山茶碗	小皿	1	K2	包含層	(7.0)	(4.2)	2.2	5B5/1 青灰	底部糸切(一部指痕有)	1/6
232	13	山茶碗	小皿	2	I2	包含層	7.7	4.0	2.0	7.5Y6/2 灰白+ア	底部糸切 口縫部に薄灰	2/3
233		山茶碗	小皿	2	F3	包含層	(7.6)	(4.4)	1.8	N6/灰	底部糸切 内面に薄灰	1/8
234		山茶碗	小皿	1	J2	包含層	(9.2)			N6/灰	内面及口縫部に薄灰	口縫部1/4
235		山茶碗	小皿	1	K2	包含層	(5.7)	(5.1)	2.1	N6/灰	底部糸切 口縫部に薄灰	1/4
236	13	山茶碗	小皿	1	I2	包含層	(8.6)	(4.6)	1.9	N4/灰	底部糸切 ロクロ右凹板	1/4
237		山茶碗	小皿	1	L2	包含層	(8.2)	(3.5)	1.8	N6/灰	底部糸切 内面及口縫部に薄灰	1/4
238		山茶碗	小皿	1		西壁	(8.1)	(4.0)	1.7	N5/灰	底部糸切 内面に薄灰	1/3
239	13	山茶碗	小皿	1	K2	包含層	(8.5)	(4.7)	2.0	N6/灰	底部糸切 见込みに指痕	1/3
240	14	山茶碗	小皿	1	H2	包含層	(8.6)	(4.8)	1.7	N5/灰	底部糸切 内面及口縫部に薄灰	1/2
241		山茶碗	小皿	1		表様	(7.8)	(3.7)	2.0	5B6/1 青灰	底部糸切	1/2
242	14	山茶碗	小皿	1		西壁	7.6	4.0	1.8	N7/灰白	底部糸切 内面に薄灰	3/5
243		山茶碗	小皿	1	J2	包含層	(8.2)	(4.0)	1.8	2.5GY7/1 明ホーリー	底部糸切	1/4
244	16	白磁	碗	1	G2	包含層	(15.4)			7.5Y7/1	玉縫状口縫	口縫部1/8
245	16	白磁	碗	1	J1	包含層				7.5Y8/2 灰白	玉縫状口縫	口縫破片
246	16	白磁	碗	1	I2	包含層				2.5GY8/1 灰白	玉縫状口縫	口縫破片
247	16	白磁	碗	1		排水溝			6.6	N7/灰白	見込み蛇の目縫割ぎ	底部完存
248	16	白磁	碗	1		表様		(5.9)		2.5GY7/1 明ホーリー		底部1/2
249	16	青磁	皿	1		表様				2.5GY8/1 灰白	青底	口縫破片
250	16	青磁	皿	1	J1	包含層				5Y7/2 灰白	草花文	口縫破片
251	16	青磁	皿	1		表様	(12.0)			5BG7/1 明青灰	草花文	口縫部1/8
252		土師質土器	皿	1	M2	撲丸	(6.9)			10YR8/2 灰白	かわらけ	底部1/2
253		土師質土器	皿	1		排水溝			5.7	7.5Y8/1 灰白	白かわらけ	底部完存
254	17	土師質土器	鍋	1	L2	包含層	(21.3)			7.5YR4/3 鍋	伊勢輪	脚上部1/6

第8表 中世石製品・土製品・金属製品一覧表

掲載番号	図版番号	種類	出土地点			法量(cm.g)			備考
			区	GRID	遺構	長さ	幅	厚さ	
23	17	石製品	H3	SE501	15.2	11.7			1106
27	17	金属製品	H3	SE501	4.3	0.66			0.72
255	17	土製品	K2	包含層	4.2	1.8			8.45
256	17	土製品	J2	包含層	3.4	1.1			4.60
257	17	金属製品	J1	表層	1.1				9.14 銅玉か

第9表 中世木製品一覧表

掲載番号	図版番号	種類	出土地点			法量(cm)			樹種	木取り	登録番号	備考
			区	GRID	遺構	長さ	幅	厚さ				
11	17	柱根	H3	SP548	23.8	11.3	9.1		イヌマキ	芯持ち	W15	
12	17	柱根	H3	SP537	18.5	14.2	12.0		イヌマキ	芯持ち	W16	
24		檜柵	H3	SE501	16.7	8.0	5.5		ケヤキ		W2+W7	
25	17	曲物	H3	SE501	15.5	15.4	6.3		スギ		W22	
26	17	著木製品	H3	SE501	8.4	0.4	0.4		ヒノキ		W6	
28	18	井戸材	H3	SE501	79.5	8.9	8.6		ツブラジイ	芯持ち	W90	
29	18	井戸材	H3	SE501	75.8	8.7	8.8		ツブラジイ	芯持ち	W47	
30	18	井戸材	H3	SE501	87.4	9.3	8.7		ツブラジイ	芯持ち	W51	
31	18	井戸材	H3	SE501	88.6	8.7	8.9		ツブラジイ	芯持ち	W80	
32	18	井戸材	H3	SE501	85.7	13.0	2.2		モミ	板目	W84	
33	18	井戸材	H3	SE501	86.6	17.4	1.5		モミ	板目	W86	
34	18	井戸材	H3	SE501	94.5	13.7	2.7		モミ	板目	W85	
35	18	井戸材	H3	SE501	77.8	14.8	1.9		モミ	板目	W88	
36	18	井戸材	H3	SE501	88.0	18.8	1.8		モミ	板目	W50	
37	18	井戸材	H3	SE501	82.2	13.1	2.2		モミ	板目	W38	
38	18	井戸材	H3	SE501	91.5	17.0	2.3		モミ	板目	W33	
39	18	井戸材	H3	SE501	93.1	14.0	1.5		モミ	板目	W55	
40	18	井戸材	H3	SE501	83.2	12.9	2.8		モミ	板目	W76	
43	17	塔婆	H3	SE506	86.7	3.8	0.7		モミ	板目	W25	
44	18	井戸材	H3	SE506	67.1	9.1	4.9		スギ	板目	W3	
45	18	井戸材	H3	SE506	64.7	8.7	5.6		スギ	板目	W29	
46	18	井戸材	H3	SE506	68.0	7.0	3.3		スギ	板目	W28	
47	18	井戸材	H3	SE506	64.0	4.0	4.5		スギ	板目	W70	
48	18	井戸材	H3	SE506	57.0	4.9	2.2		スギ	板目	W71	
49	18	井戸材	H3	SE506	52.2	4.8	2.5		スギ	板目	W72	
50	18	井戸材	H3	SE506	46.4	4.8	2.7		スギ	板目	W69	
51	18	井戸材	H3	SE506	98.1	6.6	5.7		スギ	板目	W44	
52	18	井戸材	H3	SE506	102.6	6.9	5.2		スギ	板目	W43	
53	18	井戸材	H3	SE506	101.4	7.9	5.3		ヒノキ	板目	W42	
54	18	井戸材	H3	SE506	101.0	8.0	5.7		ヒノキ	板目	W41	
55	18	井戸材?	H3	SE506	99.5	9.9	8.2		スギ	板目	W30	
258	17	横櫛	H3	包含層	3.4	2.1	0.53		散孔材		W1	

# 第5章 古墳時代

## 第1節 概要

古墳時代の遺構群を検出した第2面はⅨ層上面である。直上のⅧ層は古墳時代の遺物包含層であり、多数の土師器が出土した。この第2面では堅穴住居跡1、十坑1、溝状遺構1、流路跡1と約560基の柱穴を検出した。これら遺構の覆土は大半がⅨ層とほぼ同じ黒色シルト質粘土であった。遺構の分布は調査区内で偏在しており、調査区中央より南側で多く検出した。柱穴は第1面で検出したものとは異なり、平面形が崩れた円形～楕円形を呈し、掘り方も中位に段を有するものが多い（図版20-3）。また柱根等が全く出土しなかったことから、建物の建て替えや廃絶の際に、柱は抜き取っていたものと思われる。この面では多数の柱穴を検出したにもかかわらず、残念ながら掘立柱建物跡あるいは堅穴住居跡となりうる柱穴の組列を確認できなかった。

出土した遺物は土師器、須恵器、陶片、木錐等である。土製品、石製品、金属製品等は出土しなかつた。出土遺物の大半を占めるのは土師器で、出土総量はコンテナでおよそ9箱分である。器種でみると高杯が量的に多く、中型以上の壺類や甌類の出土量は比較的少ない。土師器の大半はⅨ層から出土したが、Ⅷ層の中でも特に1区T2付近と2区E3グリッドで多く出土した。いずれも遺構群から外れた箇所だが、同様に検出遺構の少ない2区G3グリッドからはあまり遺物が出土しなかった。この遺物集中出土地点からは小型壺（所謂小型丸底甌・堆を含む）や高杯が多く出土していることから（図版20-2）、祭祀の可能性を視野に入れる必要があるものと思われる。遺物がある程度まとまって出土した遺構はSR203であり、他に23基の柱穴からも土器片の出土をみているが、図示し得るものはほとんどない。なお、須恵器は大半が上層からの出土である。

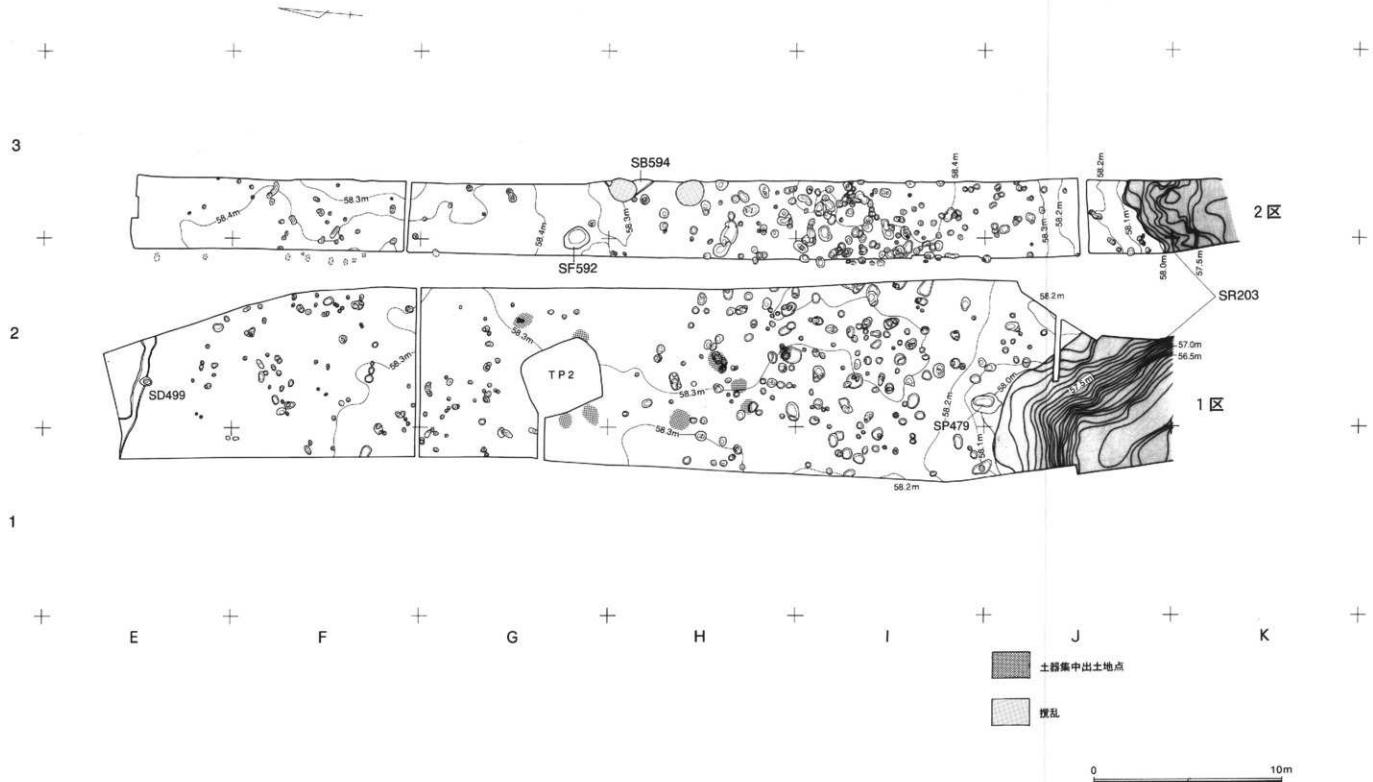
## 第2節 遺構及び出土遺物

### 1. 堅穴住居跡 SB594（第22図、図版21）

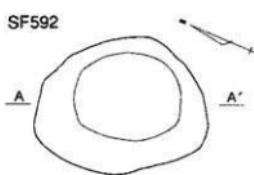
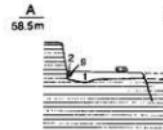
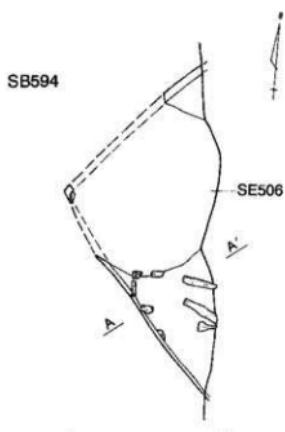
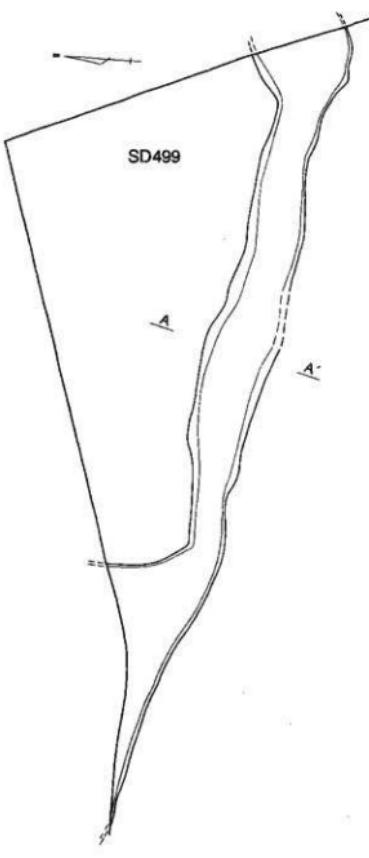
2区H3グリッドで検出した。検出面から約25cmほど掘り下げたところで貼床と思われる平坦面を、更にその約4cm下で掘り方を確認したことから、堅穴住居跡と判断した。方位はN-47°-Eを示し、平面形態は方形ないしは長方形と思われるが、四隅のうちの一角が辛うじて検出できただけであり、更にSE506によってコーナー部分が破壊されているため、全容は不明である。床土は暗オリーブ灰色シルトで、2cm以下の小礫や1cm程度の黒色粘質シルト塊を多く含む。床面に硬化面は存在していなかったが、床面上から多数の炭化材が出土した。炭化材を同定したところ大半は竹籠類で、他にはタブノキ・アカガシ亞属等であった。本遺構は所謂焼失住居であり、竹籠類は屋根に葺いた材の可能性が考えられる。遺物は土器小片が1点、覆土から出土しただけである。

### 2. 土坑 SF592（第22図、図版22）

2区G2・G3グリッドで検出した。平面形態は楕円形を呈し、1.4m×1.1mを測る。検出面からの深さは約20cm、覆土は暗オリーブ灰色シルト質粘土で粘性が高く、5mm以下の炭化物を覆土下位に多く含む。遺物は土器小片が1点出土しただけである。本遺構の性格は不明だが、柱穴群やSB594の北辺に位置していることに何らかの意味があるのではないだろうか。

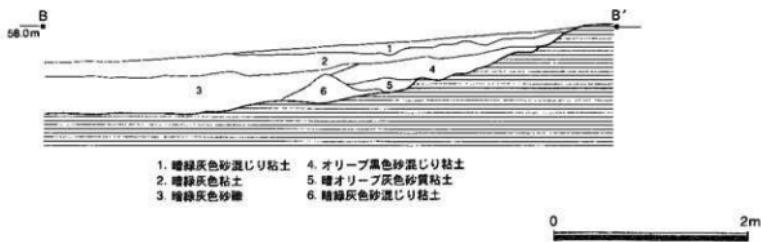
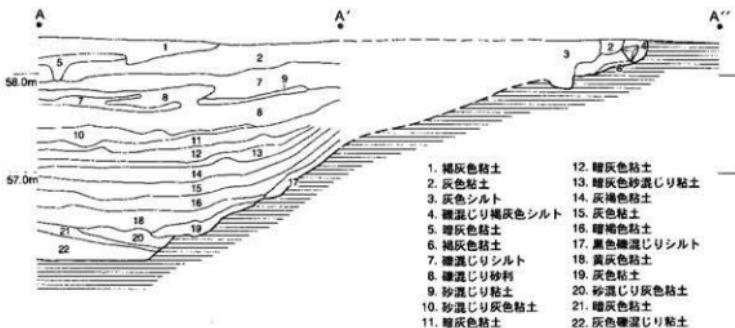
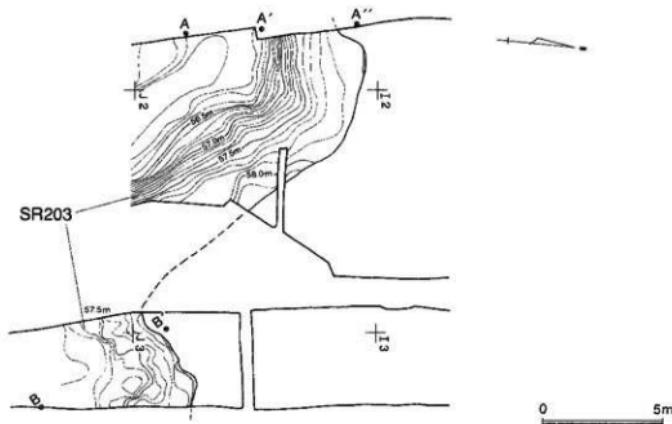


第21図 第2面全体図

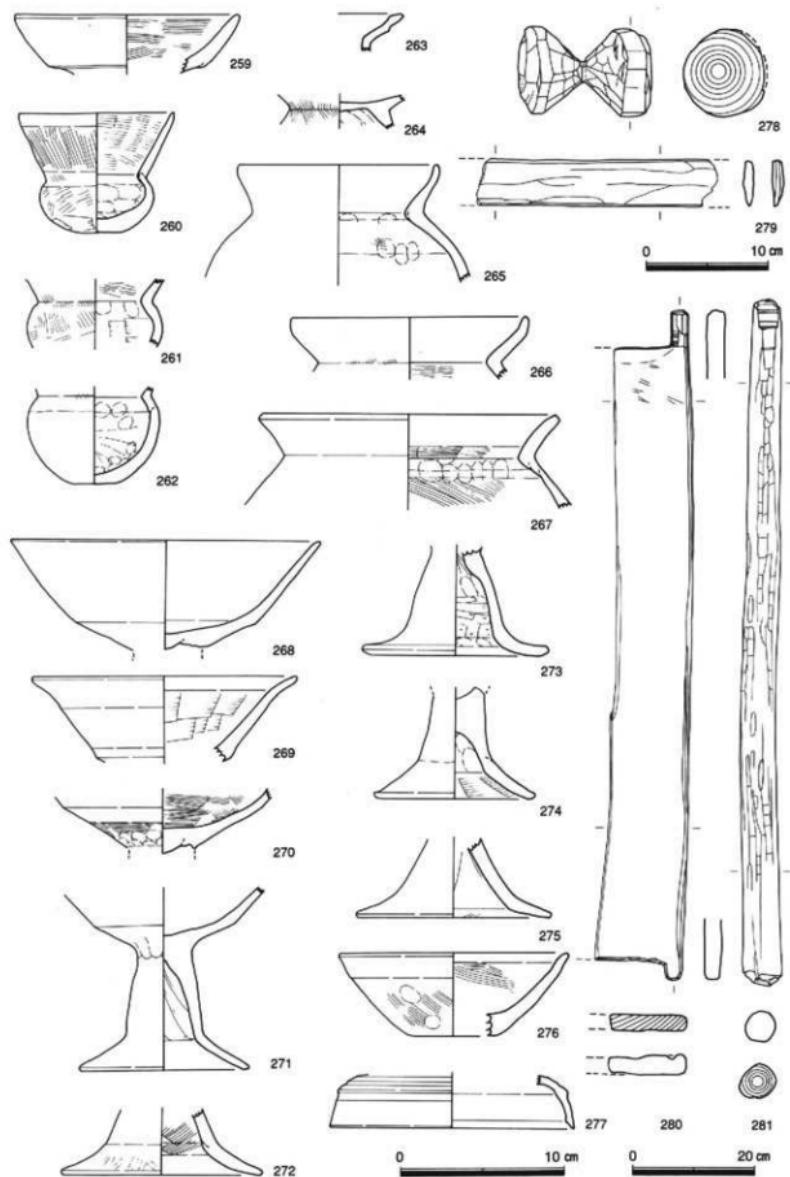


0 2m

第22図 SB594・SF592・SD499



第23図 S R 2 0 3



第24図 SR 203出土遺物

### 3. 溝状遺構 SD 499 (第22図、図版22)

1区E 1～E 2グリッドで検出した。長さ約6.8m、幅約0.5m、検出面からの深さ約15cmを測る。本遺構の東端と西端は調査区外へと続いている。溝の方位はN-81°-Wで、SB594の軸と比較すると、その方向性は大きく異なる。覆土は灰色砂混じりシルトを主体とする。2区では本遺構の統きが確認できなかったため、方向を北に変えている可能性がある。遺物は土器小片3点が出土した。そのうち1点は壺底部で、内面に煤が付着している。

### 4. 流路跡 SR 203 (第23・24図、図版23)

1区南側及び2区南側のJ 1～J 3グリッド以南で検出した。深い流路であり、1区で確認された検出面から最深部までの深さは約2.2mである。本遺構は概ね東西方向に蛇行していると思われるが、調査範囲が狭いため南側法面が確認できず、川幅等は不明である。覆土は上位に砂利層が入るもの、主体はシルト・有機質土・粘土等であり、緩やかな流れの河川であったと考えられる。

本遺構から出土した土器はコンテナで約1箱と、遺構規模を考慮すると多くはない。ほとんどが覆土からの出土であるため一括性に乏しいが、これらのうち残存状態の良好な19点を掲載した。259は壺の口縁部である。260～262は小型壺である。このうち260は口縁部高が胴部高を上回る。263はいわゆるS字状口縁台付壺を模倣した在地系の壺である。口縁部内側に沈線が施される。264は胎土に石英を多く含むことからS字壺の搬入品の可能性を考えたい。265・266は口縁部が受口状を呈する壺、267は口縁部がくの字形に外反する壺である。268～275は高杯である。このうち268は流路の底から出土した。276は鉢である。口縁部が外反気味に聞く。277は須恵器の壺蓋である。

これら土器の時期について、263・264は前期の所産と考えられ、他に260も前期末から中期初頭に位置付けられる。また265・266や胴部が球形になると推定される267も古い要素を持つ。一方で277は須恵器MT15型式(出辯1981)の所産であり、276はおそらく後期に位置付けられるものと思われる。高杯に関しては271が脚柱部上半にやや中膨らみを有して直立する形態から260と同時期に位置付けられるのをはじめ、脚柱部が直立して柄部がハの字に広がる274や、比較的低脚だが脚柱部上半に中膨らみを有する273等が古い要素を持つ一方で、脚部がハの字に聞く275が新しい要素を持っており、ここにも時間差が認められる。全体的には中期前半が主体と捉えて良いものと思われるが、後期まで下る遺物も出土していることから、本遺構の年代は古墳時代中期全般からMT15型式迄という広い時間幅で考えたい。

木製品で掲載したのは278～281の4点である。278は木錘である。長さ11cm、径7cmほどのヒノキ芯持ち材の中央部分を削り込んで、鼓形を呈する。ほぼ完形成で保存状態も良い。本来、縦台に付属するものと考えられるが、本体と思われる製品は無く、流路内より単体で出土した。279は用途不明木製品である。樹種はヒノキ材で、正面・裏面とも調整時の加工痕が残っている。上端部は面をつくり、下端部は刃を作り出すように薄くなっている。左右両端が欠損しているため用途は特定できないが、刀形木製品(形代)の破片とも考えられる。280はヒノキの板材で、上下に作り出した突出部分から扉板と想定される。上部突出部は5.8cmで付け根に圧痕が見られる。下部は2.3cmとやや短い。突出部の断面形は円形である。扉の使用状態は実測図の上下の通りであろう。左側面は欠損しているため扉幅は復元できないが、約30cm前後あったと考えられる。281は用途不明木製品である。長さ112.5cmの丸棒状に加工された木製品である。樹種はイヌマキ材。一端は切断時の痕跡が残っている。全面に加工痕が見られ非常に丁寧に作られている製品だが、用途は特定できない。以上、流路内から出土した木製品の数量は少なく、自然の流木等の木質遺物は見られない。集落域からの流れ込みである可能性が大きい。

### 第3節 遺構外出土遺物

遺構以外から出土した遺物の全てが土師器を主とする土器類であり、他の材質による遺物は出土していない。前述したとおり調査区全体でみると遺物は局所的に集中して出土する傾向がみられたが、集中出土地点各所においては、良好な一括資料となり得るようなまとまりのある出土はなかった。

土師器（282～345） 282～286は中型以上の壺である。折り返し口縁のもの（282・284）、單純口縁のもの（283・285）がある。287～295は小型壺とした。いずれも胴部高が口縁部高を上回るが、このうち292は口縁部が受口状を呈しており、胴部も直線的になるものと思われる。294は外面が丁寧に調整されており、ヘラ状工具で縱方向に2条の沈線が施される。295は中型壺かもしれない。

296～306は壺である。このうち296は球脣の台付壺であろう。304は長脣を呈しており、外面には粗いハケが残る。なお298の内面と300・305の外面には煤が多量に付着している。

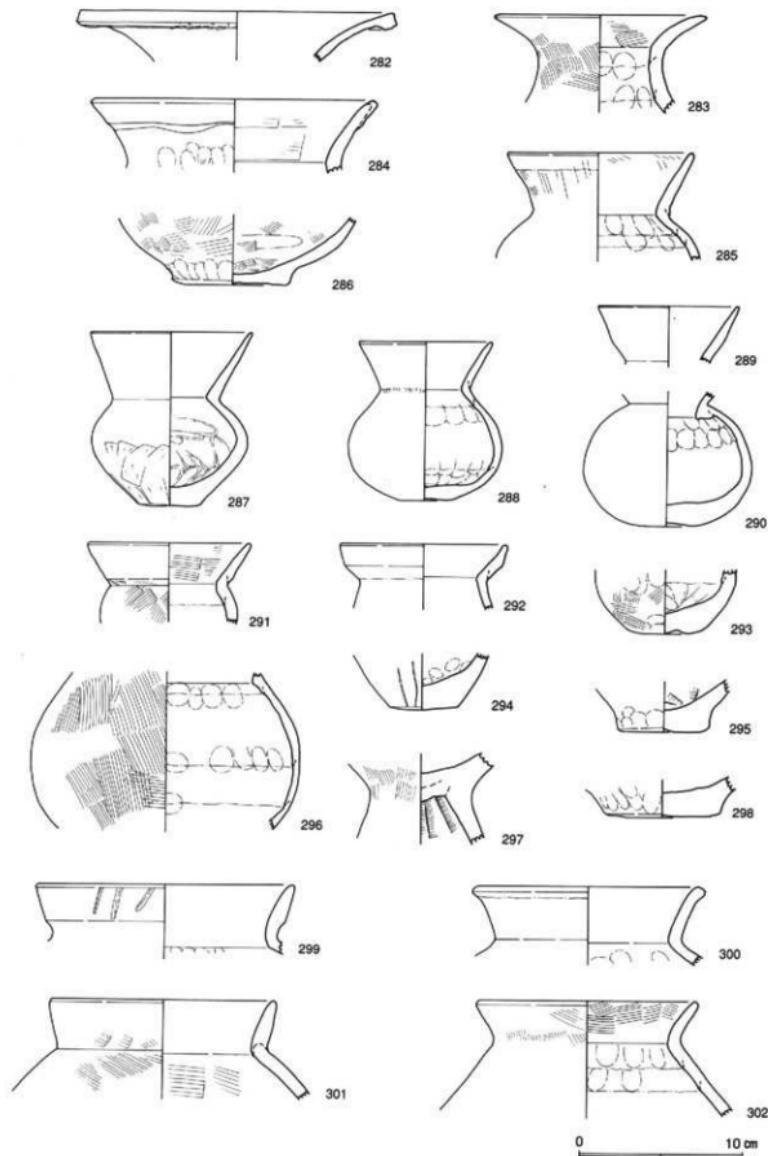
307～343は高坏である。坏部は下半に稜を有して直線的に開くものがほとんどであり、ヘラミガキはわずかにしきみられない。その中でも317は体部下半の稜の直上に幅6mmの沈線を巡らして口縁部は外反気味に開くという他にはない特徴を有する。脚部に関しては内面ナデ調整が基本となり、脚柱部上半に中膨らみを持って裾部が開く所謂屈折脚高坏の一群（322～332）と、脚部がハの字状に開いて裾部が短く外反する一群（333～341）をみとめられる。前者は脚部高や屈折の強さで更に細分できる。その他の高坏について、318・319は大型の高坏脚部である。320は脚部に貫通する円孔1箇所を有する。321は低脚だが柱状脚を呈する屈折脚高坏である。342・343は接合部の破片である。

344はいわゆる須恵器模倣坏である。345は平底の手捏ね土器で、体部を薄くつくりだしている。

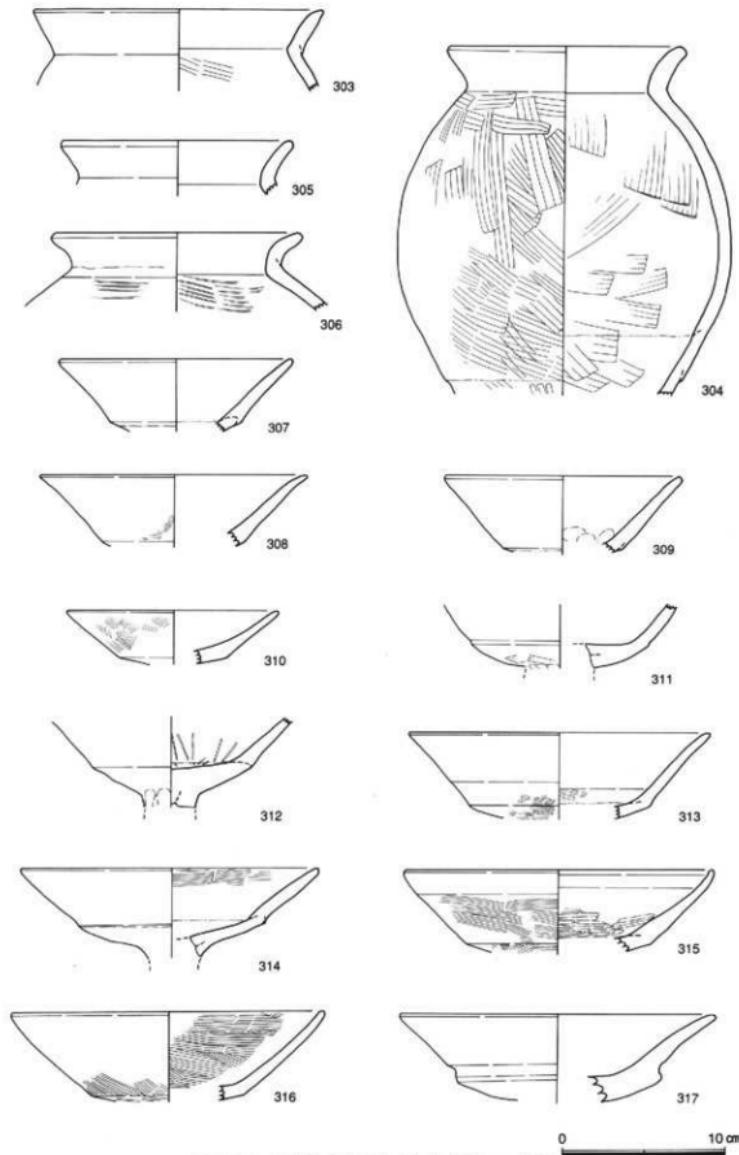
これら土師器の時期について、壺282・283と壺296・297は古墳時代前期に、また高坏342・343と壺344は後期に、その他の大半は中期にとそれぞれ位置付けられる。中期の土器群の中では、304の壺は新しい要素を持つことから、TK208かそれ以降の所産と考えられる。高坏では328や332のように脚柱部上半に中膨らみを有して裾部が開くものは静岡市瀬名遺跡2-3区9層出土資料や磐田市見性寺貝塚出土資料に類似するが、裾部の屈折が甘いこと等から、これらよりも新しい段階に位置付けたい。また323にみられるように脚部が低脚化して裾部の屈折がかなり弱くなる資料も存在するが、これらは更に時期が新しくなるものと思われる。一方で333や336等のように脚部がハの字状に開く高坏は県東部方面に類例を求めることができる。山本恵一氏はこの高坏をTK73段階以降に位置付けている（山本1999）。以上のことから本遺跡の主体はTK73～TK208型式の段階（中期中葉）に位置付けられよう。須恵器（346～350） 本遺跡から出土した須恵器で、包含層である埴輪から出土したものはない。346・347は坏である。346は6世紀中葉、347は6世紀末から7世紀初頭に位置付けられる。348～350は坏蓋である。348は平頂蓋で6世紀後半、349は奈良時代、350は扁平な宝珠状つまみを有しており奈良・平安時代の所産、とそれぞれ位置付けられる。

#### <第5章 参考・引用文献>

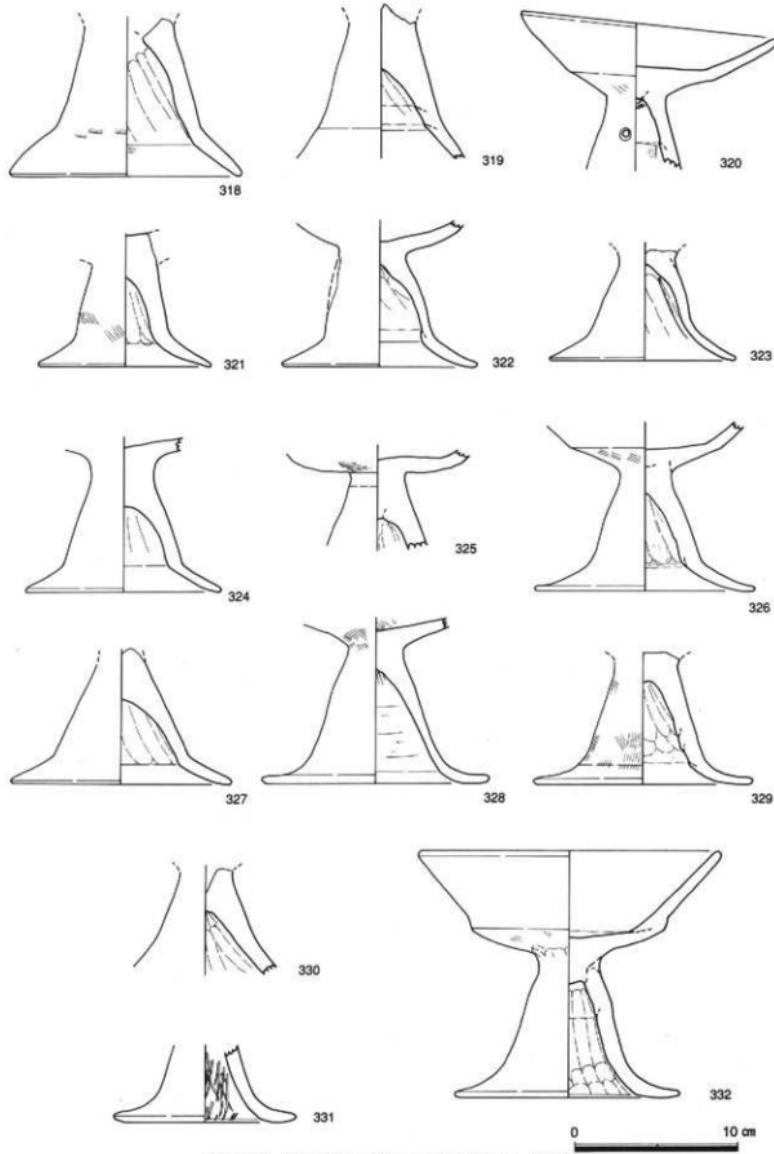
- ・磐田市教育委員会 1974 「遠江見性寺貝塚の研究」
- ・(財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1994 「瀬名遺跡Ⅲ(遺物編Ⅰ)」
- ・田辺昭三 1981 「須恵器大成」 角川書店
- ・松井一明 1995 「遺物について」 「坂尻遺跡—遺物・総括編ー」
- ・山口和夫 1987 「志太地域の土器(1)－弥生・古墳時代編(1)－」 「焼津市歴史民俗資料館年報」 I 焼津市歴史民俗資料館
- ・山本恵一 1999 「駿河の古墳時代中期の土器－東駿河を中心にして－」 「東国土器研究」 第5号



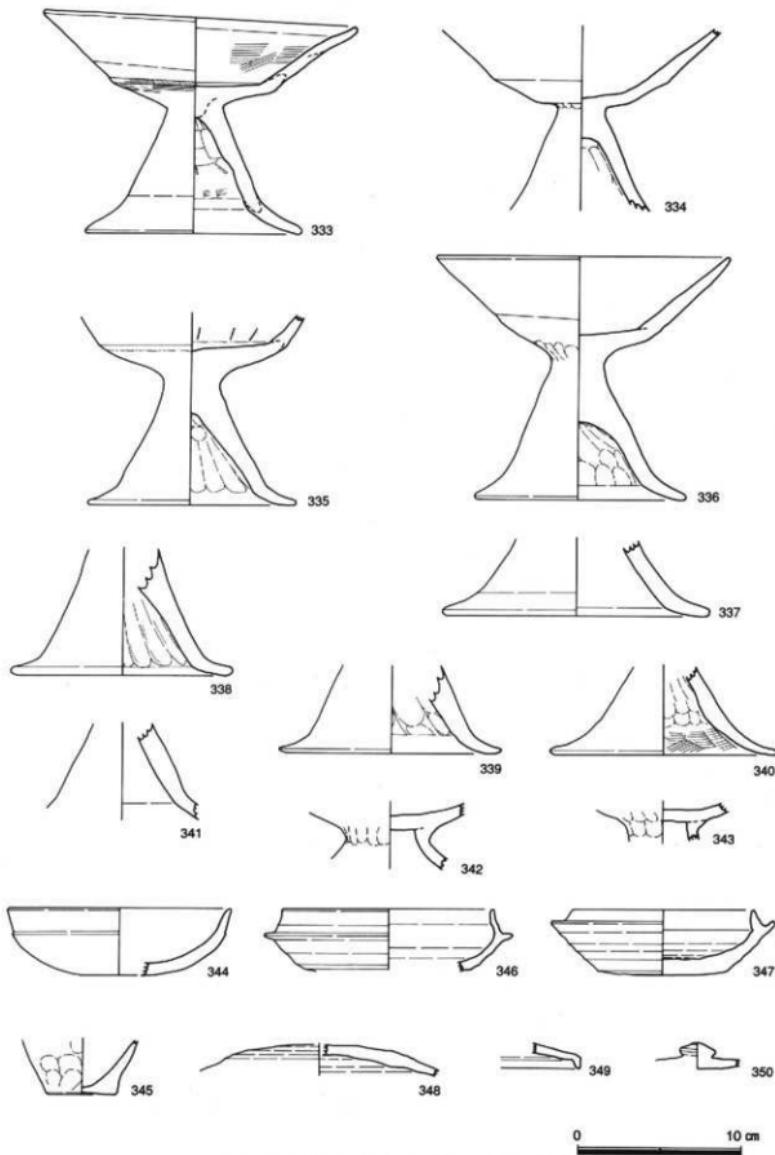
第25図 遺構外出土遺物（古墳時代1：土器）



第26図 遺構外出土遺物（古墳時代2：土器）



第27図 遺構外出土遺物（古墳時代3：土器）



第28図 遺構外出土遺物（古墳時代4：土器）

第10表 古墳時代土器観察表1

揭露番号	回収番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態・手法の特徴	色調 胎土	残存率	備考
259		壺	1区 SR203	口径(13.6)	口縁部は厚く、直線的に開く。外面部ヨコナデ、内面部ヨカケナデ。	内外:SYR7/4にぶい橙 2mm以下小礫含有、1mm白色粒子少量含有	口縁部1/3	
260	24	小型 壺	1区 SR203	口径(9.5) 器高 7.4 底径 2.1	口縁部は直線的に開き、外面部ヨカケ後ヨコナデ及び頸部ヨコナデ、内面部ヨカケ後ヨコナデ。頸部は扁平な球形で外面部半ナメナハケ、下半平板ナデ、内面部ナデ、底部はやや厚い。	外:SYR7/3にぶい橙 内:SYR7/4にぶい橙 2mm以下小礫・1mm白色粒子微量含有	口縁部1/2 底部ほぼ完存	
261		小型 壺	1区 SR203	口径(8.3)	口縁部は直線的に開くと思われる。外面部ヨコナデ、内面部ナデ。頸部は球形を呈し、外面部ナメナハケ後ナデ、内面部ナデ。	外:SYR7/4にぶい橙 内:SYR7/3にぶい橙 3mm白色小礫・褐色小礫含有	頸部1/3	
262		小型 壺	1区 SR203	口径 8.1 底径 2.5	洞部は丸く、外面部ハケ後ナデ、内面部ナデ。頸部外面に一部ハケ残る。底部はやや平坦。	外:10YR7/3にぶい黄橙 内:SYR7/8 棕 灰色微粒子・茶色微粒子・長石含有、2mm小礫少量含有	洞部1/2	
263		壺	1区 SR203		口縁部をS字状につくりだし、内外面部ヨコナデ。口唇部内側に比較。	外:SYR8/3 淡橙 内:10YR7/1灰白 1mm以下小礫・長石含有	口縁部1/9	外面に一部焼付着
264		壺	1区 SR203		舟付窓の接合部。外面部ナメハケ。舟部内面接合ナデ。	内外:10YR7/2にぶい黄橙 1mm小礫・長石・金雲母多量含有	接合部完存	
265		壺	1区 SR203	口径(12.1)	口縁部はくの字状に外反し、底部は受け口状にやや内湾する。柄部は球形か、内面部ハケがむかに残る他は厚壁の為調整不明。	内外:7.5YR7/4にぶい橙 1mm以下小礫・赤褐色粒子含有	口縁部～肩部 1/4	
266		壺	1区 SR203	口径(14.2)	口縁部はくの字状に外反し、底部は受け口状にやや内湾する。内外面部ヨコナデ。頸部外面部ハケのちヨコナデ。頸部内面部ヨコハケ。	内外:10YR7/2にぶい黄橙 1.5mm以下小礫茶褐色粒子含有	口縁部1/5	
267		壺	1区 SR203	口径(17.9)	口縁部はくの字状に外反し、内外面部ヨコナデ。頸部内面部ナデ。	外:SYR7/4にぶい橙 内:SYR7/6 棕 褐色微粒子・白色微粒子多量含有、2mm以下茶色微粒子少量含有	口縁部1/6	外面に多量の燒付着
268	25	高 杯	1区 SR203	口径(19.0)	杯部は深く、外面部下半に低い壁を持ち、直線的に開く。口縁部外面部ヨコナデの他は、厚壁の為調整不明。	外:7.5YR8/4 淡黄橙 内:7.5YR7/4にぶい橙 褐色微粒子・灰色微粒子多量含有	杯部ほぼ完存	
269		高 杯	1区 SR203	口径(15.8)	杯部は深く、やや膨らみを伴しながら直線的に開き、内面部ナデ。口縁部外反し、内外面部2mm以下白色粒子含有、6mm白色粒子少量含有	内外:7.5YR6/4にぶい橙 内:SYR5/6 淡黃橙	杯部1/3	
270		高 杯	1区 SR203		杯部下半に壁を持ち、直線的に開くと思われる。外面部ハケ後ヨコナデ、内面部ヨコハケ。	外:SYR7/4にぶい橙 内:7.5YR8/3 淡黃橙 褐色微粒子・灰色微粒子多量含有、1mm長石含有	杯部下半1/2	
271	25	高 杯	2区 SR203	器高(9.0)	杯部は下半にやや中膨らみをして直立し、内面部タテヨコナデ及び絞り目。洞部はハの字状に開き、脚柱部との接合は約隙。	内外:7.5YR6/4にぶい橙 内:SYR5/6 明赤褐色 2mm以下小礫含有、1mm以下白色粒子少量含有	脚柱部完存 脚部1/6	
272		高 杯	1区 SR203	口径(12.0)	脚柱部は内面部ナデと思われる。洞部外反するが粗折はやや甘く、内外面部ハケ後ヨコナデ。	外:7.5YR8/4 淡黄橙 内:7.5YR7/3にぶい橙 白色微粒子・茶色微粒子含有	脚柱部1/4	
273		高 杯	1区 SR203	口径(10.2)	脚柱部は上半に中膨らみを有し、内面部タテヨコナデ及び下半ハケ粗折、外面部タテ板調整、洞部外反し、外面部ハケ粗折、内面部及端部ヨコナデ。脚柱部との接合は明瞭。	外:7.5YR7/4にぶい橙 内:2.5YR6/3にぶい橙 2mm以下小礫含有、1mm以下白色粒子・赤褐色粒子少量含有	脚部1/3	

第10表 古墳時代土器観察表2

掲載番号	図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態・手法の特徴	色調 胎土	残存率	備考
274	26	高环	1区 SR203	直径 (9.1)	脚柱部は中実で柱状に直立するが低い。内面 折衷度が異なる。脚部はハの字状に開き、外面部 ヨコナダ、内面板ナダ。脚柱部との折衷は明 確。	外:5YR7/4 にぶい橙 内:7.5YR7/2 明褐色 1mm以下2mm以上茶色粒子含有	脚部3/5 1mm~2mm褐色粒子含有	脚部残存高 6.8cm
275		高环	2区 SR203	脚径 (11.9)	脚柱部はハの字状に開き、内面斜り目。脚部 は外反し、内面に一部ハケが残る。	外:10YR6/3 にぶい黄橙 内:2.5YR7/1 灰白 1mm以下2mm以上茶色粒子多量含有	脚部1/4	
276		鉢	1区 SR203	口径 (13.8) 底径 (5.3) 壁高 5.1	口径体部強的に開き、内外面ヨコハナナメハケ。 底径後指ナダ。口縁部わずかに外反し、内外面ヨ コナダ。	外:7.5YR8/3 淡黄色 内:5YR7/4 にぶい橙 1mm茶色粒子多量含有 1mm灰色粒子含有	口縁部~底部 1/6	
277		环 蓋	2区 SR203	口径 (14.9) 腰径 (14.1)	口縁部はやや外方に下がり、端部は内面に凹 曲して内側する凹面を有する。縫は甘く、或 ては沈線を有する。天井部回転ヘラケグリ、 内外面回転ナダ。	外:N4/灰 断面:10YR4/2 灰黃褐色 5mm小孔・1mm以下白色 粒子少量含有	口縁部1/7	須恵器
282		壺	1区 表探	口径 (19.2)	口縁部は外周して開き、肩部折り返す。折り 返し部外周指ナダの他は摩滅の為調整不明。	内外:7.5YR6/3 にぶい橙 1mm以下小穂・長い多量含有	口縁部1/12	
283		壺	1区 12 包含層	口径 (12.1)	口縁部大きく外身し、内面ヨコハケ、脚部尖 る。脚部外側タテナナメハケ、内面指頭痕 が残る。	外:10YR8/6 黄橙 内:10YR8/3 淡黄色 3mm茶色小穂多量含有 2mm灰色含有	口縁部1/4	
284		壺	1区 H2 包含層	口径 (16.8)	口縁部は直線的に開き、底部幅広に折り返 し、内面ヨコハケ。頸部外側に一部タテハケ が残る。	内外:7.5YR7/3 にぶい橙 2mm以下小穂多量含有 2mm以下長石含有	口縁部1/6	
285	24	壺	2区 E3 包含層	口径 11.3	口縁部は直線的に開き、内外面ハケ後ヨコナ ダ。肩はナデ肩で内面指頭痕が残る。	外:7.5YR8/6 淡黄色 内:7.5YR7/6 橙 1.5mm以下茶色粒子多量含有 0.5mm灰色微粒子 長石含有	口縁部3/4 肩部1/6	
286		壺	1区 E2 包含層	底径 7.0	底部は平坦。肩下半部内外面ナナメハケ。	外:7.5YR7/3 にぶい橙 内:7.5YR6/4 にぶい橙 2~5mm白色粒子・褐色粒 子・鐵多量含有	底部完存	
287	24	小型壺	2区 E3 包含層	口径 (9.8) 腰径 9.6 底径 3.8 壁高 10.7	口縁部は直線的に開き、底部尖る。脚部は中 央やや上寄りに最大径がある。外面ヘラケス トリ、内面弱い指ナダ。底部は平坦でヘラケス トリを施す。	外:10YR7/2 にぶい黄橙 内:8YR7/6 橙 1.5mm以下小穂多量含有 1.5mm以下赤褐色粒子少 量含有	口縁部2/5 脚部2/3	
288	24	小型壺	1区 包含層	口径 (8.0) 腰径 9.5 底径 2.8 壁高 9.7	口縁部は直線的に開き、底部尖る。脚部は中 央やや上寄りに最大径がある。底部は平坦で 内面指頭痕が残るが摩滅の為調整不明。	外:7.5YR7/4 にぶい橙 内:7.5YR8/4 淡黄色 2mm茶色粒子多量含有 長石含有	口縁部1/4 脚部1/2 底部完存	
289		小瓶壺	1区 E2 包含層	口径 (8.6)	口縁部は直線的に開き、頸部尖る。内外面共 摩滅の為調整不明。	外:5YR7/8 橙 内:5YR7/6 橙 1mm以下茶色粒子含有	口縁部1/4	
290	24	小型壺	2区 E2 包含層	脚径 (10.4) 底径 (3.0)	脚部は球狀を呈し、頸部との接合部内間に明 確な後合痕あり。底部やや上げ底。脚上部内面 内面に指頭痕が残るが摩滅の為調整不 明。	外:7.5YR8/6 淡黄色 内:5YR8/3 淡黄色 1mm以下灰色粒子・茶色粒 子多量含有	頸部1/3 脚部1/4 底部1/3	
291		小型壺	1区 E2 包含層	口径 (9.8) 脚径 (8.4)	脚部は球狀を呈し、内外面ハケ後ヨコナ ダ。脚部は球狀を呈すると思われ、外面ナナ メハケ。脚部内面ナダ。	外:2.5YR7/6 橙 内:5YR8/3 淡黄色 1mm白色粒子少量含有 2mm褐色粒子含有	口縁部~脚部 1/3	
292		小型土器	1区 E2 包含層	口径 (10.0)	厚めの口縁部はやや受口状を呈し、内外面ヨ コナダ。	外:5YR7/6 橙 1mm褐色粒子含有 2mm以下白色粒子少量含有	口縁部~脚部 1/半1/3	

第10表 古墳時代土器観察表3

施設番号	部族番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態・手法の特徴	色調 胎土	残存率	備考
293		小型壺	1区 J1 包含層	底径 (2.8)	胴部は球形を呈し、外面板ナデ。内面粗い指ナデで輪積み板が明顯に残る。底部や平坦部で底気味。	外:7.5YR7/4 深 内:7.5YR8/6 浅黄 1mm茶色粒子・灰色粒子多量含有	底部1/2	
294	25	小型壺	1区 包含層	底径 4.0	底部平坦。胸下半部に縞位2条の鉄剣(縞幅0.6mm)が施される。内面指ナデ。	外:5YR7/4 にぶい橙 内:10YR7/3 にぶい橙 1mm灰砂粒・茶色粒子多量含有	底部完存	
295		壺?	1区 G2 包含層	底径 5.6	底部は平坦で中央がやや瘤む。内面板ナデ。	内外:5YR7/4 にぶい橙 3mm以下小穢・1mm以下金属性・共石含有	底部完存	
296		壺	1区 E2 包含層	胸径 (16.5)	胴部は球形を呈し、外面タテヘナメハケが明顯に残る。内面に指痕痕残る。	外:7.5YR7/2 明顯灰 内:7.5YR7/3 にぶい橙 2.5mm以下小穢多量含有・ 1.5mm以下赤褐色粒子含有	胸部1/4	
297		壺	1区 E2 包含層		台付裏の接合部で外面タテハケ。台部内面板ナデ。	外:7.5YR8/3 浅黄橙 内:5YR8/4 淡橙 1mm白色粒子・赤褐色粒子多量含有・小穢含有	接合部1/2	
298		壺	1区 E2 包含層	底径 7.0	底部は平坦。	内外:5YR7/4 にぶい橙 1.5~5mm小穢含有	底部1/2	内面に煤が厚く付着
299		壺	1区 E1 包含層	口径 (15.6)	口縁部は肥厚し、短く開く。端部は丸い。外面部ヨコナデだが、3箇所にへら状工具の痕跡が残る。	内外:7.5YR8/2 灰白 2mm以下小穢多量含有	口縁部1/8	
300	24	壺	1区 H2 包含層	口径 (13.2)	口縁部はくの字状に直線的に開き、端部を丸くつくる。外面部ヨコナデ。	外:7.5YR8/4 浅黄橙 内:5YR8/6 淡 1mm長石・灰色粒子含有・ 黒母多量含有	口縁部1/3	外面に煤付着
301		壺	2区 I3 包含層	口径 (13.5)	口縁部はくの字状に短く直線的に開く。肩部・内外面ヨコヘナメハケ。	外:7.5YR7/4 にぶい橙 内:SYR7/5 淡 1mm白色粒子・灰色粒子多量含有・小穢含有	口縁部1/5	
302		壺	1区 J1 包含層	口径 (13.1)	口縁部はくの字状に外反し、内外面ヨコハケ。頸部外面タテハケ。	外:7.5YR7/4 にぶい黄橙 内:SYR8/6 淡 2.5mm以下小穢・赤褐色粒子多量含有・1mm以下白色粒子・共石含有	口縁部~肩部 1/5	
303		壺	2区 I3 包含層	口径 (17.5)	口縁部は肥厚しており、くの字状に外反する。肩部内面にハケが残る他は底底の為調査不明。	外:7.5YR8/3 浅黄橙 内:7.5YR8/2 灰白 1mm白色粒子・黃色粒子多量含有・小穢含有	口縁部1/6	
304	24	壺	1区 M1 包含層	口径 14.2 胸径 (20.4)	口縁部はくの字状に外反し、内外面ヨコナデ。肩部・内面下半は粗いタテヘナメハケが明顯に残り、内面上半は粗ナデ。	外:10YR8/4 にぶい黄橙 内:10YR5/4 にぶい黄 1mm白色粒子・赤褐色粒子含有	口縁部完存 胸部1/6	胸部外面に煤付着
305		壺	1区 H2 包含層	口径 (14.0)	口縁部はくの字状に外反し、内外面ヨコナデ。	外:10YR8/6 黄橙 内:10YR7/4 にぶい黄橙 白色粒子多量含有・1mm 灰色粒子少量含有	口縁部1/2	外面に煤付着
306		壺	2区 E3 包含層	口径 (14.8)	口縁部は大きく外湾し、端部を丸くつくる。肩部内外面粗いヨコハケ。	外:7.5YR7/6 淡 内:7.5YR8/4 浅黄橙 1mm茶色粒子多量含有・ 1mm白色粒子含有・1mm 灰色粒子少量含有	口縁部~肩部 1/4	
307		高杯	2区 E2 包含層	口径 (14.0)	杯部は下半に縞を持ち、やや外反気味に開く。内外面ヨコナデ。	内外:2.5YR7/4 褐赤橙 1mm以下茶色粒子多量含有・ 1mm灰色粒子含有・ 2mm以下小穢少量含有	杯部1/5	

第10表 古墳時代土器観察表4

器種 番号	器種 番号	出土地点	法量(cm)	形態・手法の特徴	色調 胎土	現存率	備考
308	高 環	2区 E3 包含層	口径(16.3)	环部は下半に弱い棱を持ち、口縁部や外反する。外底にハケがわずかに残る他は摩滅の為調整不明。	外:SYR8/3 淡橙 内:5YR8/2 灰白 1mm赤褐色粒子含有	环部1/3	
309	高 環	1区 E2 包含層	口径(14.2)	环部は下半に棱を持ち、直線的に開く。半底の為調整不明。	内外:SYR8/4 淡橙色 1~2mm白色粒子・褐色粒子含有	环部1/2	
310	高 環	1区 E2 包含層	口径(13.0)	环部は浅く、下半に棱を持ち、直線的に開く。外底ナメハケ。	外:5YR7/6 棕 内:2.5Y6/2 灰黄 1~2mm赤褐色粒子少量含有	环部1/6	
311	高 環	1区 G2 包含層		环部は下半に段をつくり、やや内湾気味に立ち上がる。外底段より下半に板ナゲの他は摩滅の為調整不明。	外:10YR8/6 黄橙 内:10YR8/4 淡黄橙 1mm以下茶色粒子多量含有 0.5mm灰色粒子含有	环部下半1/3	
312	高 環	2区 F3 包含層		环部は下半に棱を持ち、直線的に開く。内面板ナゲが残る他は摩滅の為調整不明。	外:10YR8/2 灰白 内:10YR8/1 灰黄 2mm以下茶色粒子・3mm以下灰色・白色粒子多量含有	环部下半完存	
313	高 環	1区 E2 包含層	口径(18.3)	体部は下半に棱を持って直線的に開く。内外面ヨコハケ。口縁部はやや外反気味となり。外底ヨコナデ。	内外:7.5YR7/4 にぶい橙 1~4mm白色粒子・灰色粒子多量含有	环部1/6	
314	25	高 環	2区 E3 包含層	口径(18.2)	环部は下半に明瞭な棱を持って直線的に開く。口縁部内面にヨコハケが残る他は摩滅の為調整不明。	3mm以下赤褐色粒子含有 1.5mm以下小穂・白色粒子微量含有	环部完存
315		高 環	1区 包含層	口径(18.4)	环部は下半に明瞭な棱を持って直線的に開く。外底ヨコハケ、内外面ヨコヘラミガザ。口縁部はやや内湾気味となり、内外面ヨコナデ。	外:5YR7/4 にぶい橙 内:7.5YR8/6 淡黄橙 0.5mm灰石・1mm灰色砂多量含有 1mm茶色粒子含有	环部1/3
316		高 環	1区 J1 包含層	口径(19.0)	环部は下半に棱を持って直線的に開く。口縁部はわずかに内湾する。外底口縁部・体部上半ヨコナデ、下半ナメハケ。内面ヨコハケ。	外:5YR7/3 にぶい橙 内:5YR8/4 淡橙 茶色微粒子・灰色微粒子多量含有 1mm茶色粒子含有 1mm灰石多量含有	环部1/5
317	25	高 環	1区 F1 包含層	口径 19.1	环下半部に強い棱を持ち、その直上に幅6mmの輪縁を施す。口縁部は外反する。摩滅の為調整不明。	外:7.5YR7/3 にぶい橙 内:7.5YR8/2 灰白 2mm以下小穂・1.5mm以下長石多量含有	环部3/5
318		高 環	2区 E3 包含層	幅径 14.0	大唇の高环脚部。脚柱部は直線的に開き、内面タテナゲ。底部はやや内湾気味に広がり、脚柱部との屈折はやや明瞭。部分的にハケが残る。	外:2.5Y7/2 灰黄 内:7.5YR8/4 淡橙 3mm以下小穂含有	脚柱状部2/3 脚底部1/3 残存高9.3cm
319		高 環	1区 排水溝		大唇の高环脚部。脚柱部は直線的に開き、内面絞り目。輪縁み度が明瞭に残る。	外:7.5YR8/4 淡黄橙 内:7.5YR7/6 棕 2mm以下茶色粒子多量含有 1mm以下灰石含有 5mm以下小穂少量含有	脚柱部1/2
320	25	高 環	1区 G2 包含層	口径(15.7)(幅7.5mm) 脚柱部内面板ナゲ、輪縁み度が明瞭に残る。接合部内面をヘラ狀工具で削り取る。	外:7.5YR7/3 にぶい橙 内:2.5YR8/6 棕	口縁部1/3 脚柱部上半完存	
321		高 環	1区 G2 包含層	脚柱部は直立し、内面タテナゲ。外面に一部ハケが残る。泡部は外反するが、脚柱部との屈折は明瞭。	外:5YR7/6 棕 内:5YR7/8 棕 1mm茶色粒子多量含有 2mm以下長石含有	脚柱部完存 脚底部1/3 残存高8.4cm	
322	25	高 環	1区 G2 包含層	脚柱部は上に中膨らみを持って開き、内面に絞り目及び輪縁み度が残る。底部は外反するが、脚柱部との屈折は明瞭。内面に顯著な接合痕を残す。外底は摩滅の為詳細不明。	外:7.5Y7/2 黄橙 内:7.5Y6/6 棕 3mm以下灰色砂塵多量含有 2mm以下茶色粒子含有	脚部ほぼ完存 环下半部1/4	

第10表 古墳時代土器観察表5

掲載番号	図版番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態・手法の特徴	色調 調子	残存率	備考
323	高环 26	1区 包含層	裾径(11.2)		脚柱部は上半が中膨らみを持って開き、内面タテ指ナデ、外面タテハケ後タテ板調整。脚部外反するが、脚柱部との屈折はやや付いた。	外:7.5YR7/4 にぶい橙 内:7.5YR8/6 淡黄橙 2mm以下長石・灰色砂多量含有、脚部3/4 含有、2~5mm小颗粒含有		
324	高环 26	1区 J1 包含層	裾径(11.7)		脚柱部は上半がやや中膨らみを持って開き、内面ヘラナデ、裾部外反し、内面ヨコナデ後ヨコナデ。脚柱部との屈折は明瞭。中実。	外:7.5YR7/4 にぶい橙 内:7.5YR7/6 淡黄 2mm以下黑色粒子多量含有、1mm以下白色粒子含有	脚柱部1/2 脚部部1/8	
325	高环 26	1区 J1 包含層		13.3	脚柱部外板ナデと接合部外面ヨコナデ。脚柱部は直線的に開き、外面タテハケが僅かに残り、内面指ナデ。中実。	外:SYR7/3 にぶい橙 内:2.5YR8/2 灰 1mm灰色粒子含有、1mm 茶色粒子少微量含有	坏下半部1/5 脚部部1/3	
326	高环 26	2区 E3 包含層	裾径	13.3	脚柱部は下部に直線的な縫を持ち、外面ハケ、直線的に立ち上がりと思われる。脚柱部は上半がやや中膨らみを持って開く、内面タテ指ナデ及び絞り目。裾部は外反する。脚柱部との屈折は明瞭。	内外:7.5YR8/1 淡黄橙 2mm以下小颗粒含有、1.5mm以下白色粒子微量含有	脚部完存 坏下半部1/5	
327	高环 26	1区 東壁	裾径(13.4)		脚柱部は直線的に開き、内面タテ指ナデ。裾部は外反し、内面ハケ後ヨコナデ。脚柱部との屈折は明瞭。中実。	外:7.5YR8/6 淡黄橙 内:SYR7/6 淡 2mm以下黑色粒子多量含有、1mm以下灰色砂・長石含有	脚柱部1/2 脚部部1/4	
328	高环 26	1区 包含層	裾径(13.5)		坏面内面ハケ。接合部外面タテハケ。脚柱部は上半がやや中膨らみを持って開く。内面タテ指ナデ及び絞り目。脚柱部は外反し、内面ハケ後ヨコナデ。脚柱部との屈折は明瞭。	外:SYR6/3 にぶい橙 内:7.5YR7/3 にぶい橙 1~2mm白色粒子・灰色粒子・褐色粒子含有	脚柱部ほぼ完存 脚部部1/10	
329	高环 26	1区 J1 包含層	裾径	13.3	脚柱部は八の字状に開き、外面タテハケ、内面粘土貼付後タテ指ナデ及び絞り目。裾部は外反し、内面ハケ後ヨコナデ。脚柱部との屈折は明瞭で、内面に接合痕を残す。	内外:7.5YR8/4 淡黄橙 1mm以下黑色粒子多量含有、1mm灰色粒子含有	脚部完存	
330	高环 26	1区 E1 包含層			脚柱部は八の字状に開き、内面タテ指ナデ及び絞り目。	内外:2.5Y8/2 灰白 2mm以下黑色粒子・1mm 灰色粒子多量含有	脚柱部1/3	
331	高环 26	1区 II 包含層	裾径(10.8)		脚柱部は八の字状に開き、内面タテ方向へのラ形状工具痕が多数残る。裾部は短く外反する。	外:10YR8/4 淡黄橙 9:10YR8/2 灰白 1mm灰色粒子多量含有、 1mm黑色粒子含有	脚部部1/4	
332	高环 26	1区 G2 包含層	口径(18.0) 裾径(13.7)		脚柱部は下部に明瞭な後をもち、直線的に開く。外面に一部ハケが残る。脚柱部は上半がやや中膨らみを持って開き、内面タテ指ナデ。脚部は短く外反する。	内外:7.5YR7/4 にぶい橙 1.5mm以下小颗粒多量含有、 1mm白色粒子含有	坏部2/3 脚部3/4	
333	高环 26	1区 J2 包含層	口径(19.3) 裾径(13.0) 器高(13.7)		脚柱部はやや浅く、下部に縫を持ち、外面上面ハケ、内面ハケ後外反気味に開き、内面ヨコナデ。脚柱部は八の字状に開き、外面タテ指ナデ及び絞り目。裾部は短く外反し、内面ヨコナデ。	内外:7.5YR7/4 にぶい橙 2mm以下白色粒子多量含有、 1mm以下小颗粒含有	坏部ほぼ完存 脚部完存	
334	高环 26	2区 E3 包含層			脚柱部は下部にゆるい縫を持ち、直線的に開く。脚柱部は八の字状に開く。脚柱部内面にタテ指ナデのは他は擦滅の為調整不明。	内外:SYR6/8 棕 1mm以下小颗粒・茶褐色粒子含有	坏部2/5 脚部1/5	
335	高环 27	1区 包含層	裾径(12.6)		脚柱部は下部にゆるい縫を持ち、直線的に開くと思われる。内面ナデナデ。脚柱部は八の字状に開き、内面タテ指ナデ及び絞り目。裾部は短く外反するが、脚柱部との屈折は不明確。	内外:10YR8/1~N8 灰白 2mm以下小颗粒多量含有、 1.5mm以下長石含有	坏部1/6 脚部部完存 脚部部1/7	
336	高环 27	1区 包含層	口径(17.8) 裾径(12.4) 器高(14.9)		脚柱部は下部に非常に弱い縫を持ち、直線的に開く。脚柱部は八の字状に開き、中実。内面タテ指ナデ及び絞り目。裾部は短く外反する。脚柱部との屈折は不明確。	外:2.5YR7/6 棕 内:7.5YR7/6 棕 3mm以下小颗粒多量含有、 3mm以下茶褐色粒子含有	坏部2/3 脚部1/3	
337	高环 27	1区 J1 包含層	裾径(15.9)		脚部は八の字状に開き、裾部短く外反する。裾部外面ヨコナデの他は擦滅の為調整不明。	外:SYR7/4 にぶい橙 内:2.5YR6/4 にぶい橙 1mm白色粒子多量含有、 1mm褐色粒子少微量含有	脚部部1/3	

第10表 古墳時代土器観察表6

通載 番号	図版 番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態・手法の特徴	色調 釉土	残存率	備考
338		高 环 包含層	1区 E2	底径 (13.4)	脚部は八の字状に開き、脚部近く外反する。 脚柱部タテ指ナデの他は摩滅の為調整不明。	外:10YR8/3 淡黄橙 内:10YR8/2 白灰 4mm以下白色粒子・小纏・ 2mm以下茶褐色粒子含有	脚部1/3	
339		高 环 包含層	1区 E2	底径 (13.6)	脚部は八の字状に開き、脚部近く外反する。 脚柱部タテ指ナデが、墨折は明瞭ではない。脚柱部内面指ナデ 及び絞り日。	外:SYR8/4 淡橙 内:SYR8/3 淡橙 2mm以下小纏多量含有、 1mm以下白色粒子含有	脚部1/4	
340		高 环 包含層	1区 E2	底径 (13.5)	脚部は八の字状に開き、脚部近く外反する。 脚柱部内面タテ指ナデ及び絞り日、脚部内部 ヨコガハ。	外:2.5YR7/6 淡 内:5YR8/3 淡橙 1~3mm白色粒子多量含有	脚柱部1/4	
341		高 环 包含層	1区 E2	底径 (13.5)	脚部は八の字状に開き、内外面摩滅の為調整 不明。	外:10YR7/3 にぶい橙 内:7.5YR8/6 淡黄橙 1mm以下白色粒子多量含有、 0.5mm茶褐色粒子含有	脚柱部1/2	
342		高 环 包含層	2区 I3	底径 (13.6)	高Hの接合部。接合部外面に指痕が残る他 は摩滅のため調整不明。	内:7.5YR6/4 にぶい橙 3mm以下小纏・1.5mm以下茶褐色粒子含有	接合部完存 5.1cm	接合部残 5.1cm
343		高 环 包含層	1区 J1		高杯の接合部。接合部外面に指痕が残る他 は摩滅のため調整不明。	内:7.5YR8/3 淡黄橙 1.5mm以下小纏・淡赤褐色 粒子含有	接合部完存	接合部残 5.1cm
344		环 排水溝	2区 K3	口徑 (13.5) 高 4.1	体部は内面気味に立ち上がり、外面に段差有 して口縁部は直線的に開く。内外面摩滅の為 調整不明。	内:5YR7/4 にぶい橙 1~3mm白色粒子・暗灰色 粒子含有	体部～底座 1/5	
345	27	手 握 ね 包含層	2区 J3	底径 4.0	底部は平坦で、脚部を直線的につくりだす。 内外面指印によるナデで壁面を薄くする。	内外:5YR7/6 橙 2mm以下小纏多量含有、 1.5mm以下長石含有	底座完存 体部1/2	残存高3.3cm
346		环 東壁	1区 東壁	口径 (12.8)	口縁部立ち上がりは内傾しつつ端部直立、受 け口部は内側から弧曲し水平方向に整える。 内外面回転ナデ、体部下半回転ヘラケズリ。	内外:N7/ 灰 微炒粒含有	口縫部～体部 1/4	須恵器
347	27	环 表探	1区 表探	口径 (11.1) 底径 (8.0)	口縁部立ち上がりは屈曲して内傾する。 受け口は体部から直線的に開き、上方へ 底径 (8.0) つまりある。体部下部に明瞭な縦を有し、 上半回転ナデ、下半回転ヘラケズリ。内面回 転ナデ。	外:N5B1/ 青灰 内:SB6/1 青灰	口縫部～底部 1/4	須恵器
348		环 蓋 排水溝	1区 J1		平頂蓋で、天井部回転ヘラケズリ。内面回転 ナデ。	外:N7/ 灰 内:N8/ 灰 2mm以下長石・灰色粒子含有	天井部1/4	須恵器
349		环 蓋	1区 E2		端部を垂直に折りまとめる。内外面回転ナデ。	内外:N7/ 灰 長石微粒子含有	口縫部1/13	須恵器
350		环 蓋	1区 表探		肩平気味の宝珠状つまみを有する环蓋。天井 部回転ヘラケズリだが、摩滅のため詳細不 明。	内外:N7/ 灰 0.3mm以下白色粒子・砂粒 含有	つまみ完存	須恵器

第11表 古墳時代木製品一覧表

通載 番号	図版 番号	種類	出土地点				樹種	木取り	登録 番号	備考	
			区	GRID	遺構	長さ	幅	厚さ			
278	27	木縄	2	K3	SR203	11.1	7.3	6.6	ヒノキ	芯待ち	W24
279	27	用途不明品	2	K3	SR203	19.7	3.9	1.0	ヒノキ	板目	W26 刀形か?
280	27	漆	2	K3	SR203	109.8	15.6	3.5	ヒノキ	追錆目	W27
281	27	用途不明品	2	K3	SR203	112.5	7.2	5.5	イヌマキ	芯待ち	W31

# 第6章 弥生時代から古墳時代

## 第1節 概要

古墳時代中期の集落と認識された第2面(IX層上面)から約1m下位のXV層上面で第3面を検出した。このXV層の堆積状況を観察したところ、下層の土を巻き込んでいたことから、水田跡と判断した。検出したのは杭列4、畦畔1及び耕作痕である。これらはSA854と耕作痕を除いてG2～G3グリッドに集中しており、しかも概ね同方向に延びているため、複数回の畦畔のつくりかえが想定される。この第3面の遺構群は砂礫層である畠層やXV層によって全面を被覆されていた。

また2区において、SK855よりも北側で2条の溝を検出したが、いずれも幅約25～40cm、深さ3cm以下の極めて浅い溝であり、遺構と認識するにはプランが明瞭ではなく、XV層に被覆されており、遺物の出土もみられなかったため、人工的に構築された溝というよりも寧ろ降雨時の雨道の如きものと考えた。そのため第29図には本溝を掲載したが、遺構とは認識しなかった。

他に、この第3面よりも約0.3m上面の標高57.7m付近においてSK852を検出した。そのためこの検出面でも調査を実施したが、SK852以外に遺構・遺物の出土をみなかった。この遺構はSA857と位置がほぼ同じであること等から第3面との関連性を想定し、本章で報告することとした。

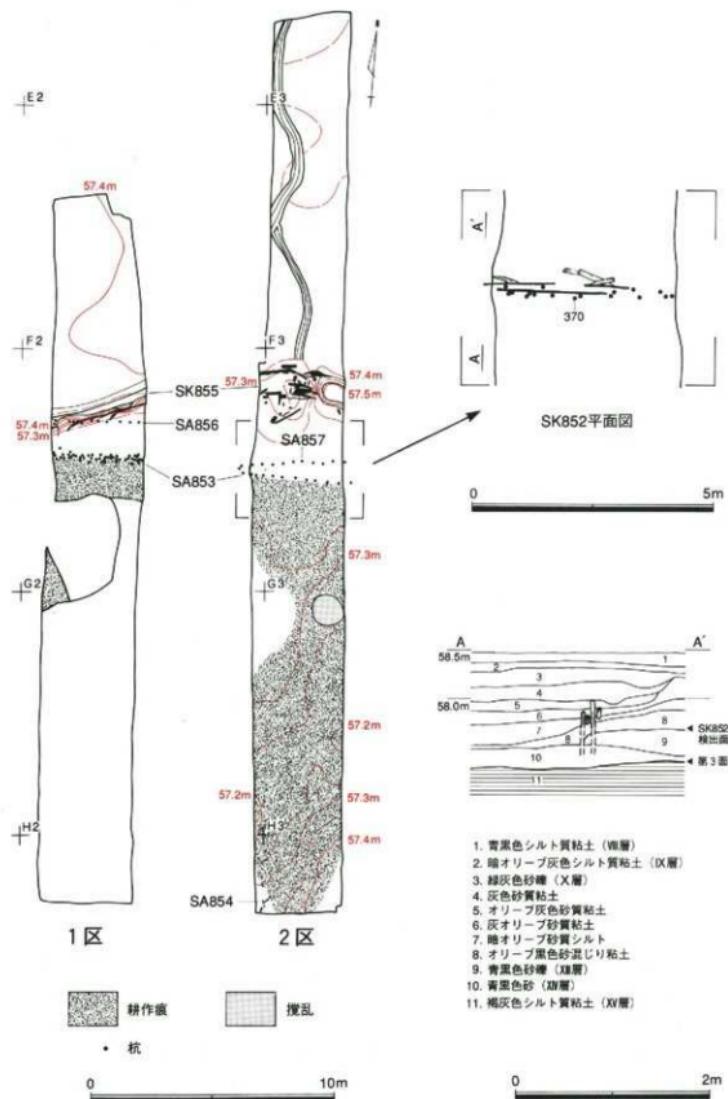
遺物は木製品を除くと土器片が十数点出土したのみである。出土木製品の中にはSK855付近で出土した平鋸や横槌(図版29-3)があるが、大半は杭材あるいはSK855の構築材として転用された建築部材である。

この水田跡は、出土した土器が少量小破片であったため時期の特定が困難であるが、古墳時代中期の包含層である畠層の下層で検出されたことや、XIV-XV層で弥生時代後期から古墳時代前期にかけてと思われる土器が出土していること、その一方で弥生時代中期以前に遡る土器が1点も出土していないこと等から、弥生時代後期から古墳時代前期に位置付けるのが適当と思われる。おそらく、当時数度の洪水に見舞われながらも、その都度畦畔をつくりかえて水田を営んでいたのではないだろうか。

## 第2節 遺構

### SK852(第29、34図、図版30、34)

2区G3グリッドに位置する本遺構を検出したのは、第3面よりも約0.3m上面の畠層中である。ほぼ2列の杭列と数点の横木からなる。遺構の方位はN-86°Eであり、後述するSA853やSA857と位置及び方向性がほぼ同じである。使用されている杭はスダジイ、ヒノキ、イヌマキ等の丸太材あるいは角材が多い。横木は杭列の北側に据えられており、恰も北側からの土圧を杭列で分散させるかの如き様相を呈している。これら横木からは加工等の痕跡を全く見出せなかった。本遺構は1区では確認できなかったが、SA853の1区側の中にSK852で検出された杭と酷似するものが何点か存在することから、実際には1区の方にも延びていたものと推測される。しかし1区では本遺構の検出面での横木・遺物等の出土はなかった。遺構の性格について当初は畦畔を想定していたが、土層の堆積状況(第29図A-A')からは畦畔状の盛り上がりが確認できないため、おそらく北側の土砂が南側に流出するのを防ぐための上留め的な構造物ではなかったかと思われる。なお本遺構から出土した杭のうち加工痕の顯著な1点(370)を掲載した。



第29図 第3面全体図・SK852

### S A 8 5 3 (第30図、図版31)

1区G2グリッドから2区G3グリッドにかけて検出した。方位はN-90°-Eであり、SK852・SA856・SA857に近い方向性である。1区では杭が密に検出されたが、これはSK852やSA857の杭が混在しているためであろう。一方、2区側の杭は北に傾斜しており、およそ20~40cm間隔で打ち込まれている。杭頂部の標高は57.6m前後であり、第3面を検出した段階では杭の上端から約25cmが地表面に露出していた。杭は1区2区共にみかん削り材を多く使用している。SA857との関連については、SA857がむしろSA856に関連する可能性が高いものと考えられる以上、本遺構との関連性は低いものとせざるを得ない。

### S A 8 5 4 (第32図)

2区I2グリッドで検出した。杭は全部で5点出土し、そのうち1点は垂直に打たれた杭が検出面の高さで折れて倒れた状態で出土した。方位はN-0°-Eである。本遺構は周囲に比べてやや小高い位置で検出されていることから、畦畔ないしは類似遺構の構造材であることが推定できるが、調査区南西隅で短い距離が検出されたのみであるため、詳細は不明である。

### S K 8 5 5 (第30・31・33~35図、図版29・31~34)

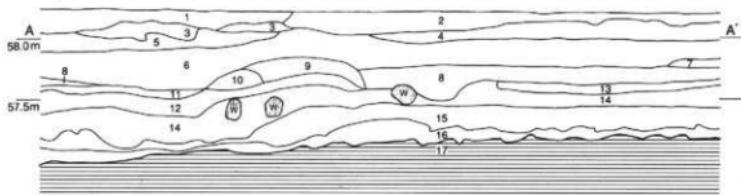
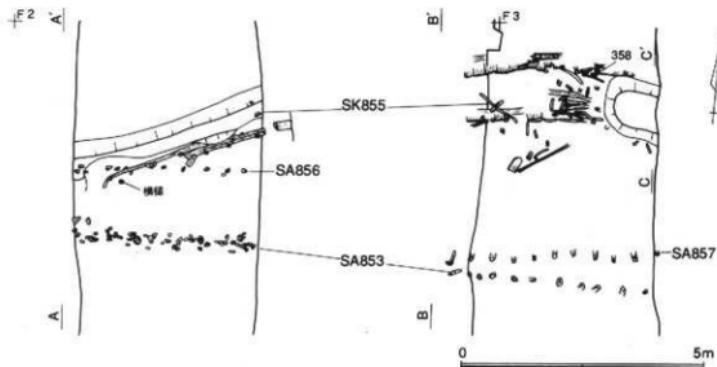
1区G2グリッドから2区G3グリッドにかけて検出した。この畦畔は1区と2区では構造が異なっており、また2区内でも東側と西側とで異なる様相を呈しているので、この3箇所をそれぞれ1区部分・2区西側部分・2区東側部分と別個に分けて記述を進めたい。

1区部分の方位はN-65°-Eである。1列に等間隔(約50~60cm)で打ち込まれた杭列の北側に横木が据えられており、更にその北側には畦畔状の高まりがのこる。この横木は1区東側排水溝で途切れているが、この排水溝の東壁には横木に続くかたちで、更に丸太状の木材が据えられていた。この丸太材は直径15cm前後の断面円形を呈していることやその出土位置等から、2区で出土した柱材(362)の下端部であることが判明した。この1区部分の畦を解体したところ、内部からは特に構築材が出土しなかった。

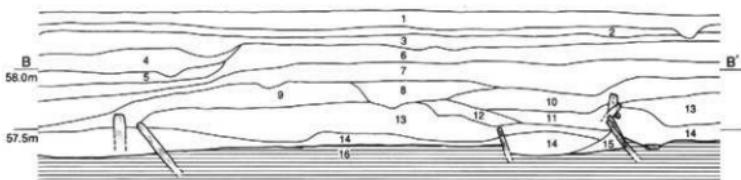
2区西側部分はN-77°-Eの方向で矢板列が2列、1m間隔で構築されており、その間に多数の横木が据えられるという構造であった。矢板列は頂部がXV層上面から約30cm程露出していたが、畦畔状の土の高まりは存在せず、砂層である爛層や砂礫層である爛層によって被覆されていた。2列の矢板列間はやや僅んでおり、爛層を主体とする砂が堆積していた。この砂を除去したところ、横木の一部が露出した。矢板列は南側・北側とともに頂部が南に傾いていた。特に南側の矢板列は、何らかの圧力を受けて南傾したような様相を呈していた。北側の矢板列は列の両端に丸太状の太い杭(366・367)を打ち込んでおり、その間に矢板を密に並べていた。一方南側の矢板列は、矢板の間隔が疎らであり、杭も断面が細めのもの(例えば368・369)が使用されていた。この畦畔に使用されている構築材の樹種はツバラジイ、スダジイ、クリ、ヒノキ、ユズリハが多い。

2区東側部分の方位はN-84°-Wを呈し、1区部分や2区西側部分よりも寧ろSA853やSA857に近い。この箇所では2区西側部分と異なり畦畔の高まりが確認できた。1区の畦畔と比較すると、畦畔頂部の標高はほぼ同じであるものの、規模は異なる。この畦畔を解体したところ、その内部からは畦畔の構築材である横木が何点か出土した。これら横木は畦畔内では南寄りで出土した。

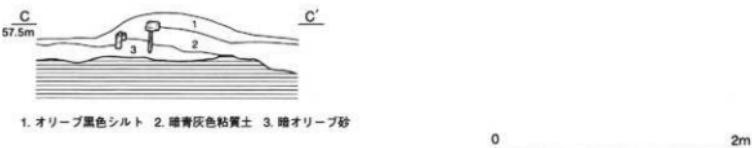
以上の所見をもとに、若干の検討を加えてみたい。2区東側部分の方位が異なる点について、これは本畦畔が地形の制約を受けて方向を転換しているという見方ができるが、調査区が狭いためにこの解釈を立証することはできない。他に2区の西側部分と東側部分の境で屈曲している以外は直線的に築かれていることから、SK855が2時期に分離できる可能性も考えられる。例えば、当初は南西-北東(1区・2区西側)という方位軸の畦畔を一部改修し、新たに北西-南東(2区東側)という方位軸の畦畔



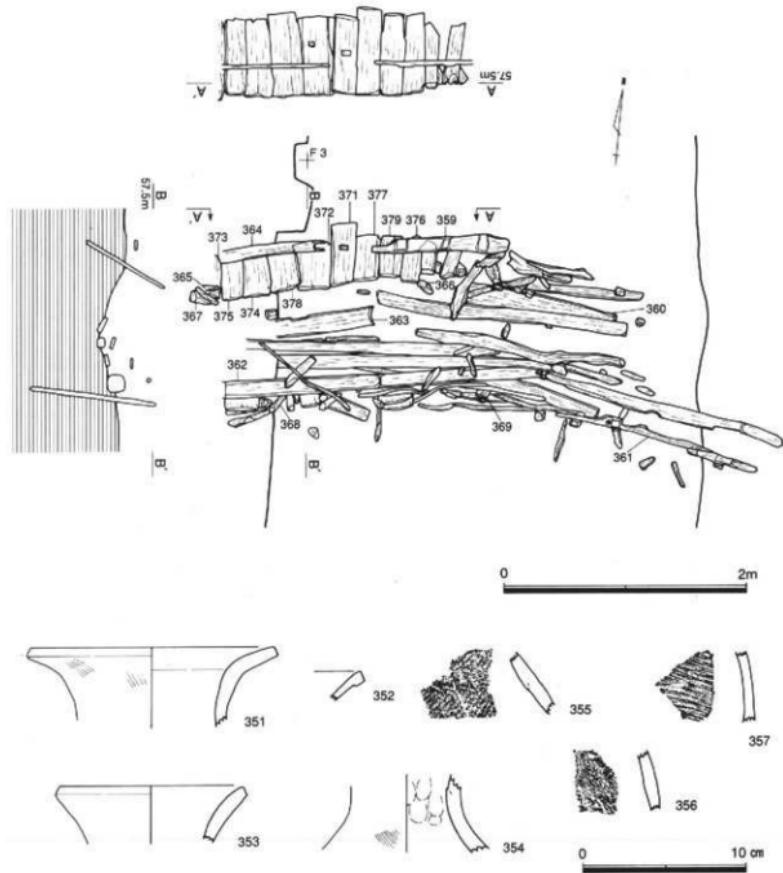
- |              |              |                |                 |        |
|--------------|--------------|----------------|-----------------|--------|
| 1. 青灰色シルト    | 5. 青灰色粗砂     | 9. 灰色砂混じり粘土    | 13. 砂礫          | 17. 砂礫 |
| 2. 青灰色粘土     | 6. 灰色シルト     | 10. 灰色硬混じり粘質砂  | 14. 灰色細砂～粗砂（泥層） |        |
| 3. 暗褐色砂      | 7. 暗灰色砂混じり粘土 | 11. 緩灰色砂混じりシルト | 15. 暗褐色粘土（泥層）   |        |
| 4. 青灰色砂混じり粘土 | 8. 底青色シルト    | 12. 緩灰色砂混じりシルト | 16. 青灰色粘土       |        |



- |                      |                 |                  |                   |
|----------------------|-----------------|------------------|-------------------|
| 1. 青黒色シルト質粘土（V層）     | 5. オリーブ灰色砂質粘土   | 9. オリーブ黒色砂混じり粘土  | 13. 青黒色砂礫（泥層）     |
| 2. 暗オリーブ灰色シルト質粘土（V層） | 6. 底オリーブ砂質粘土    | 10. オリーブ黒色砂混じり粘土 | 14. 青黒色砂（泥層）      |
| 3. 緑灰色砂礫（X層）         | 7. 暗オリーブ砂質シルト   | 11. 砂            | 15. 腐植堆積砂         |
| 4. 灰色砂質粘土            | 8. オリーブ黒色砂混じり粘土 | 12. 腐植堆積砂        | 16. 暗灰色シルト質粘土（V層） |



第30図 SA853・856・857・SK855検出状況

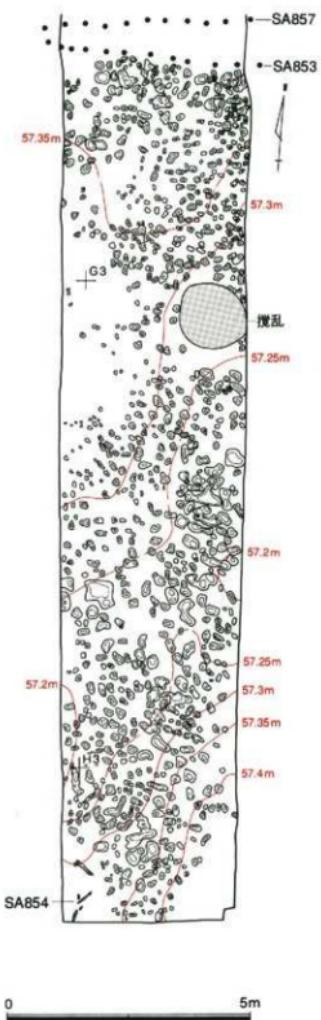


第31図 2区SK855解体状況・出土遺物（弥生～古墳時代1：土器）

をつくりだした（あるいは順序逆か）とする考え方である。

1区部分と2区西側部分とに関しては、方向性が概ね同じである点や、1区東側で2区の横木（362）の端部が出土していること等から、同時期に機能していたものと考える。畦畔の構造が異なる理由として、当初は土質の違いや微地形の影響等により構築方法が異なったためと考えたが、1区と2区とで土質の大きな違いがみられないことから、他の理由によるものと思われる。あるいは元々1区部分と同じ構造だったが、何らかの理由で2区西側部分の畦畔が破壊されてしまい、そのため材木を多用して補強し、再構築したのかもしれない。

矢板列が南傾している点について、土層の堆積状況（第30図B-B'）をみると限りでは、洪水堆積層



第32図 2区耕作痕

と考えられる13層(XIII層)および14層(XIV層)が北から南に向かって堆積していることから、北からの洪水の影響によるものと思われる。もし2区西側部分にも畦畔状の盛土が存在していたと仮定すると、木材を多用して畦畔を補強したこの地点も結局は、この箇所がSK855の中ではもっとも北に位置しているために、最初に洪水の直撃を受けて流されてしまったと推定できるのではないか。以上、どれも推測の域を出ることはないが、いずれにせよ本遺構が機能していた段階で補修・改修等の手が入ったものとみてよいと思われる。

#### S A 8 5 6 (第30図、図版31)

1区G2グリッドで検出した。本遺構はSA853の約1.5m北に位置する。方位はN-86°-Eであり、SK852やSA857と一致する。杭はみかん割り材の先端を尖らせて使用し、40cm間隔で打ち込まれている。杭頂部の標高は57.6m前後であり、第3面を検出した段階では杭の上端から約25cmが地表面に露出していた。本遺構は2区では確認できなかったが、1区で検出した本遺構の方位軸を2区まで延長すると、第30図土層断面B-B'で観察できる堆積状況のうち、ちょうど8層と9層の境付近にその軸線がくる。B-B'の8層～10層はいずれもオリーブ黒色砂疊じり粘土層であるが、8層や10層に比べて9層は特に砂疊が多く混入している。また9層の南端には本遺構と方位軸を同じくするSA857が位置している。このような状況から、9層はそのすぐ北側の砂疊層(13層)を掘り起こしてSA857とSA856の間に土手状に積み上げて形成された層と考えることができ、本遺構とSA857との位置関係も考慮に入れると、ここに大畦畔の存在が推定できる。第30図土層断面A-A'でみられる9層及び10層はSA853とSA856に挟まれた層であるが、このSA853の1区側にはSA857の杭が混在すると思われることから、先述の層はSA857とSA856に挟まれていると考えても良く、幅、高さ、土質いずれもB-B'で確認できる畦畔状の高まりと類似していることからも、この位置に大畦畔が存在していた可能性は高い。以上の所見から導き出される大畦畔は幅約1.5m、高さ20cm程度でN-86°-Eの方向にのび、畦畔の両側に杭列を構築する構造となる。しかし何故2区で本杭列が

検出されなかつたのかは不明である。

#### S A 8 5 7 (第30図、図版31)

2区G3グリッドで検出した。当初はSA853と同一で畦畔を構成するものと考えていたが、杭列の方向性がやや異なることから、別遺構として報告することとした。方位はN-86°-Eであり、SK852やSA856と一致する。本遺構の杭は40cm間隔で打ち込まれており、すべて南傾している。本遺構は1区では確認できなかつたが、SA853の1区側の杭の中に類似しているものが存在することから、実際には1区の方にも延びているとみなしてよい。杭はSA853と同様、みかん割り材を多く使用している。本遺構はSA856の項で記述したとおり、大畦畔の南側杭列の可能性が高い。

#### 耕作痕 (第31図、図版30)

1区及び2区のSA853両側で検出した。2区では南側全域に広がっていたが、1区ではSA853に接する狭域でしか検出されなかつた。この痕跡は平面形が椿円形から二等辺三角形を呈しており、掘り方には砂が充満していた。大きさは個々の痕跡によりばらつきが大きいが、およそ15cm×10cm、深さ5cm程度を測る。田面に対して50°~70°の角度で入刃されていることから、これら耕作痕を鋤跡と判断した(山田1993)。直線部分が踏み込み面で、弧状ないしは山形を呈する部分が掘り起こし部になると思われる。これら痕跡は1区では特に方向性がみられなかつたが、2区では場所によっては踏み込み面が北に向いていることから、掘り起こし作業は概ね南を向いた状態で、南から北に下がりながら進めていったことが想定される。

この耕作痕跡は2区においても疎密が存在する。これを等高線と併せてみたところ、標高の高いところは非常に疎であり、標高の低いところに密に集中している。特にSA854の検出された地点は標高が高く、かつ耕作痕跡があまり検出されていないという状況から、この箇所に畦畔あるいは畦畔に相当する構造物の存在を想定できる。また耕作痕の中には平面規模が6cm×4cm程度で深さが僅か数cmしかないものもある。そのような痕跡はG3グリッド杭南側周辺で顕著にみられる。このことから、掘り起こし作業は第3面よりも上層で実施されたものと想定できる。耕作痕に砂が充填していたことを考え併せると、本遺構は洪水後の水田復旧作業によって造られた可能性が高い。

なおSK855よりも北側ではこのような耕作痕が全く検出されず、XIV層とXV層の層界も明瞭であった。これに対し、SA853より南側ではXV層の上位に若干砂が混入する(XIV層の砂か)状況がみられた。このことから、当時洪水により水田全域に砂が被覆した後、SK855よりも北側は耕作地としては放棄し、SA853よりも南側のみを耕地として利用しようとしたのではないかと考えられる。

## 第3節 遺物

### 土器

土器は小片が少量出土したのみであり、いずれも摩滅が顕著である。ここでは第2面よりも下層で出土した比較的遺存状態の良好な7点を掲載した。351~353は壺の口縁部である。352は端部を折り返す。353は摩滅が著しく調整痕を観察することは不可能であるが、胎土に1mm以上の小礫等を非常に多く含む。354は壺の頸部である。355は壺の肩部である。S字状結節文を伴うLR横位繩文が2段施文される。弥生時代後期から古墳時代前期頃に位置付けられる。356・357は外面にハケが施されるが、破片のため詳細は不明である。以上、351がX層、352~355がXIV層、356・357が第3面から出土した。これらを以て第3面の時期を特定するのは極めて困難であるが、およその年代観としては弥生時代後期から古墳時代前期でよいのではないかと考える。

## 木製品

木製品は杭材を除くとほとんどがSK855から出土しており、今回掲載した遺物も358と370以外は全てSK855の構築材である。

358はSK855の畦畔上面で出土した曲柄平鉗である。クヌギの柵目材で、一部欠損しているものの、ほぼ完形に近い状態であり、残存状態も極めて良い。本体は曲柄を装着するための軸部と、土を耕作するための刃部とからなる。軸部は前面側が曲柄と接するため平坦に削り、緊縛する後面側は弧状に削り出しているため、その断面形は半月形を呈する。軸部の付け根には僅かに緊縛痕と思われる圧痕が見られる。軸部から刃部にかけては明瞭な肩を作り出している。刃部は前面側を浅く削り込み、先端は薄く削り刃をつけてある。通常、曲柄鉗は刃部が使い込まれて短くなっている製品が多く出土するが、本体は軸部に対して刃部がかなり長く残っている。加工痕も残っていることから、あまり使い込まれないうちに欠損し廃棄されたことも考えられる。

359～361は梯子である。畦畔の横木として埋め込まれていた。いずれも1mを越える大型品であることから、高床式倉庫などの建物に使用する梯子と考えられる。359は劣化が激しく上下欠損している。足掛け部分は3段しか残っておらず、段の間隔は30cm強である。360は上部に10.5cmほどの突起部が作り出されている。足掛け部分は4段あり、間隔は30cm前後である。半裁材を使い表皮面側から段を削り出している。上部の突起部はネズミ返しをはめ込むか、建物に固定するためのものと考えられる。361は足掛け部分が5段ほど確認できる。間隔は28～30cm前後である。劣化・損傷が激しく原形を復元できない。

362～365は畦畔の矢板列の間に横木として使われていた。柱(362)はおそらく掘立柱建物(高床式倉庫)に使われたものであろう。ヒノキの丸太材で、残存長は498.8cm、直径は13.6cmを計る。平成7年度調査時に1区東側排水溝の東壁において下端部が検出されていることから(第30図)、実際には推定全長660cm程になると思われる。上部の作り出しは134cmで、この作り出しと梁桁材のホゾ穴とを差し込んで組み合わせたと考えられる。柱の長さから想定すると、添束の構造を持った建物と考えられる。363・364は台輪と思われる木製品である。363は上部に丸く抉り込まれた加工がある。丸木柱に組み合わせたものか。ツブライジの柵目材であることからみかん割りに分割された材から加工されたものと考えられる。ごく一部に手斧による調整痕が見られる。364も同様に上部に方形に切り込まれた加工がある。ほぼ全面に手斧による面調整痕がある。365は有頭棒状木製品だが、上端部が一部欠損している。イヌマキの枝部分を使って作られている。上部に削り込まれた加工がある。垂木の一部と考えられる。

366～369は畦畔に打ち込まれていた杭である。畦畔に使われていた杭材は広葉樹と針葉樹が混在し(イヌマキ・スグロイ等)、芯持材であったり角材のものもあった。いずれも先端部分を削って尖らせただけのものである。

370はSK852の杭として使用されていた木製品である。樹種はイヌマキ材で、建築材からの転用品と思われる。断面形状は長方形の角杭で、先端を二次加工により尖らせている。四面全体に規則的な手斧痕が残る。四面を面調整しているという丁寧な加工であることから、柱として使われていたものを転用したと思われる。

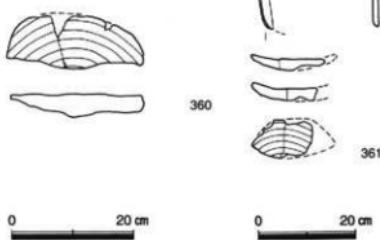
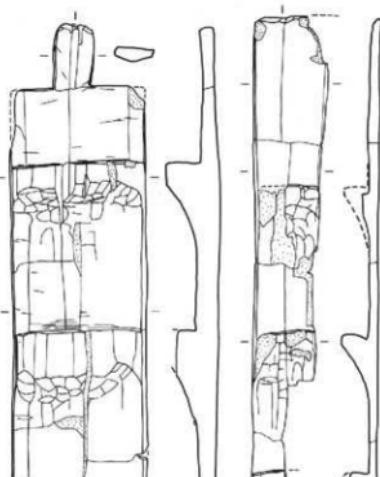
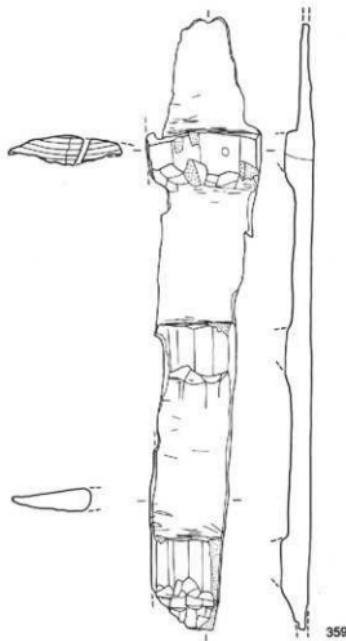
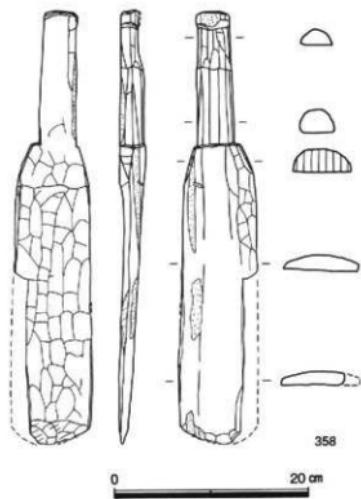
371～379は畦畔の矢板として使われていた木製品である。やはり建築材からの転用品と思われるが、幅が20cm前後とほぼ似通っていることから、もともと屋根材や檜板材として使われていた可能性が高い。すべてヒノキの板目材で長さは73～81cmである。371・372はほぼ中央に6～7cm角のホゾ穴がある。下端部は古い切断痕であるが、上端部に残る刃物痕は転用時に切断されたときのものであろう。371の左側面の調整痕は檜板同士を組み合わせる為に意図的に薄く加工したものである。372は両面に

手斧による面調整痕があるが、部分的には剖面を残したまま壁板として使ったと考えられる。373はホゾ穴の位置が上部にあることから屋根板材と考えられる。上部は古い切断痕で、下部は転用時の切断であろう。374にも上部に加工の痕が見られる。同じく上部が古い切断痕で、下部は転用時の切断であろう。375～379はホゾ穴を持たない。いずれも実測図の下部が古い切断痕で、上部は転用時に切断された新しい切断痕を持つ。やはり表裏に手斧による面調整痕があるが、大部分は剖面のままが多い。375の左側面にある穴は楔痕であろうか。

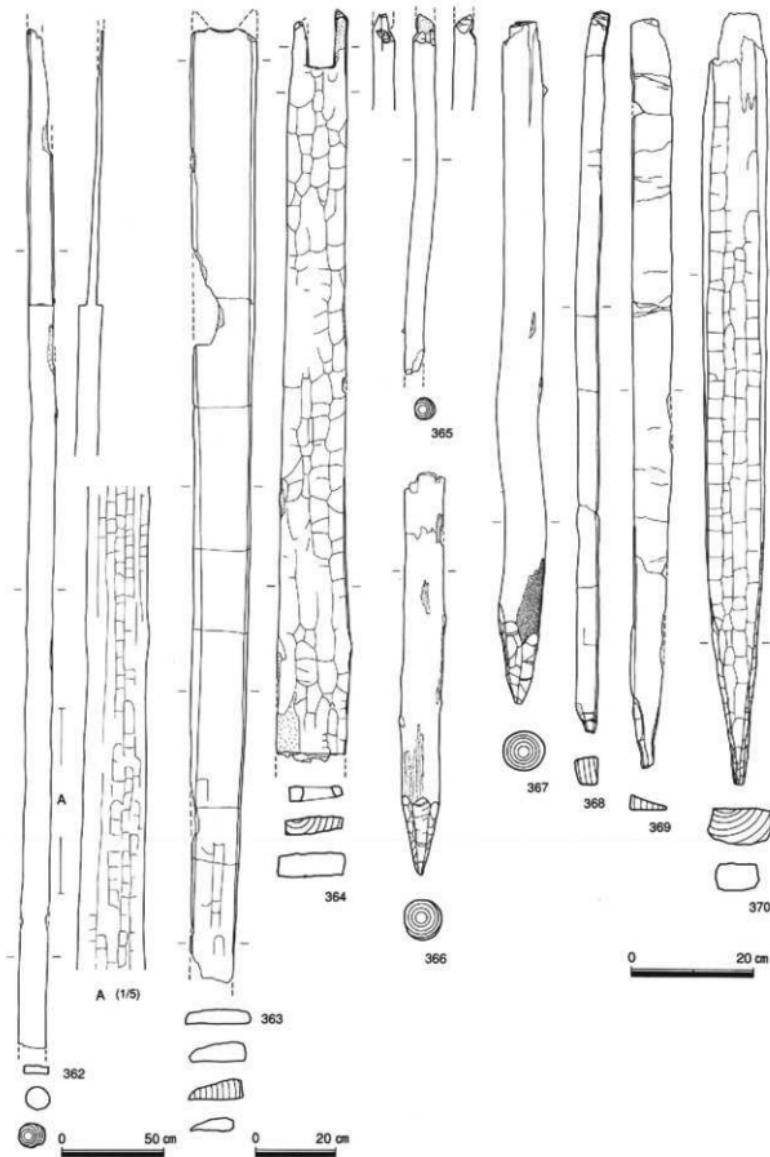
以上、SK855から出土した木製品は、そのほとんどが畦畔の構築材として転用されたものである。特に目立って多いのは、高床式倉庫（掘立柱建物）の廃材と思われる、柱・台輪・屋根板・壁板材・梯子等の部材である。しかし出土した建物の構築材は、とても建物1棟分には足りない量である。一方、農具（358）は畦畔の構築材とは考えにくいことから、おそらく水田の利用されていた年代により近い時期の製品と考えられる。

#### ＜第6章 参考・引用文献＞

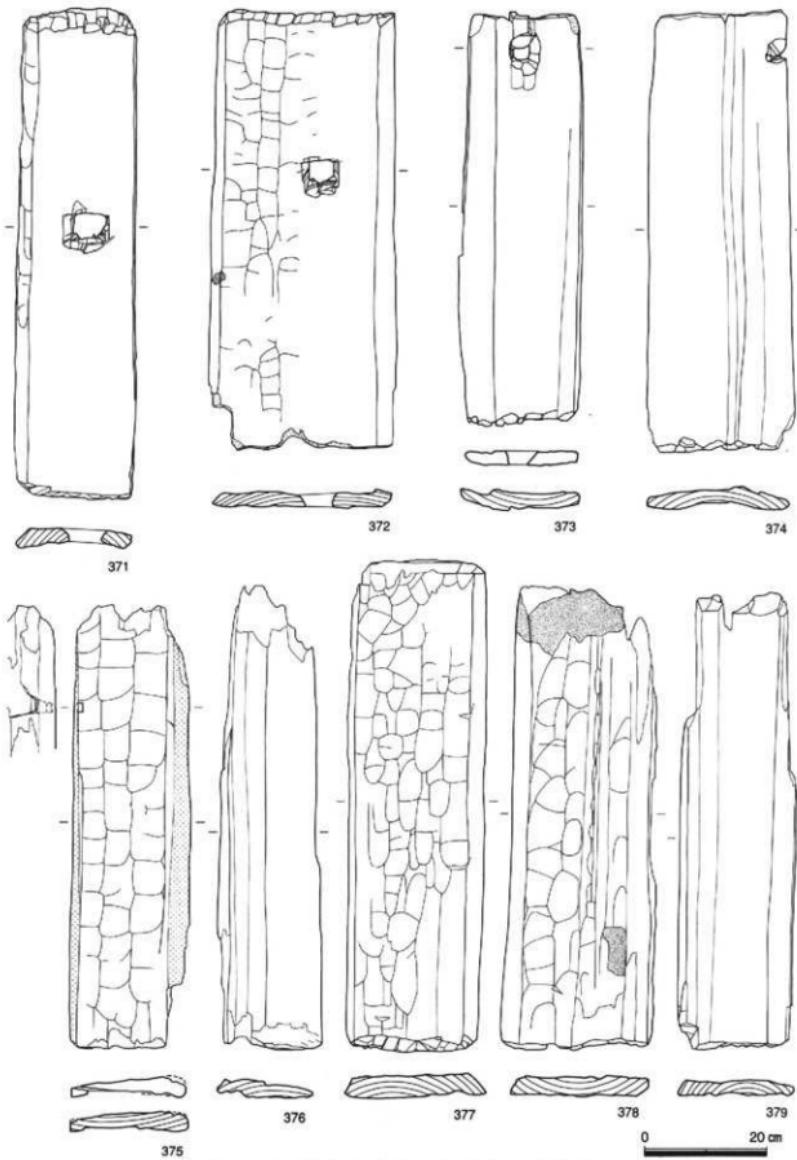
- ・（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996 「瀬名遺跡V（遺物編II）」
- ・奈良国立文化財研究所 1993 「木器集成図録 近畿原始編」
- ・江浦 洋 1992 「水田面に残る足跡と農耕具痕－池島・福万寺遺跡における若干の事例－」  
『大阪文化財研究』20周年記念増刊号 （財）大阪文化財センター
- ・山田成洋 1993 「水田面で観察できるもの－足跡・耕作痕・種株痕－」  
『研究紀要IV 水田跡調査の方法と研究』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所



第33図 出土遺物（弥生～古墳時代2：木製品）



第34図 出土遺物（弥生～古墳時代3：木製品）



第35図 出土遺物（弥生～古墳時代4：木製品）

第12表 弥生～古墳時代土器観察表

掲載番号	団版番号	種類	出土地点	法縦(cm)	形態・手法の特徴	色調 粘土	残存率	備考
351	32	盃	2区 G3 X層	口径(14.9)	口縁部外反し、口唇部面取り。外面一部にハケが残る他の為詳細不明。	外:10YR7/3 にぶい黄橙 内:5YR7/5 棕 3mm以下小穢多量含有、 1.5mm白色粒子含有	口縁部1/8	
352	32	盃	2区 G3 基層		口縁部を外間に折り返す。折り返し部外面指痕が残る他の為詳細不明。	内外:7.5YR7/4 にぶい棕 1.5mm以下小穢多量含有、 1.5mm白色粒子含有	口縁部1/11	
353	32	盃	2区 G2 基層	口径(11.2)	口縁部は直線的に開き、口唇部面取り。摩滅の為詳細不明。	外:7.5YR7/6 棕 内:10YR8/2 灰白 3mm以下小穢多量含有	口縁部1/8	
354	32	盃	2区 G3 基層		肩部外面ナナメハケ。頸部内部指痕底、輪縁み縫が明瞭に残る。	外:5YR7/4 にぶい棕 内:N4/ 灰 2mm以下小穢多量含有、 0.5mm白色粒子微量含有	頸部1/4	頸部径(6.6cm)
355	32	盃	2区 E3 基層		外面S字状結節文を伴うL横柱陶文が2段施文。	外:7.5YR2/2 明褐灰 内:7.5YR8/1 灰白 2mm以下小穢多量含有、 1mm以下長石含有	肩部破片	
356	32	盃?	2区 G3 X層		外面ナナメハケ。	外:10YR7/2 にぶい黄橙 内:2.5Y7/2 灰黃 1.5mm以下小穢多量含有	剥離破片	
357	32	盃?	2区 G3 X層		外面ナナメハケ。	内外:10YR4/1 褐灰 1mm以下小穢・0.5mm以下白色石英含有	肩部破片	

第13表 弥生～古墳時代木製品一覧表

掲載番号	団版番号	種類	出土地点			法縦(cm)		樹種	木取り	登録番号	備考
			区	GRID	遺構	長さ	幅				
358	33	平板	2	G3	SKB55	44.5	8.0	2.6	クヌギ	板目	W93
359	33	梯子	2	G3	SKB55	100.7	19.0	5.0	スダジイ	板目	W125
360	33	梯子	2	G3	SKB55	142.2	23.0	9.0	ツブラジイ	板目	W132
361	33	梯子	2	G3	SKB55	190.5	15.4	7.9	ツブラジイ	板目	W157
362	33	柱	2	G3	SKB55	498.8	13.6	13.5	ヒノキ	芯持ち	W178
363	33	台輪?	2	G3	SKB55	238.0	16.5	5.2	ツブラジイ	板目	W196
364	34	台輪?	2	G3	SKB55	123.4	11.8	4.2	イヌマキ	板目	W184
365	34	垂木?	2	G2	SKB55	59.2	3.4	3.7	イヌマキ	芯持ち	W195 有頭跡
366	34	杭	2	G3	SKB55	66.2	6.4	6.8	イヌマキ	芯持ち	W159
367	34	杭	2	G3	SKB55	112.2	6.9	6.6	イヌマキ	芯持ち	W193
368	34	机	2	G3	SKB55	118.6	4.3	4.6	スダジイ	板目	W181
369	34	机	2	G3	SKB55	123.1	7.1	2.5	ツブラジイ	板目	W171
370	34	机	2	G3	SKB52	126.8	11.0	6.6	イヌマキ	板目	W111
371	34	板材	2	G3	SKB55	81.0	20.0	3.3	ヒノキ	板目	W147
372	34	板材	2	G3	SKB55	72.5	30.9	2.9	ヒノキ	板目	W148
373	34	板材	2	G3	SKB55	68.4	20.4	3.6	ヒノキ	板目	W194
374	34	板材	2	G3	SKB55	73.0	24.5	4.0	ヒノキ	板目	W150
375	34	板材	2	G3	SKB55	73.2	19.7	3.5	ヒノキ	板目	W151
376	34	板材	2	G3	SKB55	76.5	17.5	3.2	ヒノキ	板目	W144
377	34	板材	2	G3	SKB55	81.1	22.8	4.1	ヒノキ	板目	W146
378	34	板材	2	G3	SKB55	76.5	25.3	3.6	ヒノキ	板目	W149
379	34	板材	2	G3	SKB55	75.4	19.4	2.7	ヒノキ	板目	W146

# 第7章 まとめ

## 第1節 中世

### 1. 遺構について

今回検出した中世遺構群のうち、SH901は2間×2間の掘立柱建物跡として報告したが、本来は更に大きな建物であった可能性もある。SH903とSH904に関しては更に東側へ柱穴が続く可能性があるが、両者は近接しているため同時存在は考えにくい。またSE501・SE506の井戸枠とSH901・SH902・SH903・SH904は概ね方位を同じくしていることから、一定の規則性を有して建物が配置されたことが伺える。

2基の井戸について、SE501から出土した木製品は曲物・漆椀・箸状木製品など生活雑器的なものであるが、SE506から出土したのは塔婆といった祭祀的な要素を持つ木製品である。このことから、隣り合って検出した2基の井戸は、前者は日常的に実際使われていた井戸であり、後者は雄井戸と言われるような性格を持った井戸の可能性がある。しかし両井戸から出土した土器には明らかに時間差がみとめられることから、おそらく最初にSE506が構築されるが、やがて井戸側を破壊して埋め立て、あらためてその南側にSE501を構築したのではないかと思われる。

以上の所見から、矢崎遺跡の中世集落は少なくとも2段階の変遷を辿ることができる。更に時間差があると考えられる遺構でもほぼ同じ方位を示すことから、集落が中途で断続することなく、集落内に働く規制は継続していたとみることができる。

溝状遺構について、SD133をはじめ大半の遺構は幅が狭く且つ浅いものであった。実際にはもう少し深かったであろうが、その規模や構造からSD166とSD204以外は排水溝あるいは排水溝相当施設と考えられる。特にSD133とSD189はほぼ同じ方向性と構造を有している点や、F3グリッドにおいてこの両溝に挟まれる形で窪地を検出したことからも、排水溝の可能性が高いものと判断した。また、SD189はG3グリッド杭付近で一旦屈曲しているが、その方向性と2基の井戸の配置に相関関係がみられ、井戸（特にSE506）とSD189に同時期性を考えることができる。一方でSD204は屋敷や集落を区画する堀ないしは区画溝の可能性が高いが、今回の調査では検出範囲が極めて限られているため、詳細を明らかにすることはできなかった。

### 2. 遺物について

今回の報告に際して、出土中世土器の計数調査を実施し、石成遺跡と比較検討を試みた。その結果は第4章第4節に掲載したとおりだが、土師質土器（特にかわらけ）の出土量が極めて少ないと特徴が看取された。かわらけは所謂祭祀や宴饗という要素で捉えられることが多く、矢崎遺跡ではそのような要素（宴饗？）が少なかった可能性を指摘できる。勿論、出土の有無がそのまま当時の使用状況を示すものではないが、ほぼ同時代・同地域の石成遺跡との量的差異に何らかの意味があるのは間違いない。

中世土器のうち舶載陶磁器で両遺跡を比較すると、全土器数に占める舶載陶磁器の比率はほぼ同じであることに気付く。しかしその一方で単位面積あたりの遺物の出土量を比較すると、矢崎遺跡は石成遺跡に比べて1/3と少ない。以上のことから、集落としての両遺跡の性格は類似することが想定されるものの、矢崎遺跡が集落の縁辺部に位置しているかの如き印象を受ける。

今回の調査では伊勢型鍋が包含層とSE501から出土している。伊勢型鍋について伊藤裕偉氏は、その分布を「商品流通」という一面ではなく、伊勢神宮と南伊勢系土器工人との関係、更には神宮権柄御の活動との係わりの中で想定している（伊藤1992）。この見解に従うなら、矢崎遺跡や同じく伊勢型鍋が出土した石成遺跡が大津御厨の関連遺跡であるというひとつの証左になろう。また、SE501から白磁四

耳壺の破片が出土したが、石成遺跡でも同様に出土しており、矢崎遺跡や石成遺跡の地に相応の階級層が存在した可能性を指摘できる。

包含層から出土した山茶碗の分布をみると、SD204の南側やF 3 グリッドに存在する窓地など、建物跡の疎な箇所に集中している。集落内（あるいは屋敷地内）における廃棄場として捉えられよう。

### 3. 集落の変遷

各遺構の重複関係を主たる要素として変遷を考えたい。柱穴群の大半はSD189とSD491を結んだ線よりも東側に位置しているが、中にはSH901やSH902のようにSD189と重複する遺構も存在し、またSD189の西側で検出された柱穴もある。しかしこれら遺構もほとんどはSD195の南側で収まってしまう。このことから、SD189が建物の配置に関連する段階と、SD195が関連する段階を想定できる。先述したとおり、SE506とSD189は同時期の可能性が高く、SE506の時期は矢崎遺跡では古い段階にあたることから、非常に大雑把ではあるが、遺構の変遷は前段階SD189・SD491・SE506→後段階SD195・SH901・SH902と考えることができる。SD133に関してはSD189が廃絶した段階で機能するものと考えた方が無難であり、後段階にあてはめたい。SE501・SD204の位置付けが困難であるが、おそらく後段階はSE501かSD204のどちらかによって示される年代に位置付けられるのではないかと思料する。SH903とSH904に関しては、両者が別段階のものである可能性が高いが、どの段階に属するかは不明である。あるいは3段階の変遷を考える必要があるかもしれないが、調査面積が狭く出土遺物も多くない状況のため、精緻な変遷を論ずるのは不可能である。しかし、大きな流れとして当初I 2～I 3グリッドを中心とした地点に建物が配置され、それがやがて西へ広がると考えられないだろうか。

出土遺物から各遺構の年代を特定すると、SE501は12世紀後半、SE506はSE501より古く（11世紀末頃か）、SD204は13世紀中頃に位置付けられる。柱穴については第4章第2節でも記述したとおり、11世紀末から13世紀代のものまで存在する。包含層から出土した遺物をみると、矢崎遺跡は石成遺跡にやや後続するものと考えられる。以上から、本遺跡は主に12世紀から13世紀前半にかけて営まれた集落と結論したい。

周辺遺跡群との関連について、矢崎遺跡の北東に位置する落合遺跡では12世紀中葉から13世紀後半に位置付けられる大型の溝が確認されているが、調査者はこれを区画溝としてその西側に水田が、そして東側に建物跡が存在する可能性を予察している。また山王前遺跡でも掘立柱建物を中心とした中世の遺構が検出されているとのことである。矢崎遺跡でも柱穴が密集しているのは調査区内の東寄りであることから、スモウダン遺跡の所在する丘陵の縁辺部に中世前期の集落が広がることが考えられる。石成遺跡は11世紀末から13世紀前半に営まれていたと考えられており、落合遺跡や矢崎遺跡はこれにやや後続する集落と位置付けられる。居倉遺跡は10世紀第1四半期に成立し、一時衰退したとされるが、平安時代末から鎌倉時代にかけて再度集落が営まれている。

いずれの遺跡も小範囲の調査であり集落全貌の解明には程遠いが、これまでの成果から大津谷川流域における中世前期の集落の変遷を読みとることはできないだろうか。その為には検出遺構の検討のみならず、出土遺物の詳細な調査も非常に重要である。その意味で今回試みた中世土器の全点計数による他遺跡との比較検討は、ある一定の地域の在り方そのものを明確にする有効な方法ではないかと考える。

## 第2節 古墳時代

古墳時代の遺物包含層である埴層からは、中期中葉の上部器が多数出土した。この埴層に被覆されたいた集落関連の遺構群は、遺構の覆土が埴層に酷似する点を考慮すると、おそらく包含層とは同じか

若干古い時期に位置付けられるだろう。集落と特定できる遺構としては多数の柱穴群と堅穴住居跡1軒があるが、堅穴住居跡も遺存状況が極めて悪く、また柱穴群も堅穴住居ないしは掘立柱建物と判断できる組列が確認できなかったため、集落の構造について検討するのは困難を伴う。しかし多数の柱穴が密集した状態で検出されたことから、ある一定の期間は集落として存続していたものと推定できる。また遺構が疎となるTP2付近で局所的に遺物が出土していることや、出土した多くの土師器が高坏であるという事実は、当該地における祭祀の可能性を考える必要があるだろう。調査面積が狭いために断定はできないが、TP2周辺は集落内における広場的空間であったと考えられる。TP2よりも北側では柱穴群が検出されたが、この方面で検出される柱穴は小型のものが多く、TP2南側の柱穴とは様相を異にする。おそらく広場を挟んで北と南とでは建設された建物の種類が異なっていたのではないだろうか。調査区南端で検出された流路跡からは祭祀を強く印象づけるような遺物の出土はみられず、出土土器は大半が覆土混入品であるが、河川の規模が小さくないことや遺物に時期幅がみられることから、その存続は比較的長期にわたったと考えられる。なお偶然かもしれないが、第1面・第2面共に柱穴の密集する地点がほぼ同じであることから、地形的条件あるいは土地利用形態が古墳時代から中世まで何らかの形で継続していたかもしれない。

本遺跡から出土した土師器については、器台や瓶、あるいは中期の坏類の明確な出土が認められないという特徴を挙げることができる。良好な一括資料に恵まれず、出土器種も偏在しているためセット関係を検討するのが困難であり、また「出土」という偶然性を承知した上でも、あるひとつの器種が全く欠落しているという状況は看過できない。これは遺跡の性格をあらわすものというよりも、遺跡の時期を示すものと考えた。これを踏まえた上で、矢崎遺跡出土土師器について高坏を中心に検討する。

矢崎遺跡周辺における古墳時代中期土器編年の研究は、山口和夫氏（山口1987）、松井一明氏（松井1995）、山本恵一氏（山本1995）をはじめ多くの研究者によって進められてきている。また足立順司氏は、瀬名遺跡・長崎遺跡・川合遺跡出土資料を用いて、当該期の土器編年を試みている（足立1996）。これら諸学の成果に導かれながら本遺跡出土土師器を概観すると、脚柱部上半が中膨らみして裾部が広がる高坏の類例を磐田市見性寺貝塚や清水市石川遺跡、静岡市川合遺跡SD6701B38一括、静岡市瀬名遺跡2・3区9層出土資料等に求めることができる。これらは山口氏の赤焼土器編年Ⅶ期3段階、松井氏見性寺Ⅱ-1式、足立氏川合遺跡6期にそれぞれ相当するが、本遺跡から出土した高坏はこれよりもやや後続する形態が主体と考えた。また山本氏によると、TK73段階には脚部がハの字状に開く高坏が出現することであり、大仁町段遺跡第5号住居跡出土資料を当該期の資料にあてているが、本遺跡出土資料においても所謂ハの字脚高坏が存在する。これら形態の高坏が出土していることや器台の欠落等から、本遺跡がTK73段階で盛期を迎えるものとみなすことができる。

本遺跡の土師器の下限について、外面に粗いハケが施される長胴の壺がTK208以降に位置付けられる一方で、TK23段階（山口氏の赤焼編年Ⅷ期3段階）に位置付けられる焼津市宮之腰遺跡SX01出土資料にみられるような半球形の体部を持つ壺が欠落しており、矮小な脚部を持つ高坏の出土量も少ない。山本氏はTK216～TK208段階において坏類が爆発的に増加するとしており、また松井氏も丸底の内溝口縁壺の登場をTK208段階に置いている。TK208段階の資料としては浅羽町古新田遺跡で良好な資料が提示されており、矢崎遺跡の土師器もこれに類似するものが存在するが、坏類が全く欠落すること等から、本遺跡はTK208段階内で終焉を迎えるものと思われる。

これら所見から、古墳時代前期末から中期初頭に位置付けられる土師器が流路跡等で少量出土しているものの、矢崎遺跡の盛期はTK73～TK208段階であり、TK208段階の中で衰退したのではないかと結論した。その後古墳時代後期以降の資料も散見されるが、まとまった量の出土がみられないため、集落自体は既に廃絶し、流路が残る程度ではなかつたかと考えられる。以上、従来の編年にやや強引に当て

はめた嫌いもあるが、矢崎遺跡出土土師器について、他遺跡から出土した資料との比較検討の中で、その編年的位置付けを試みた。

### 第3節 弥生時代から古墳時代

第3面で検出した遺構の変遷について検討する。SK852は第3面よりも新しい段階の遺構だが、遺構に明確に伴う遺物の出土がみられなかったため時期は不明である。SK855に関しては、畦畔がF3グリッド杭から約2.5m東の地点で屈曲することや、場所によって構造が異なることから、畦畔の修繕あるいはつくりかえがあったものと考えられる。SA856とSA857は、両杭列の間に盛土をして幅1.5mの大畦畔をなすものと考える。このSA856・SA857とSK855は近接（一部は重複）しており、共に概ね東西方向に延びることから同時存在の可能性は低い。堆積状況からはSA856とSA857で構成される大畦畔の盛土がSK855よりも上層となるため、SK855が古いことになる。またSA856・SA857とSA853も同時存在の可能性は低いが、両者の新旧関係は不明瞭である。遺跡全体では、畦畔や杭列が北から南へ移動するという様相が看取できることから、ここではとりあえずSA853を新しい段階に位置付けておきたい。調査区南側に広がっている耕作痕に関してはSA853か、もしくはSK852が同時期の遺構になると考えられるが、ここでは検出状況等からSA853と同時期でおさえておくことにする。これら所見や設定をもとに、以下のような変遷案を提示してみたい。

第1段階 SK855を畦畔として水田耕作を行っていた段階。

第2段階 洪水が発生し、北側から南側に向かって砂（XIV層）や礫（XV層）が堆積した段階。この時に、SK855の2区西側の畦畔盛土がとばされたものと思われる。

第3段階 SA856とSA857を大畦畔の両側とし、その北側（ちょうどSK855の位置）の土砂を盛土して畦畔を構築した段階。

第4段階 SA853を構築し、これより南側を耕起した段階。

第5段階 SK852を構築した段階。

以上のうち、第1段階内でSK855の方向を転換するための修繕か、あるいは2区西側部分を材木で補強しなければならないような事態（洪水か？）が起きていた可能性が充分に考えられる。また調査区南側で検出した耕作痕を観察すると、ひとつひとつの痕跡は明瞭に遺存していることから、耕起作業後に継続して耕作を繰り返すという様相が伺えず、第4段階から第5段階へはさほど時間が経過せずに移行したものと推測できる。しかし第3段階から第4段階への移行と、第4段階から第5段階への移行は洪水等の災害が契機と推測されるものの、今回の調査所見だけでは材料不足の感が否めない。

上記の変遷は現段階では仮説にすぎない。この立証は時期の特定も含め、今後の周辺遺跡の調査結果に期待したい。

#### <第7章 参考・引用文献>

- ・足立順司 1996 「古墳時代中期の土器編年」『川合遺跡 遺物編1』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
- ・伊藤裕作 1992 「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」『研究紀要』第1号 三重県埋蔵文化財センター
- ・松井一明 1995 「遺物について」『坂尻遺跡—遺物・総括編—』袋井市教育委員会
- ・山口和夫 1987 「志太地域の土器（1）—弥生・古墳時代編（1）—」『焼津市歴史民俗資料館年報』1
- ・山本恵一 1999 「駿河の古墳時代中期の土器—東駿河を中心にして—」『東国土器研究』第5号

図 版



1. 遺跡周辺環境



2. 遺跡遠景（北から）

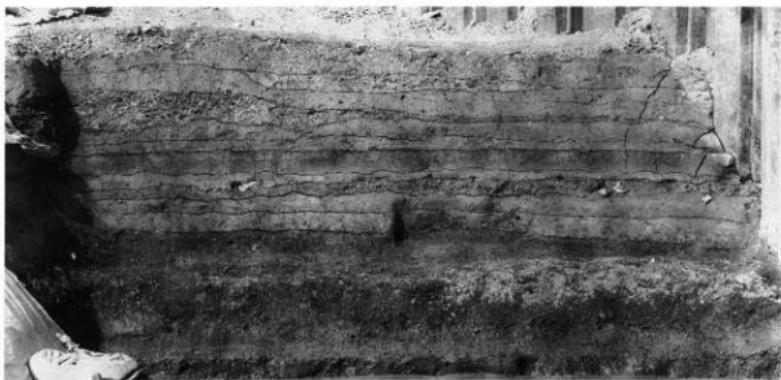
図版 2



1. 1区調査前状況（南東から）



2. 2区調査前状況（南東から）



1. 2区北壁土層堆積状況（南から）



2. 1区南端の近代河道跡（南東から）



3. 1区TP4付近の近代擾乱（北から）

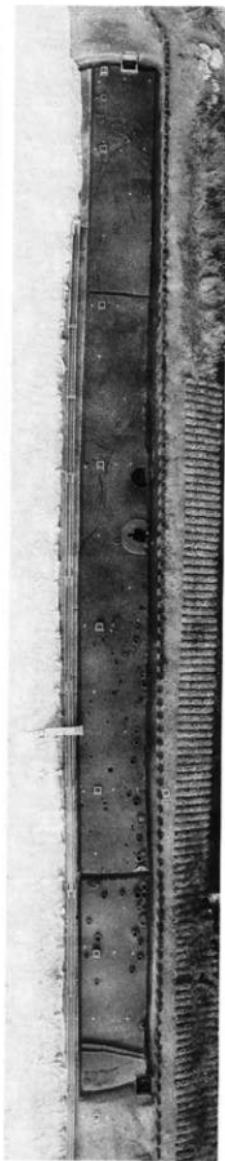
図版 4



1. 1区第1面北側全景（南東から）



2. 1区第1面南側全景（北東から）



3. 2区第1面全景



1. 1区SH901 (東から)



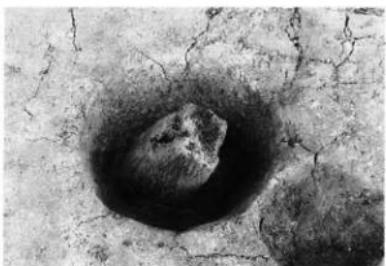
2. 1区SP119 (南東から)



3. 1区SP111 (北東から)



4. 2区SP541 (東から)



5. 2区SP537 (12、西から)

図版 6



1. 2区SE501 (南から)



2. 2区SE501 挖り方土層堆積状況 (南から)

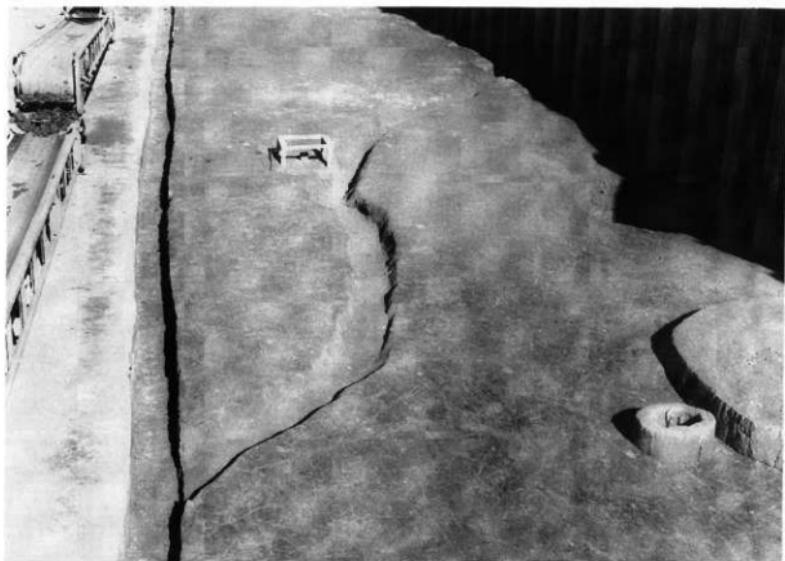


1. 2区SE506 (南から)



2. 2区SE506 井戸枠除去後状況 (南から)

図版 8



1. 2区SD189 (南から)



2. 1区SD189 (南西から)



1. 2区 SD133 (南から)

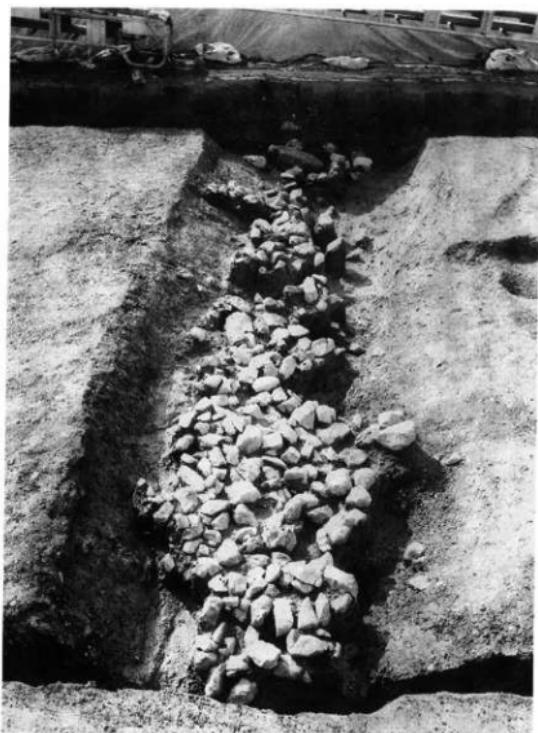


2. 1区 SD166 (東から)

図版 10



1. 1区 SD195  
(東から)



2. 1区 SD204 (東から)



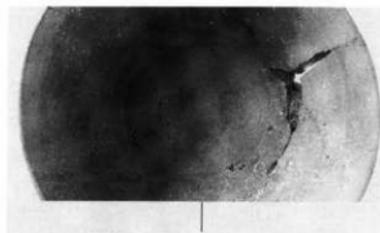
3. SD204 遺物出土状況 (57、北東から)



4. SD204 遺物出土状況 (58、北東から)



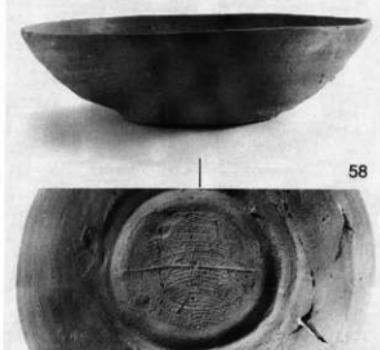
1



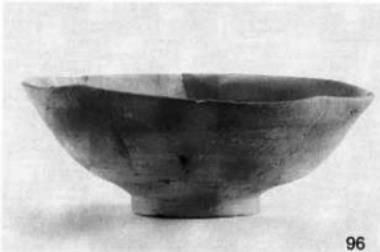
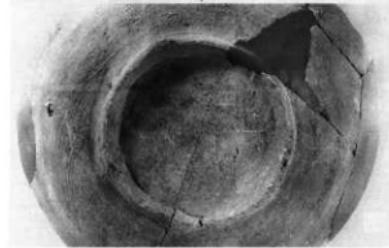
58



57



58



96

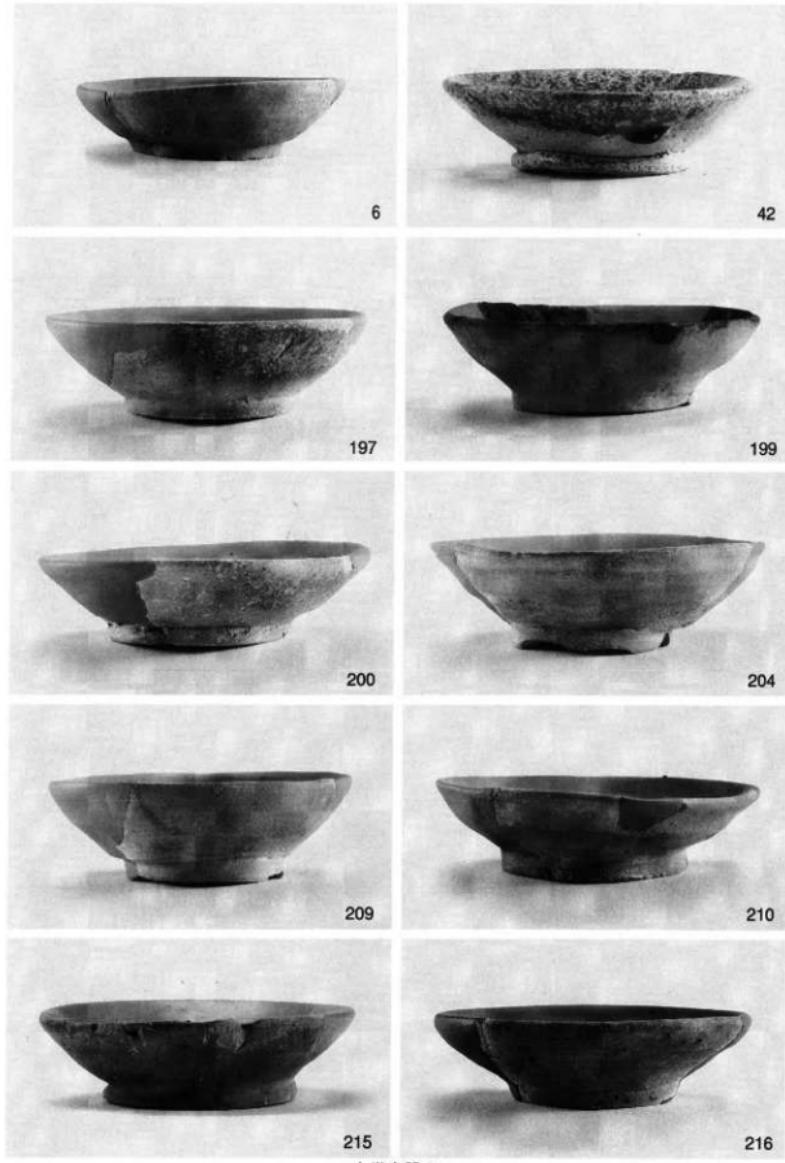


155



156

図版 12



中世土器 2



16



17



220



222



224



227



228



232



236



239

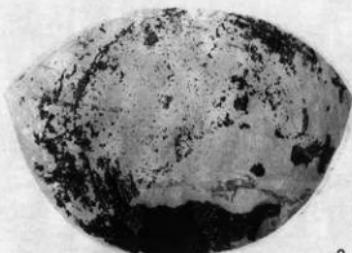
図版 14



240



242



2



19



82

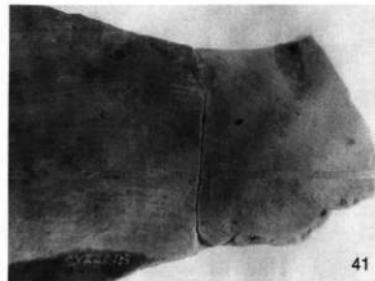


218



168

図版 15



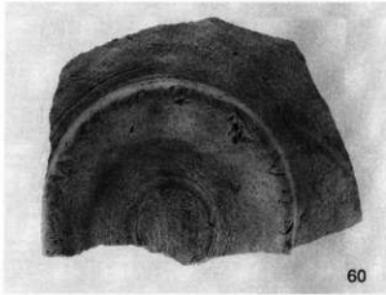
41



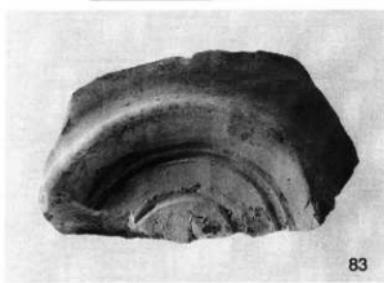
66



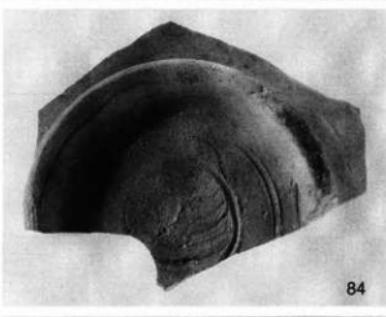
176



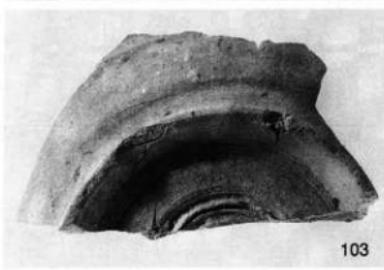
60



83



84



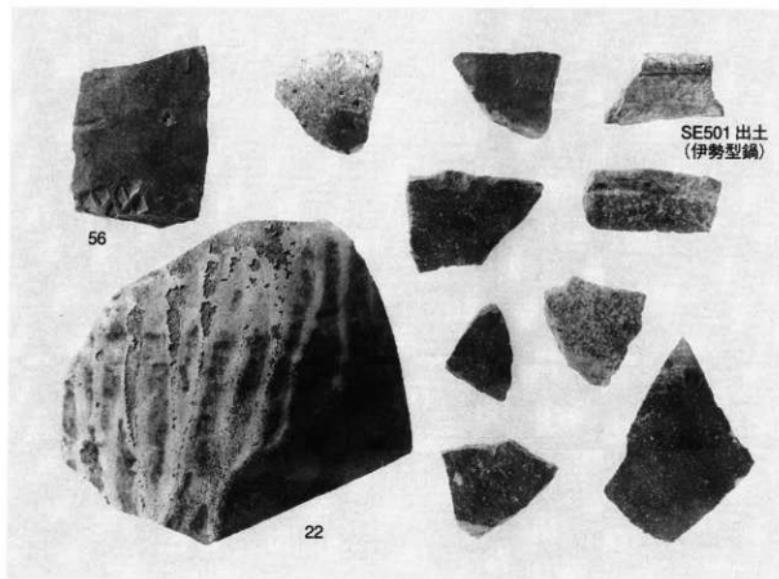
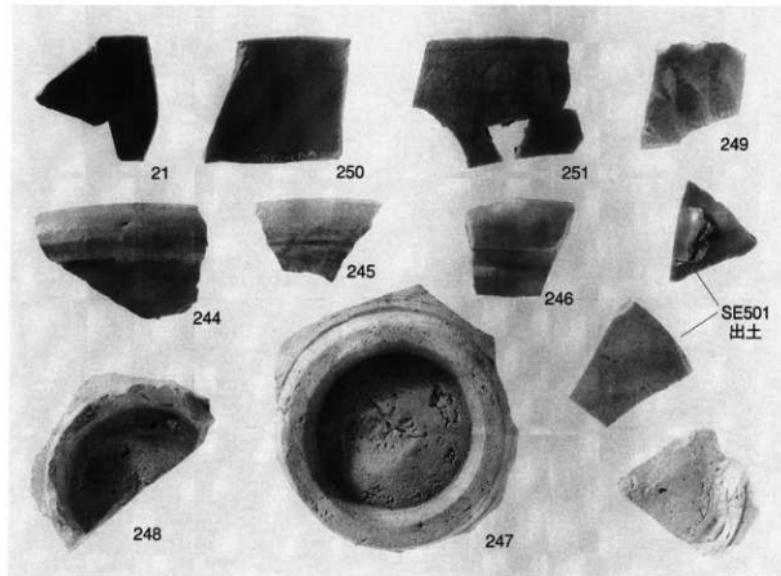
103



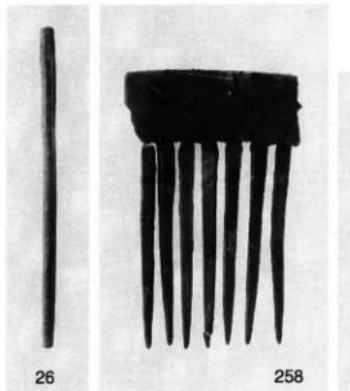
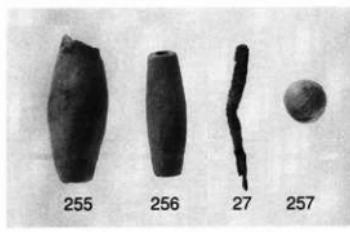
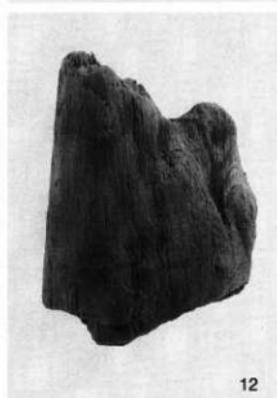
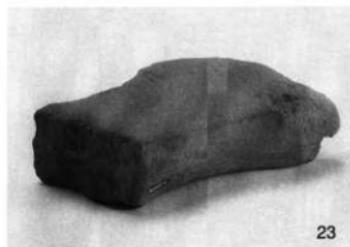
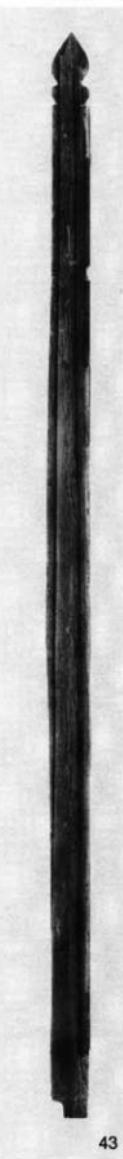
171

中世土器 5

図版 16

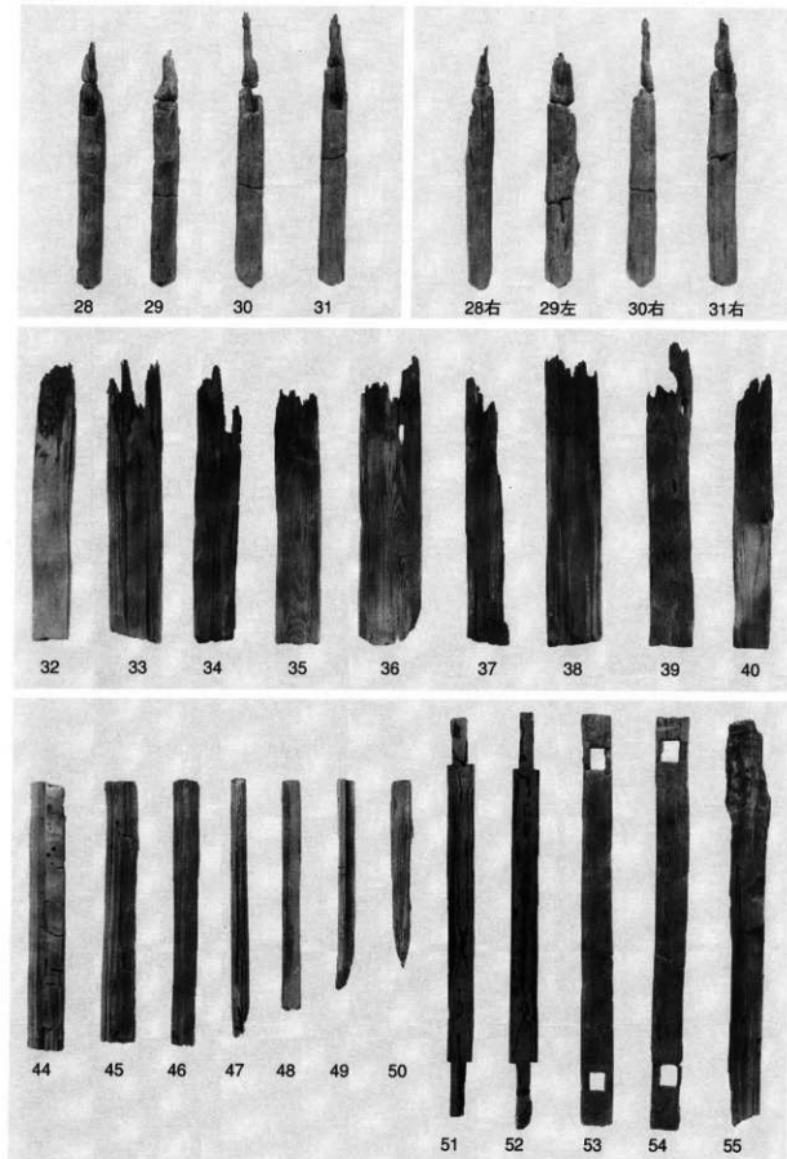


中世土器 6



中世土器 7・木製品 1・石製品・土製品・金属製品

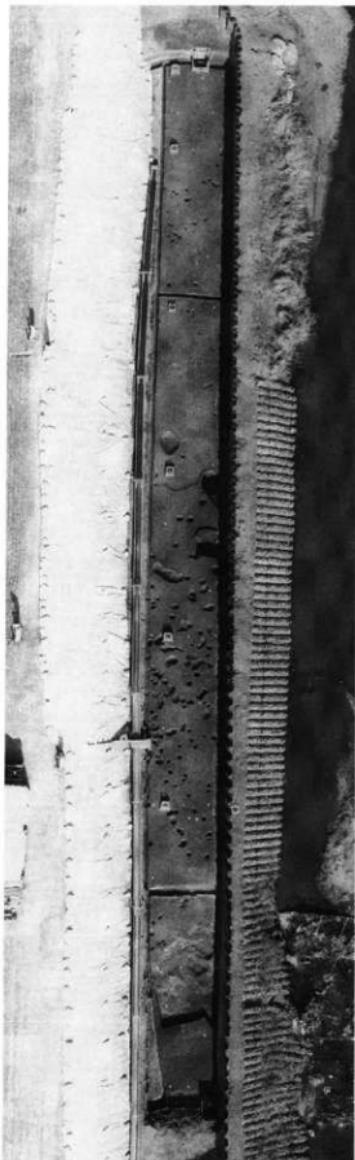
図版 18



中世木製品 2

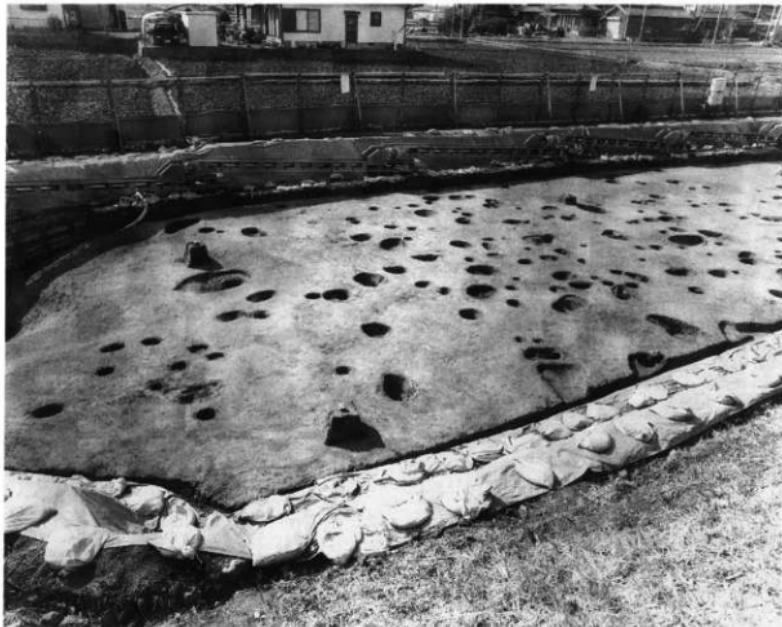


1. 1区第2面全景



2. 2区第2面全景

図版 20



1. 1区第2面柱穴群検出状況（南東から）



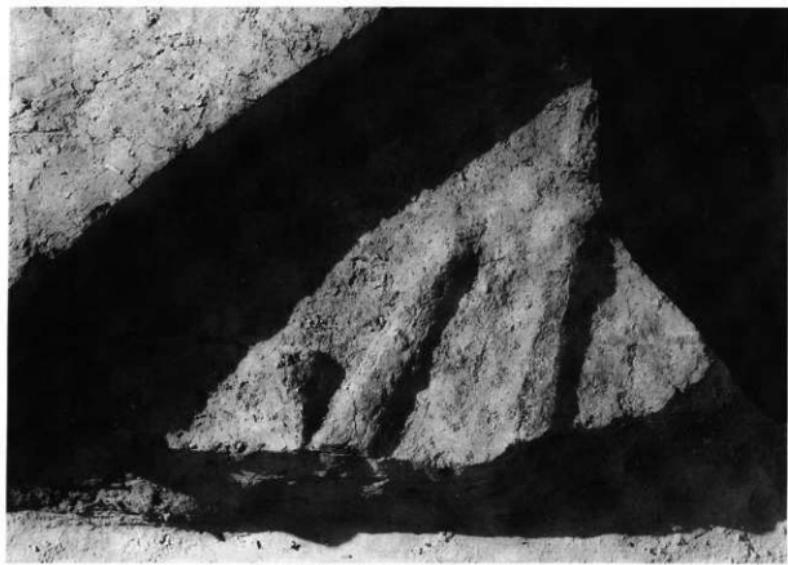
2. 2区遺物出土状況（326、西から）



3. 1区S P 479（南から）



1. 2区SB594 (東から)



2. 2区SB594部分拡大 (東から)

図版 22



1. 2区 S F 592 (北東から)



2. 1区 S D 499 (西から)



1. 2区SR203（南から）



2. 1区SR203土層堆積状況（東から）



3. 2区SR203遺物出土状況  
(278、南から)



4. 2区SR203遺物出土状況  
(280、南東から)

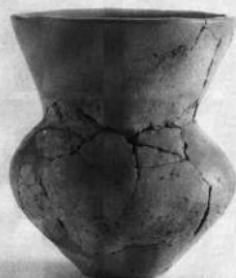
図版 24



285



260



287



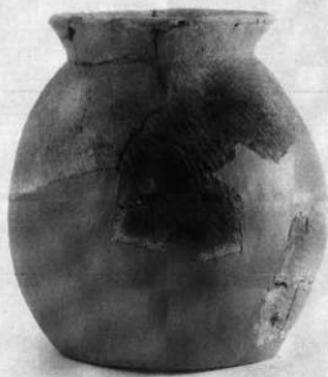
288



290



300



304

古墳時代土器 1



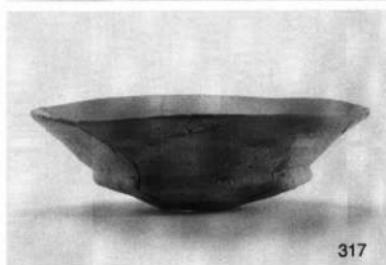
294



268



314



317



271



274



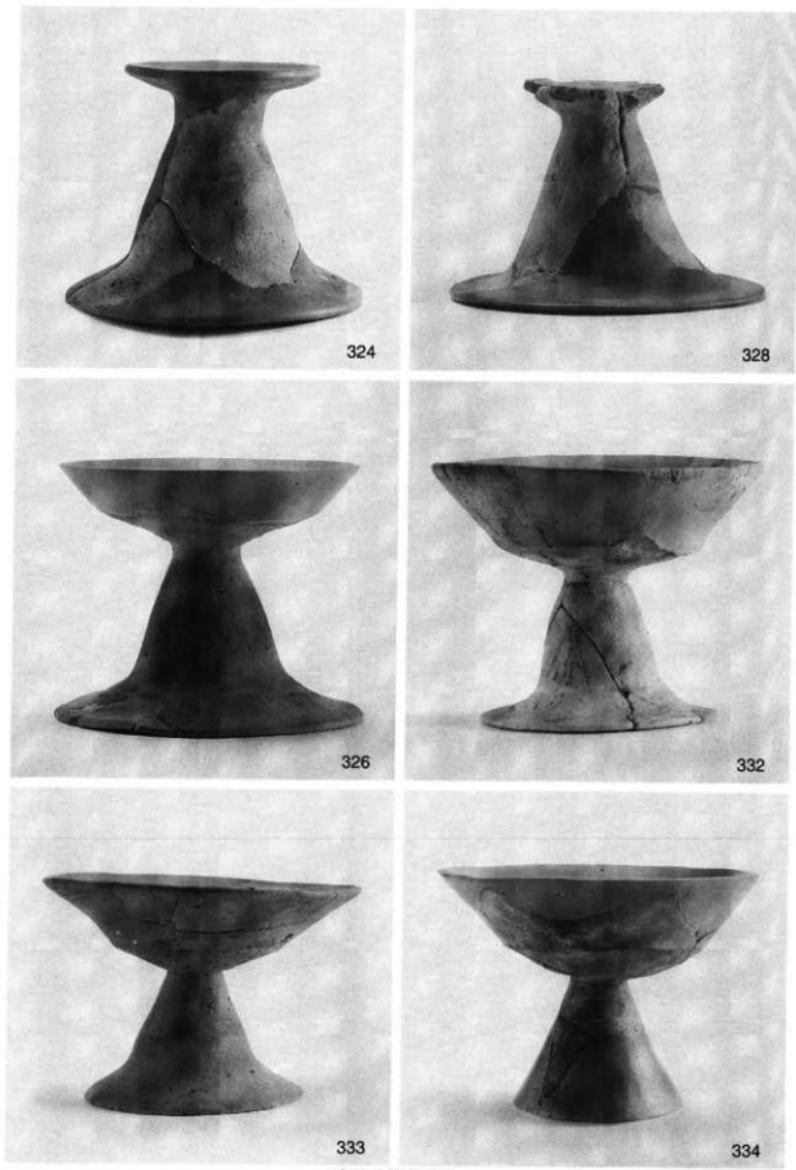
322



320

古墳時代土器 2

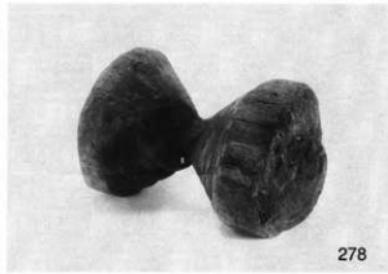
図版 26



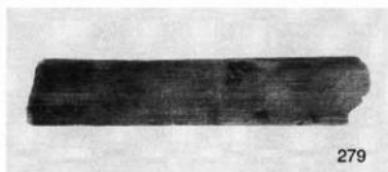
古墳時代土器 3



335



278



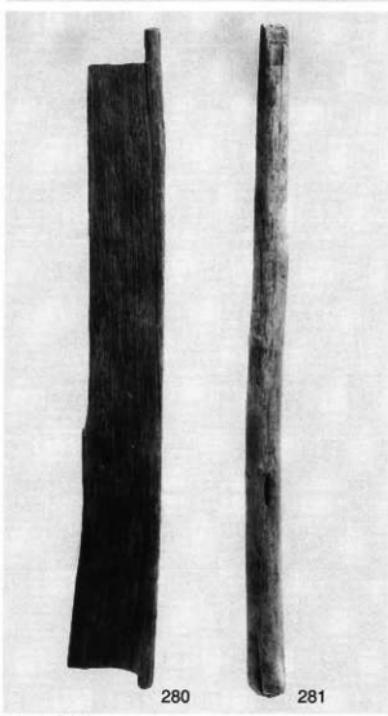
279



336



345



280

281

図版 28



1. 1区第3面全景（北から）



2. 2区第3面全景（北から）



1. 2区西壁土層堆積状況（南側半分、東から）



2. 2区西壁土層堆積状況（北側半分、東から）

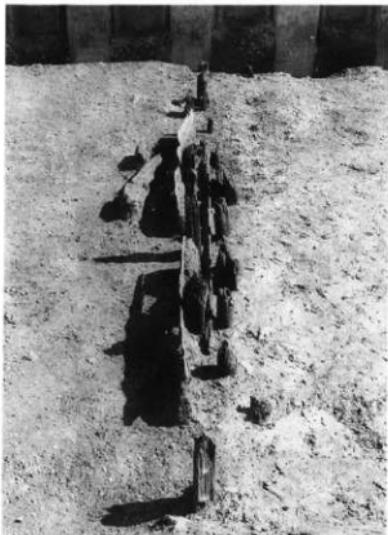


3. 1区SK855遺物出土  
状況（横樋、東から）



4. 2区SK855遺物出土  
状況（358、北から）

図版 30



1. 2区SK852 (西から)



2. 2区SA853南側の耕作痕 (北から)



3. 1区SA853南側の耕作痕 (東から)

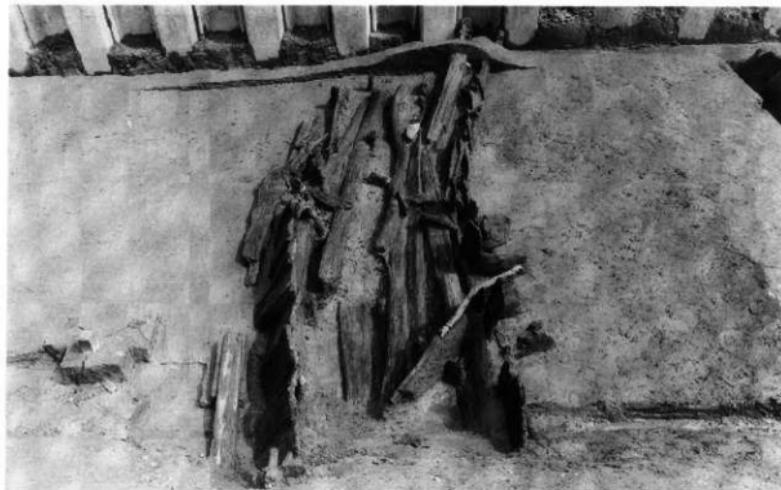


1. 1区 SA853・SK855・SA856 (北東から)



2. 2区 SA853・SK855・SA857 (西から)

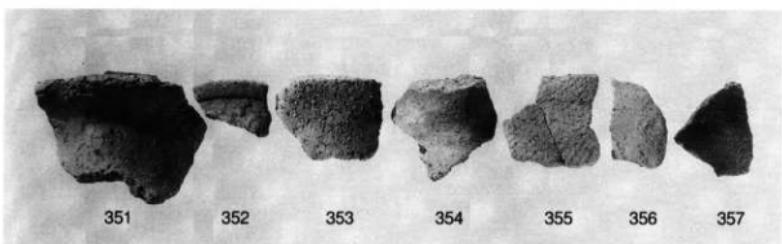
図版 32



1. 2区SK855解体状況（西から）



2. 2区SK855矢板列（北から）



3. 弥生～古墳時代土器



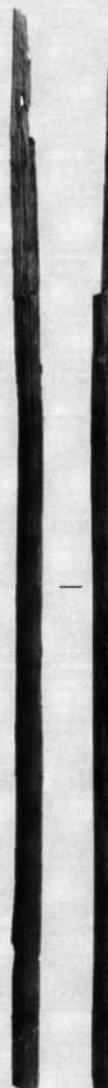
358



360



361



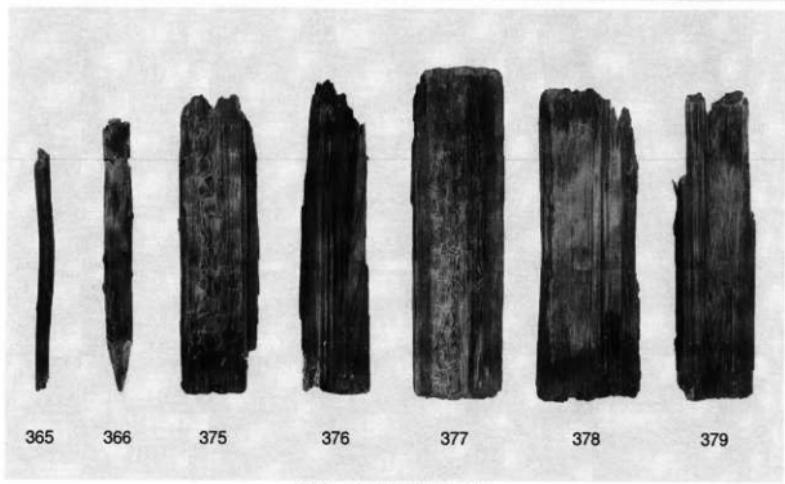
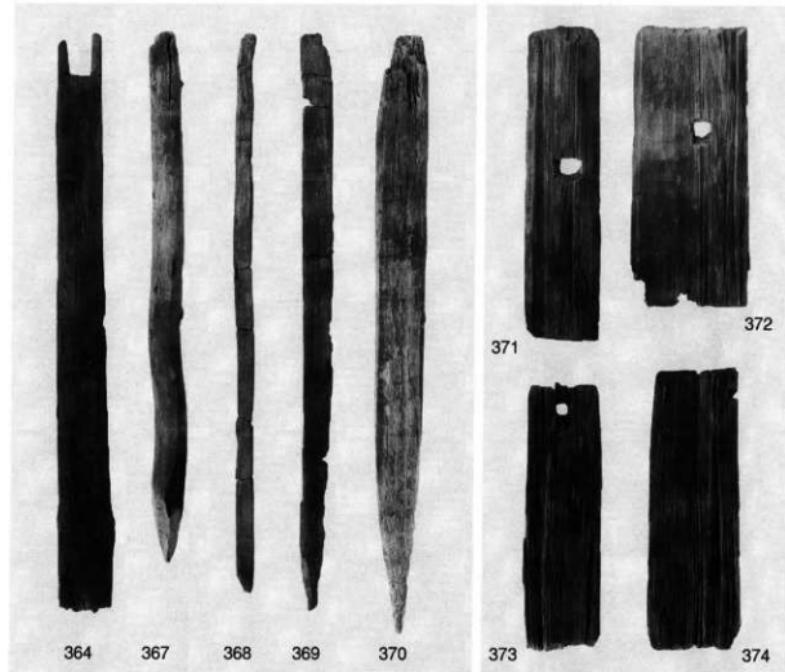
362



363

弥生～古墳時代木製品 1

図版 34



弥生～古墳時代木製品 2

## 謝　辞

現地の発掘調査及び報告書の作成にあたっては、島田土木事務所及び島田市教育委員会に大変お世話になった。また、下記の方々に御教示・御指導をいただいた。記して厚くお礼申し上げる。(五十音順、敬称略)

足立 順司 小野 正敏 坂巻 隆一 柴田 稔 岩野 雄康 篠ヶ谷路人  
鈴木 一有 中鉢 賢治 塙本 和弘 中嶋 郁夫 麻澤 良祐 村瀬 既彦

発掘調査参加者（順不同、敬称略）

<1区>

浅田 政雄 浅羽 淑郎 荒波 仙一 飯塚 清 池ヶ谷弥太郎 大畑 登  
倉島 福雄 樽林 芳郎 桜井 整 島田 上 杉本 民 富永 栄二  
萩原 村司 堀谷 澄雄 本間 英之 宮崎 和平 矢崎 秀之 山川 秀三  
大石 とめ 鈴木ちゑみ 仲安万千子 平松 五代 前田 弘子 水野八千代  
小澤ちゑ子 鈴木佐和子

<2区>

佐藤 秀夫 土屋 幸夫 花崎 功 密岡 仙治 森下市五郎 田中 浩  
依田 昌一 仁藤 幸司 密岡喜久恵 澤本 久子 八木喜久枝 渡辺タツ代  
相原 静子 三輪 幸子 鈴木 絹子 八木 恵子

整理作業参加者（敬称略）

遺構図編集・トレース：河西 淑乃（技術員）  
土器実測：海野ひとみ（技術員） 瀧 桂子 阿部 理絵  
土器復原：海野ひとみ（技術員） 笠井 昌枝 鈴木由美子  
石製品・金属製品実測：福島 志野（技術作業員）  
土器等トレース：河西 淑乃（技術員）  
木製品実測：川瀬由美子（技術員） 杉山久美子  
木製品トレース：川瀬由美子（技術員）  
遺物写真撮影：杉山すず代（技術作業員）  
樹種プレパラート作成：森田 直美（技術作業員）  
保存処理：和田 恵子 八木 純子  
事務処理：榎本喜代子（事務員）

# 報告書抄録

ふりがな	やざきいせき					
書名	矢崎遺跡Ⅱ					
副書名	平成7年度一級河川大津谷川河川改修工事及び平成11年度一級河川大津谷川住宅地関連公共施設等整備促進(広域一般)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
卷次						
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告					
シリーズ番号	第125集					
編集者名	青木修					
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所					
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市谷田23-20 TEL 054-262-4261(代)					
発行年月日	2001年3月30日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 調査原因
やざきいせき 矢崎遺跡	しづおかけんしまだし 静岡県島田市 おりあい 落合	22209	34° 51' 15"	138° 10' 57"	1995.11.1 1996.3.31 1999.9.1 2000.3.31	延4275m <sup>2</sup> 河川の改修 工事
所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
矢崎遺跡	集落跡	平安時代末～ 鎌倉時代	掘立柱建物跡 1 柱穴列 3 井戸跡 2 溝状遺構 11 柱穴群	灰釉陶器 国產陶器 山茶碗 舶載陶磁器 土師質土器 曲物 柱根 塔婆 橫櫛 漆椀 釘 砧石 陶錠	大津御厨に関連する集落跡	
	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡 1 土坑 1 溝状遺構 1 流路跡 1 柱穴群	土師器 須恵器 木錠 建築材	古墳時代中期の集落跡	
	水田跡	弥生時代後期 ～古墳時代	畦畔 杭列 耕作痕	土器 平鋸 横櫛 建築材 土木材	複数時期の畦畔を確認	

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第125集

## 矢崎遺跡Ⅱ

平成7年度一級河川大津谷川河川改修工事  
及び平成11年度一級河川大津谷川住宅宅地関連  
公共施設等整備促進（広域一般）工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2001年3月30日

発行所 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所  
〒422-8002 静岡県静岡市谷田23-20  
TEL 054-262-4261（代）

印刷所 株式会社ニシガイ  
〒424-0949 静岡県清水市木町12番6号  
TEL 0543-52-2188